

川柳の雑記

麻生路郎☆主宰



十二月号

No. 403

Pensoj flugas trans la land-limon
THE SENRYU ZASSHI

川柳雑誌社主催

忘年川柳大会

新春本社句会

兼題
自由
日の出
福引き
白髪

一九六〇年のさよなら句会です。
また川柳の顔見世句会でもあります。
一人のこらすご出席くださいませ。

日時 十二月十八日(日)午後一時
会場 大成閣(電話〇五二三八〇九番)
南区大宮寺町五丁目二六
(心斎橋大丸北の辻五〇米北側)

兼題 「煙り」(三句) 麻生路郎選
司会 黒川紫香
挨拶 松江梅里

席題 「才」(三句) 中島生々庵選
「祝儀」(三句) 市場没食子選
「舌打ち」(三句) 若本多久志選
三題(当日発表)

柳話 麻生路郎

支部對抗戦 各支部選手
雪月花句戦 出席者全員

呈賞 ☆各題三才・五客 ☆路郎選天位に不朽制賞
支部對抗戦優勝者・準優勝者及び雪月花戦一位の
組に川柳賞

余興 出席者有志
川柳福引き
会費 百五十円

★投句だけの方は郵券三十円
同封(〇切十二月十六日)
★忘年懇親宴一閉会後・同会場で会費五百円

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

電・住吉〇六〇八一

日本盛酒坊

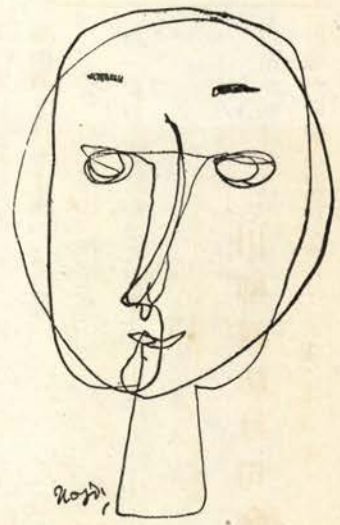
和やかに 一杯

東京酒坊・八重洲口名店街
大阪酒坊・御堂筋道頓堀橋南詰



灘の清酒
二ホンサカリ

歳末に



★一九六〇年もまさに終ろうとしている。割り切れば死があるのみだ。その意味から云えば何かを残しておくべきだと思う。合理化と科学の世界にはもうあきあきしている。いくら割り切れるものでもない。永劫は割り切れるものではない。科学の世界も月へ行けたからと云って、それが何んになるものかと云いたい。私たちは現在を、最大級に享樂すれば、それでいいのではないか。

★川柳の世界は芸術的に観てどれだけのびたか。ふりかえってじっくりしたものはないか。

★しかし、親が子を思うような眼で観れば、全国柳誌のそれぞれが、幾分か上向けになつたように思う。中には思いがけなく背だけがのびたような感じのするものもないことはないが、それが果して今後どれだけのびることか疑わしい

★ここ数年を顧みると、明治から大正へかけて活躍をほしいままにしていたベテランが、秋の落葉のように散つて行つた。それは私たちにとつて無限の淋びしさを感じさせるが、自然の法則は私たちの世界にだけ甘いわけではないからあきらめるより仕方があるまい。

★とりのこされた私達は残照として最後までの努力を惜しまず、次代への礎石を築かねばならないし、これをうけ継ぐ若い人たちは真冬の厳しさに、たえしのんで春の芽生えに、躍進又躍進を続けてもらいたいと思う。

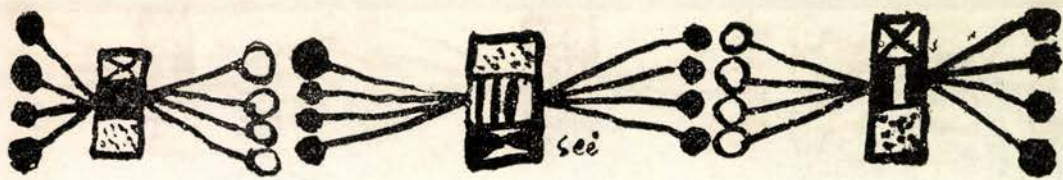
★私たちは若い人たちの、奔馬のような躍進を期待すると同時に、行き過ぎたと考えたら、これまた引き揃えずに、勇敢であることをのぞむものである。

★芸術の世界に於ける足踏みは禁中の禁であることを、歳末にあつて特に警告したい。

(路郎)

川柳雑誌十二月号目次

★ 不朽洞句帖	藤田古方	(11)
怪談・公明選舉	東野大八	(12)
歳末	麻生路郎	(3)
川名句と難句	麻生路郎	(10)
句評・セックスの句	清水白柳	(14)
歳末 入つた金・出た金	半休・味平・方大 梅志・阿茶・一天 香林・三司・三天	(16)
輝やく巨歩		(18)
前田雀郎自選川柳三十五句	R・H・ブライス訳	(31)
★ 句評に寄せて(七面山)	★ 友の会の皆様へ(阿茶)	(40)
句評リレー	貴山・柳児 白・香・日本村	(25)
★ 川柳書架	★ 現代柳人録	(13)
病潮 逝く	須崎豆秋	(27)
夜潮 逝く	富士野鞍馬	(28)
母二人養父一人	足立春雄	(15)
羽田を発つて	市場没食子	(34)
方正さんの思い出	戸田古方	(30)
絵と川柳で表現する歴史	すむ・舟遊・満秋 弦月・薰風 菊沢小松園	(28)
山陰の旅		(32)
不朽洞の人々		(39)
川柳 塔	★ 麻生路郎選	(4)
同舟近詠	諸家	(9)
近作柳樽	麻生路郎選	(20)
金泥集	北川春巢選	(20)
各地柳壇	麻生菰乃選	(40)
柳界展望	★ 不朽洞会から	(38)
一路集	「連れ子」 「觀光」 「サイン」	(36)
★ 路郎メモ	後藤梅志選	(37)
▼ ベンの散歩	西尾榮選 長野井蛙選	(39)



川柳塔

将来を易者ごときに意見され

大阪市 正本 水客

出世せぬことも自慢の一つにて

実行力のある末の子がほほえまし

いつやめてもいい気楽さが折りあわず

大阪市 丸尾 潮花

三越へ冬の仕度の姉いもと

伊達巻のまままで風邪ひき起きてくる

大阪市 西 いわを

かかり湯をはじき飛ばした処女の肌

京都大徳寺にて

苔蒸して抹茶の乙女八等身

堺市 八木 摩天郎

落選の日から新聞断られ

戦後派の人こそ知らぬ藪の味

全学連になれとて母は育てしや

殺された政治家ばかり名が残り

大ボスと云われた親父リユウマチス

岡山市 武部 香林

商人でよかったテロに縁遠く

二三本白髪をぬいてみたものの

夜行車に女帽子のまま眠り

ひよろ長く伸びてどの子も親に似ず

斗病を訪えば寝たままよくしゃべり

大阪市 北川 春 巢

ハワイ 築山 快夢起

愚痴ばなし聞いて貰える人が欲し

皇太子殿下御渡米

日の皇子にフラの所望もありつらん

官約移民渡航七十五年祝典

血と汗と涙を深い皺に見る

末世汚濁紙衣の祖師もおわせしに

自衛隊イザともなれば辞職です

大阪市 須崎 豆 秋

灯がついている秋の夜の手術室

チャルメラが風の向うの向こで鳴り

ホノルル市 羽佐間 柳葉

理想説く間に芳紀過ぎ去った

月給日酒場の埃吸いに寄る

豆撒けど心の鬼は逃げません

堺市 吉田 圭 井 堂

ともかくもヒスれる武器のある強味

将を射る粗品と知らず助言する

残高が丁度の無心聞き乍ら

へそくりの株が子を生み孫を生み

少々は飲めと言う医者探してる

床の間に端然と座し貸せと言う

うまいこと言うはず香具師の口うつし

釣れるのへ話しかければ向をかえ

防府市 長野 井 蛙

豊中市 戸田 古方

順番に鼻をみているうちに着き

大阪市 西尾 栞

台風ぐらいか相手になつてくれるのは

効きすぎたかと両親の瞳が出遭い

飛躍した譬え話で言いくるめ

大阪市場 没食子

労組の選挙も裏でゴチャゴチャし

春雄博士帰朝

心ブラで買ったのは偽の抱ッ子ちゃん

帰朝の眼日本は狭いなと思ひ

祈 方正博士の快癒

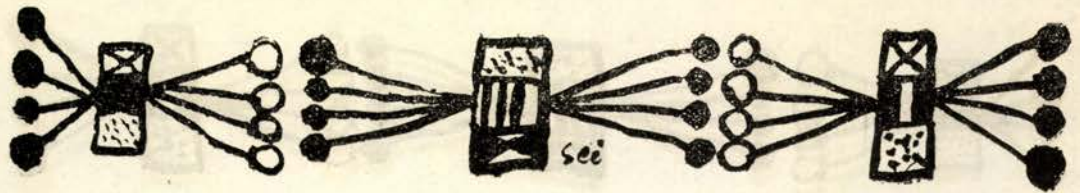
万一を祈る奇蹟がまだ見えず

オートバイが欲しい子供へ母おろろ

口笛が吹けぬ入歯にあわてたり

肝臓が肝臓がと言ひ訳して廻り

飲んどかにやもう十年かそこらです



岡山県 直原七面山

カリカリと氷を噛んで妻若し
烈日の下に声なき墓碑の群

生活展我が家のみすほらしさが判り
象のような方ねと姦らに頼られて

御清潔でいらっしやいますわとおちよく
車窓から雑誌を捨てている若さ

トビがタカ産んで学資に行き詰り
気まぐれに声かけたのが犯人だった

鳥取市 河村日満

下駄履きの詩人もきてる今日の月
秋からの抜け毛下地が見えはじめ

先生のお酌で飲んで子を頼み

豊中市 足立春雄

選挙まえ一寸そこまで来たついで

皇太子夫妻訪米

日の皇子は昔のままに迎えられ

一世は涙でうるむ眼で迎え

倉敷市 木村千容

でかい口あけて歯科医を信じきり

敬老会まだ出る気にはなれませぬ

加賀市 野村味平

この靴の寿命知ってる靴直し

映画を観に行く金を借りられる

落鮎へ膝の痛さも忘れられ

大阪市 木村水堂

主役だけでは芝居なりたたず
工場になるとも知らず稲穂り

おつもだけ重役なみに禿げあがり
ブドー酒を酌いで酌がれて睦しく

高槻市 福田丁路

一瞬のためらいも無く人を刺し

つまりその何んですナーと瘡を匂わせ

肘鉄砲喰ってよろめくトトカルチョ

大阪市 真鍋一瓢

妻の小言今じゃ枯淡の味もあり

横縞へ女ノッポをかくした気

大阪市 後藤梅志

尾崎方正博士の告別式

極楽へ瘡のガの字も聞かず行き

郵便の遅配をさせて寝られるかね

十五夜のすすきを提げて父帰る

借家まで相続税にみなとられ

米子市 小西雄々

愛人の子が臨終に来てあわて

ばん歌よりマルクスよりもデート好き

芋蔓も食べた記憶のキノコ雲

愛嬌がよくてもなじめない税吏

大阪市 山川阿茶

蠟細工味の見本になっていず

賞与だけ貯める計画もう崩れ
割引の極へ市会議員の名

薬好きの子にもいささかノイローゼ

加賀市 那谷光郎

血を売って蛸配にも似た生活

台所の火鉢ちくはく同士の添い

団欒の隅に母だけ縫いつづけ

母さんも恋愛だったのは口が過ぎ

鳥取市 大西八歩

居住いを直し女は軽くにげ

女房の手紙さすがに行きとどき

入棺の姿で五右衛門風呂に入り

岡山市 浜田久米雄

もう金の這入るとこなし十二月

かみそりを研がずに当てる十二月

風邪引いたのは知っている十二月

岡山市 逸見灯竿

大阪がまだ来んけれどと飲み始め

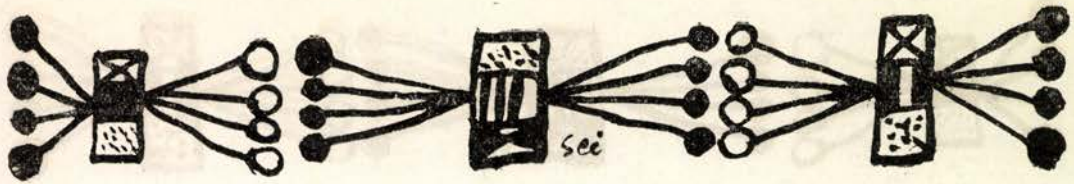
日向ぼこのように警官辻に立ち

出雲市 尼緑之助

家庭ともなれば女にこずかれる

大阪市 水谷竹荘

飲み仲間女の要らぬ顔が寄り



横丁を派手に出て行くチンドン屋

鳥取市 杉谷湖山

老いの意見黙殺されて一人ぼち

さればとてふだん着のまま嫁かされず

京都市 大鶴喜由

たかがおしべとめしへのたわむれを

肉程に心情はいとしがられてず

チャンスもなく胸にたたんだ好きな人

ここで反抗せねばばいたにされる

十円もするんだ拾うて又食わせ

性的本能に動いたまでを罪にされ

尼崎市 小林文月

宮島にて

バスガールも乗客となるロープウェイ

広島にて

原爆というものの戦後の子に教え

奈良県 飯降白香

夜の山荘蜘蛛の影にも兢兢と

三回忌集る顔も変ってき

ことごとくに女甘えるコツ覚え

奈良県 西辻竹青

定年と言うのに末っ子おむつ巻く

乗合のバスでも不義は目をくばり

自殺する勇気のあるにワイロ取り

久方のカメラへ妻の和服着る

呉市 林野甦光

あれがあれがとは主人の事を云い

金のない証拠に夫婦やせて居る

岡山県 福島鉄児

死ぬ程の恋してみたし老らくの

愛情の告白上気納まらず

二等車の説明もして母を乗せ

岡山市 服部十九平

バッテリーとトイレで会って祝辞述べ

日当を出して祝賀の人を寄せ

体温計仮病へ斟酌してくれず

尼崎市 長谷川三司

冷いでしようと皺の掌を握らせる

大声の話し長靴同士なり

六十の酔えば昔の酔虎伝

六十の涙は頬をつたわらず

兵庫県 若林草右

幕張って九尺二周でクラブ振る

お彼岸へお墓月賦で買う話

高知市 大西迷窓

秋空のように澄みたいなと思ひ

妻と顔見合す程にこましゃくれ

山羊の居るところで子供を探し当て

岡山県 田村藤波

無慙にもなき倒されし曼珠沙華

曼珠沙華何処まで続く土手の赤

お地藏も握ってござる曼珠沙華

児島市 本田恵二郎

枯すすき一本添えて秋を撮り

紐つきと聞いてチップが惜しうなり

人並にさんま焼いてる独り者

面白くなりそう隣の痴話喧嘩

倉敷市 松村万古

沼さんに弔意株価は滴ほど

遊ばせる金は持たぬと意見され

岡山市 津田麦太楼

代議士のハガキ豊稜賞めちぎり

文功に孤高の椽の米寿栄え

落鮎の丸ずし故郷の味想う

堺市 高崎雄声

騙されて皆がサクラに見えてくる

清涼飲料ティンエージャは色でのむ

善人の目に刑罰が軽すぎる

低音でまんまと金を借られたり

岡山県 永松東岸

買った物忘れて帰るにわか後家

失明の人の握手の固いこと

うずたかく栗の皮あり妻の留守

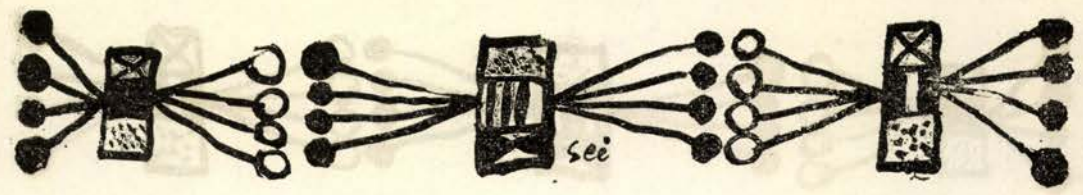
倉敷市 野田素身郎

二人掛りで孫の機嫌をようたらす

叱る役ばかりをパパに押しつける

人事課のミスらし僕が栄転し

妻にまた手数をかける植木買い



合理化が過ぎて潤いまでなくし

本人はなおるつもりで入院し

大阪市 伊達 塚子

河豚仲間供花一对で顔出さず

似てる筈あとへ息子の踏切番

閉めますと秋篠寺の暮早く

大阪市 不二田 一三夫

秋の夜をとしより三人壺のはなし

浅沼稻次郎氏刺殺

機関車をたおし石ころだけ残り

兵庫県 酒井 ひか平

台風は封じましたと教主さま

おいおっさん文句あるかと十八九

パレタカ残念観へ言うせりふ

殺す練習して来て殺す恐ろしさ

岡山東 池田 古心

作らないアナに豊作教えられ

見つけたから悪者にされ

大阪府 早川 清生

日本の子ひと疑えと教えられ

悪相に生れて撮影所に勤め

蚤いると言えずお通夜の足を掻き

裏切られても裏切られても宣教師

伯備線

岡山市 武部 若菜

山深くなり車窓に見る墨絵

堺市 辻 圭水

代表が話益々こじらして

強気ですドアをビシリとしめて行き

大阪市 児島 与呂志

夜の長さテレビの子等を又叱り

抱っ子ちゃん連れて橋筋よく喋り

岡山東 野々 口美舟

売り込んだ顔がテレビからはみ出

姑の胃病重曹でも治り

西宮市 小浜 牧人

中年の焦り秘かに株を買う

草野球チビは四球で出るつもり

切株に腰を下ろせば秋匂う

大阪市 菱田 満秋

今月は赤字と云える気楽さよ

山陰に旅して

旅なれやこわごわながら馬に乗る

くたびれて砂丘の広さ認めたり

修学旅行すっからかんで戻ってき

兵庫県 前川 左文字

病後の大地ハイヒールに越され

会計は誰が持つのか爪揚枝

大阪市 橋高 薫風子

銀行の橋相続人が無し

つつ立ったままで物云う弟子になり

病人の長い手紙もあわれなり

大阪市 榎本 蔭児

妻若しコーラスなんか練習して

米子市 石坂 新雪

そろそろと散髪してと云う毛並

鮮人を母ちゃんなどと言うて呑み

大阪市 西川 晃

ゼニのこと忘れるとわいも哲学者

夢遊病ではない詩人の散歩

強請かと思つたら警察手帖だし

釜ヶ崎風景

なんで笑ろたかとおかま目の色を変え

よお盗つて来たと子供のお頭撫で

岡山市 林 葵丘

農薬で蝗もおらぬ故郷淋し

道祖神明治生れか供物あげ

インテリの弱さは自殺しか知らず

神戸市 仲 どんたく

早乙女もキサスキサスで苗を植え

赤い羽根チロルハットへ伊達にさし

歌ばかり歌うてくどく手を知らず

プライドをマネーに替えたパー勤め

平田市 久家 代仕男

篤農とおらが田の穂と比べて見

秋ともなれば農夫買いたい夢がふえ

ブランコが大きく揺られて椎が落ち

夏服で秋風を蹴る施設の子

大阪市 本多 柳志

回顧十五年

ヒロヒトは神でなかったソフト帽
ハンドバッグ婦警は手錠パフルージュ

代議士でさーます紅い唇を曲げ

帰還して我が法名を拝まされ

軍神になれず巢鴨の虫を聞き

出雲市 原 独 仙

ベレ帽で鬢の白髪は隠されず

乗り合いのおばさん族のがめつさよ

大阪市 大谷 月 都

全て良し全て良しとて無理に眠る

歳とった車掌律義な鉄入れ

岡山市 江 国 幽 谷

商魂で固めたようなお辞儀をし

課長席彼の電話をきくばかり

岡山市 光 好 陽 子

出勤簿彼女と同じ日を抜かし

労組の御都合主義が気に入らず

縁談がきまってからのしとやかさ

西宮市 野 呂 鶯 江

母の愛自分は濡れる傘をさし

名月へふと尺八の音が聞こえ

西宮市 樋 口 舟 遊

大山寺霧にうどんがぬるいな

出雲族巫子の素顔に見つかり

新潟県 高野むじな

一姫を本人だけが喜ばず

羨やまれる勤口でも不平持つ

親の欠点を数える子に育ち

高砂市 吉原 紅 月

浅沼氏刺さる

警察も右翼も同じ紐がつき

菊人形みんな俵せそりな顔

大阪市 欄 蘭

街路樹へ雨は詩情のある如く

真相を知る証人が一人死に

大阪市 石倉 旅 風

ひとの発つ船も見送る港の子

気質まで当てる小児科信じられ

大阪市 魚 住 満 潮

続西成界わい

膝に手を置いて赤線去る女

執行猶予に検事もほっとする

口ぐせの鰻まむしも喰はず死に

これ貫ろて行くと布団に手をかける

「街を明るく」そのポスターの下で凍死に

大阪府 林 昌 男

儲かった話私服の耳が立ち

結末を急ぐ師走の原稿紙

厄年を消極的に暮れかかり

愛媛県 村 上 旭 童

ためている噂の中の嫁かず後家

ストしたら役がしんどいとも申し

男親だけやせたまま秋になり

倉吉市 大前 鳴 枕

ブドー酒の女組から隠し芸

勉強はビリだが競馬ほど走り

鳥取市 北村 三 歩

気安うにうちの社長と同期生

大阪弁砂丘ぐらいに深呼吸

ふり向けば反対したのは俺一人

神戸市 傍 島 静 馬

社を辞めてわが小ささがわかり

筆不精同士親友それでよし

質草に良いとはカメラ知らなんだ

笠岡市 木 山 遠 二

歯が抜けて近寄り易い顔となり

老の皺自分もああかなと思ふ

布施市 森 下 愛 論

大和路を訪うて茶粥におそれいり

岡山市 宗 高 矢 寸 志

クラス会で商魂笑い草になり

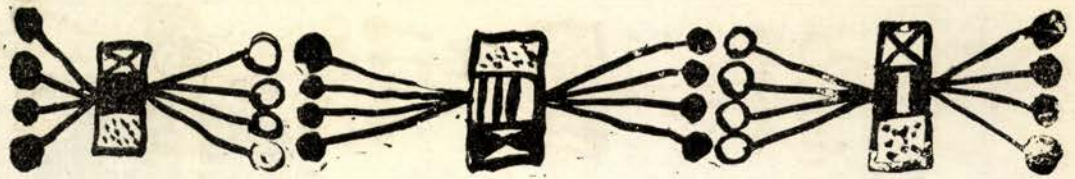
冷たい家庭テレビをかける子も居らず

フグ鍋へ怖くないのがよくしゃべり

大阪市 河 井 庸 佑

参観日うちの子喋らずじまいなり

ショックショックとたいそうな女高生



いれるものいれずやりくり下手と言う

大阪府 谷 沢 好 祐

朝寝さえ出来ない貧乏性なるか

会葬の時だけに要る名刺です

泉大津市 高 津 徹 也

絵の筋はともかく子供の元気なクレヨン

愛媛県 榎 紫 光

面当ての浮気さっぱり燃えて来ず

裸でもよいと貰いはしたものの

青森市 工 藤 甲 吉

日本に風呂敷というものがあり

近所みなテレビをもつて元の仲

なんでももう永井荷風のような人

テレビの影響ビストルをねだられる

悼 浅沼社会党委員長

声色もかなし「浅沼稲次郎」

西宮市 門 永 三 舟

分家したとたんに家の当が無し

言訳はせず好物をさげて来る

玉野市 伊 原 明 林

叱りよいとこへ女房はいつも居り

歌だけははやりについてゆく我が家

添い遂げて浜辺の月に用がなし

大阪市 藤 村 梨 花

稀少価値の紅一点と思えども

叱られに来た瞳で生徒ドアー押し

ソブヲノでいきなり住所姓名は

松江市 小林 孤 呂 二

ピカソに似た子の絵をばほめておき

抱負など語らしこれほちの記事

神戸市 室 田 千 尋

手品してしてえとアルサロ嬢にもて

切り様で四角にもなる意地を持ち

豊中市 林 夢 虹

帽子の大きさでも父にかなわない

世辞を言う人なり世辞を好む人

堺 市 吉 本 菁 風

ヘルメットかぶり言葉が荒くなり

妥協すりゃ裏切者になって居た

週刊誌を本当にしてる女の子

西宮市 山 本 一 傘

ここは阿呆になってと斗志更になし

生憎くと君ほど腹が減ってはず

悪筆も五十になれば五十の字

高知県 建 沼 康 之 介

借金も分けてやらあと愚痴な兄

元村長来賓席で咳をする

大阪市 今 西 生 薑

近親感汽車三等の膝がしら

紅一点と云う時の女凛として

京都市 室 井 八 九 寸

年寄りを疲れさせてる慰安会

食べてるのも撮され九月十五日

秋晴れや窓窓窓はみなオムツ

おいたする猫捨てさせぬ泣きじゃくり

同 舟 近 詠

大阪市 石 田 沐 天

なんでやと云う顔でヌマさん殺される

黒々とダッコは寒く売れ残り

須坂市 高 峰 柳 児

案山子みすほらしく豊作の田に果てる

筋通す癖で貧しさつきまとい

スカートの照秋風にまだたえる

今治市 長 野 文 庫

うまくなし膝も崩せぬ一級酒

青春の意気暴走で発散し

暇なのが買って出てる整理券

政治家も露骨に金のことにふれ

暇と金ありて自動車試運転

和歌山市 秋 月 宏 方

日曜大工きえんあげてるホームバアー

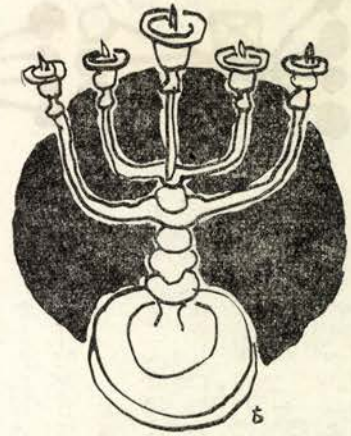
そろばんの歴史丁番から続き

新居浜市 月 原 宵 明

吊橋の中ほどに来てポーズとり

療養のひとりが降りる萩の駅

満月や満月や刑務所の高き塀



川柳 名句と難句

麻生路郎

〔一〇二〕 ああしんど上京中の標準語

(多久志)

上京した際、地方語で喋ることは、ウシと老人でないかぎり、歯切れのいい東京弁に対する劣等感から憂鬱を感じ、出来るだけ喋らうとしないものだ。それを幾らか救ってくれるものに標準語がある。それで、どうにか滞在中の用件だけは果たすが、何と味気ないことだというのである。上京する人たちの斯うした心理を巧くつかんでいる。

〔一〇三〕

ロケットのそれから月が俗に見え

(静馬)

月はもと詩人であった。イヤ詩人のころであった。それが科学万能、何ことも合理的の化け物みたいな世の中となった。ロケットがうちあげられ、月への道が、

ほど遠いものでなくなったので、月が俗っぽく見えるようになったと、月への思慕がこの一句となった。

〔一〇四〕

つんぼうと話せば自慢ばかりされ

(東岸)

この句を一読すると、なるほど、それに違くないと誰しもがうなずかずにはいられないだろう。これこそズバリと穿った句だ。しかし、このつんぼうの自慢はすなおに聞いてやるべきだろう。つんぼうはこちらの云うことが通じないので、そのつれ隠しにムヤミに自分のことばかりを喋るの

で、自分では自慢をしているつもりはなく

でも、勢い自慢話となるのだ。この句、古句張りの句ではあるが捨てがたい。

〔一〇五〕

お社の右も左もホテルの灯

(いわを)

この句は単にお社を中心にしたドヤ街の情景からうける印象は何んとなく、旅人の旅情をそめるものがある。往きこう女たちも夜というペールの加減もあって美しく見える。急がない旅なら、そこらでパイということになるだろうし、少しきこし召し

たら夜のトリコにもなりかねないだろう。この句の表には人ひとり登場していないが、この句を一読すると、そこらを右往左往している人の動きやホテルで享楽に耽ける人たちがまるで浮びあがって来るのも表現の力であろう。

〔一〇六〕

颯爽と和尚單車で来て念じ

(日満)

和尚という概念は、天地がひっくりかえっても動かないでカンラカンラと笑っている人のように思われるのだが、近ごろでは

ボヤボヤしては、日干しのサンマになりかねない。そこで單車でお経を配達して廻ることを詠んだのである。この句を見ても時代は移るの感が深い。

もともと、お経は静かに、しかもリズムカルにあげるべきものだと思っていたのに、それをバタバタと單車で来て、あわただしく念じる、そのムジユンさを衝いたのである。

〔一〇七〕

下痢をしながら枝豆の禮を云い

(きさ子)

「昨晚は、おおきに、お蔭さまで、たいへん、おいしくいただきました。」と、礼を云っているが、その実、まだ下痢が止まらないのである。

下痢している人には気の毒であるが、この句からはユーモラスな感じと、ほんとのことが云えない人間の弱さを思わされる。「おいしく喰べたのに、それから下痢をしましてな。まだ下痢が止まりません」では二度と貰えないのは別としてエチケットに外される訳か。日常些煩事のことを巧みに捉らえている。

〔一〇八〕

バスガイド名残り惜しそな顔でな

(真奇)

観光バスが一日のコースを終え、始発点

へ無事に帰還すると、

「皆さま。本日は有難うございました。お名残り惜しうございますが、ここでお別れいたします。」ピリピリと笛を吹くのであるが、その顔を見ると、別にお名残り惜しそうな顔でもないというのである。営業用のお名残り惜しさであることを喝破したところにこの句の面白さがある。

〔一〇九〕

掃く塵ものうて淋しい夫婦きり

(一休)

こどものいない老夫婦なのであろう。終日誰も来ない。ホコリも立たない。大きな声もしない。夕刊を読んだら、もう寝る仕度。平和ではあるが何んもなく淋しいというのである。なすこともなく暮らすよりは忙がしい忙がしいと云って暮らす幸福さが思われるほどの静かで忙がしい生活が詠まれている。

〔一一〇〕

馬鹿な真似墓石へ名刺おいてあり

(文庫)

奇抜なみつけどころの句だ。故郷へ錦を飾って帰った人と仮定しよう。既に亡くなされた恩師の墓前にぬかずき、「先生私も、今はこれだけの人間になりました」と生きた人に物云うように、肩書のでザリならんだ名刺を墓前に供えたのであ

ろう。それを第三者から見れば、たしかに馬鹿な真似には違いないが、その真情には動かされるではないか。

〔一一一〕

お正月和服洋服着ちらかし

(方大)

サラリーマン生活が浮彫りされていて面

不朽洞句帖

麻生路郎

時代だよ蟹と戯むるひまもなし
ポタン押す一歩手前か日本に住めば

首つる手あり 泡は消ゆ

清貧というも蒸溜水の味

革新も革新として老衰す

帯封文学お尻がちよっと痒くなり

白い。平素は寝巻から洋服、洋服から寝巻の暮らしたが、さすがに正月ともなれば、和服を引っぱり出して、炬燵へも這入る。そこに「和服洋服着ちらかし」の生活が見られる。

〔一一二〕

ふるさとのここに半鐘があった苦

(ひか平)

ふるさとというものは母のふところとなじで、なんとなく、ほのぬくいものだ。あそこに白壁の土蔵があった。相合傘の案書もあった。後年ふるさとへ戻った人はい何から何まで思い出の種でないものはな

〔一一三〕

揚幕で出を待つ馬がくしゃみする

(阿茶)

芝居の馬で出演する俳優。五年十年舞台を踏んでも、観客に顔一つ見せる訳ではない。火の気のない奈落から、花道下の通路を通過して、揚幕で出を待っている馬が、くしゃみをするを詠んだものであるが、馬がくしゃみをする筈がなく馬に扮している役者が、寒さにふるえてのくしゃみであることは云うまでもない。その労苦に同情をした句なのであろう。

〔一一四〕

本人はほったらかしの祝賀会

(七面山)

米寿の祝賀会のように、祝賀される本人が老境である

とか、選挙に当選したが、疲れから、祝賀会には顔を見せられない人のような場合であろう。ご本人を放ったらかしにして、乾盃をし、あとは飲めよ、唄えよの祝賀会となる。顔の広い人は時々こんな会にぶっつかれるものだ。穿ってはいるがズバリというほどの鋭どきはない。

〔一一五〕

新築に米でせしめた軸を掛け

(圭井堂)

農家の新築であろう。戦中戦後、米はあらゆるものと交換された。どんなに高価な軸も、軸そのものが空腹を充たしては呉れなかつた。僅かな米の代償に、この句の場合の軸もせしめられたのである。作者の慧眼がこの句を生む。

ビールは アサヒ ゴールド

怪談・

公明選挙



東野大八

総選挙は終わった。お見かけ通りの結果で、僕としては何もいうことはない。ただ選挙に当って世にも奇怪な話がここにある。マスコミという量り知れない凶体の中で、こんな事実がどす黒くうずくまっていようとは……。これが前口上、本筋は以下の通り、まずはとくとお読み下されたい。

さる九月二十四日、私の県に新しい日刊紙が生まれた。紙齢八十年という合同新聞が別にあつてその上に新たな県紙誕生だから二つの郷土紙が出現したわけだ。前者をA、後者をBとしておこう。私はB社の報道部長である。(一県になぜ二つも同じような地方紙が生れたのか、それについては後次本文の中で明らかにしよう。)

さて総選挙。いよいよ告示となつた当日一人の男が私の前に現われた。西部劇の悪役みたいな、精かんでタフな面つきの男、名刺をみると県警本部刑事捜査第三課長、県警視察。

「実はですナ」
と彼はハツ手のような大きな両手をこすり合せて、鋭くみたいな眼をむいた。
「種々こちら側で協議の結果、おたくの新聞は選挙報道については一切取扱いが出来ないことになっています」
「ナルホド、当方もその点についてはよくよく検討しておきましたよ」
「候補者の名前はもとより、その政見、観測記事をふくめてあらゆる一切の選挙の報道記事は貴方の新聞の場合は掲載することが許されません」
「そうらしいですね、公職選挙法百四十八条でしょう」
「そこらは用意十分の先手を打って受けて立つたわけだ。以下はその後の問答である。」
警「何分、法令がその見解の目安に響いているもんですから悪しからず。」
私「山形県では、一年以上発刊していた週刊紙が日刊紙にきりか

報道は自由だったときいています。当方としては東京で数年間発刊していた同様の新聞を合併吸収して出しているの、その懸念はないと解釈しています。」
警「ところがそれはダメなんです。同県内の場合には山形県のケースで問題はないのですけれども、他県、つまり東京とこの合併ではそのケースはあてはまらない。その合併はイミがなく選挙報道はお気の毒ながらまったく許されないことになっています。」
私「選挙法にはその明記はないじゃありませんか。」
警「おたくになくてもこちらの手配指令にはその点はちゃんとダメが出ています。」
私「それや変ですね、山形と私の方と地区の合併に変わればその様式には日本国内である以上変りがないのじゃないですかね。」
警「実はくわしいそういう点が私にもわからないのですが、とにかくそういうことはダメなんです。」

私「では、それはそれでいいとしてですね、私は貴方におうかがいしたい。日本全国の一大行事としての選挙、国民の一人一人の生活につながる選挙、この重大な一にとは、一大トビツクニュースだと思つてですよ。それを報道するのがわれわれ日刊新聞社としては当然の使命であり報道の責任だと思つてます。日刊紙といつても、ご覧の通り立派な輸送機もあり、電送写真の設備もある。共通のヘルも三台おみかけ通り昼夜を分たず回っている。全国日刊紙に必要な諸設備はすべて完備しているこの私のいる日刊新聞社に対し、そういうシャクシ定規は通らないと思つてですよ。その上、A紙よりも公平にすべての記事を扱っていることは、貴方もみとめていられるでしょう、さきほど貴方もおたくの新聞は全く公正だといわれたばかりじゃありませんか。」
警「判つてます、むしろA紙より公平なぐらいです。」
私「それなら日本にとって最大、最高の一大トビツクスである国会選挙を報道するのはおかしくないでしょう。」
警「それがんでダメなんです。選挙法が厳として存在しています。もうしばらくおそく、そうです発刊して一カ月以内ならこのような制約はまったくうけなかつた。つまり他紙同様な選挙報道が思う存分と扱えたでしょう。たつた二十日ばかりおたくは早く発刊されたばかりに選挙法がおたくに適用される破目になつたというわけですよ。」
私「どうしてそういう差が生れるんですかね。私にはわからん。一カ月と一年のその自由という解釈が……。」
警「そうなんです。私もこの点が実はきもんなんです。」

私「いいですか、今日は重大な選挙告示の当日ですよ、それになんてですかこれは……A紙です。これがラジオ局開設をやるからつて、今選挙に立候補しているある人物の写真をのせている。いくら話では選挙のことを言っていない、でも、告示当日、立候補の一人である特定一候補の顔だけをかくもレイレイしく掲載していいのでしょうか。」
警「(無言)」
私「ついでに申しませう。さきの知事選挙の際、私はA紙にいてその幹部でした。ところが社長が新聞社長という肩書のまま、知事選挙に出馬し、新聞社という報道の利器を専断して選挙戦に臨もうとしました。記事はもとより、総支局通信部まで動員しての選挙運動、乃至は報道戦術です。私はそれに真向から反対した。八十年の社歴をもつカスミ網のような通信網をもつ県紙が、一個人の立候補の道具、乃至はその票集めの拠点に悪用するとは二百万県民をブジョクするも甚しいのです。随つて出馬するといふのなら、公正を期すべくハダカの一候補で出るべきで社長を辞任してこそ公正なものになる、社長といつても雇われ社長ですよ、といつたんです。でもその社社長いりあらずとも立候補切り前で立候補辞退を出しましたがね。ところがその辞退後はどうです、辞退するときの眼のカタキだった相手候補をたたき落すため、社長自らが筆を入れ、その側近に書かした三十三年にわたる中傷の長大なネット造記事の連載です。こういう事実が八十年の社歴をもつ日刊紙であるからというので大つぱらに許されていいのですか。公職選挙法第百四十八条はどこにある。イヤ、六法全書そのものはどこにその価値があるというのですか。」

警一（黙して答えない）
 私一さてその叩いた相手が僅票ながら当選した。社長は胸が妨害ない。かくて社長辞職出馬を妨害したとの理由で社員への弾圧となった。反社長派の発見というわけに社内的に選挙を利用し真正に転じた。かくて大幅な月給のベースダウンと、辺地への転勤。この怖るべきフッシュヨに抗して私はじめ四十六名が集団退社し、そして今のわが社（B社）を建設したというわけです。その公正な批判精神にもえるわれわれが、悪選挙葬るべしの肚の底からなる公明選挙を求めて今度の選挙報道にのぞむ、なぜ貴方たちはこうした良心的選挙報道をやるうとする私たちがいけないというのですか。

すか、率直に一国民としてのお立場でお答え願えませんか。
 警一ではハッキリ一口にいいましよう。公明選挙とは一切何も書かないことが本質なのです。朝日毎日、読売という中央の大新聞もふくめて、すべての日本の新聞は、この点公明選挙についてどれ一つ協力していない。むしろ違反している方で選挙法を冒瀆していると深辨なわれわれの立場からすればいいたいのです。それが許されていい、色々……。公明選挙とはこうなると大きな圧力のあるカベみたいなのだと私は考えたりしています。

実をいうと選挙公報ですな、全国各都道府県から出している立候補者の顔と公約、略歴ですね、あれも実際は公約は読めないんだが、特別の指示で許可され、それによって発行されているわけですね。
 私一カベではない、モヤでしよう。（笑）。カベならサク岩機やセンコツ機で何んとかアナの一つぐらいはあくでしようがネ。
 警一（大きく吐息して）ハッキリいって、わたくしでも公明選挙法なるものの正態が知れない。こうなると公明選挙というものは、しよせん姿も何もない空気みたいなものですよ。
 私にはわらった。やりきれない、それは声のない、くすぐりのような笑いであった。日本の選挙というものは、取り締る側も、取りしまられる側もこのようにとりとめもないものなのだ。まるでモヤを手で一心につかみとるように、に

もかかわらず公明選挙がにじむ御旗のように全国津々浦々にひるがあるか、だが現実には選挙違反が昨日も今日も当選決定をスタートにかしやくなく全国につづいて、いる。だが、一体この事実は何か、ということである。何によってそれが違反であり、逮捕であり、身柄拘留であるかだ。
 警視どの私は私とこうした話をして翌日、全国の立候補者名を新聞に載せたとはげしく詰問し、警告三度におよばば発刊停止処分にするといきまいてきた。そのおそるべき変貌。あまつさえ投書の中の一つにさえ「選挙論評」だと毒々しい赤インキで困って私の机上につきつけてきた。
 日本に正しい選挙はない。従ってそこに公正選挙なる言葉もあり得るはずがない。奇々怪々なる二十世紀におけるこの怪挙。私は「怪談」とあえて標題に付して公明選挙を嘆く所以はここにある。公明選挙とは、陽気のいい日に汚水の池に立のぼる湯気のようなものだと思ふ。哀れ日本には正しい選挙は、法的にも実質的にも存在しないところなのだ、今の私はそういう言葉しか持たせられない人間になってしまった。

もかかわらず公明選挙がにじむ御旗のように全国津々浦々にひるがあるか、だが現実には選挙違反が昨日も今日も当選決定をスタートにかしやくなく全国につづいて、いる。だが、一体この事実は何か、ということである。何によってそれが違反であり、逮捕であり、身柄拘留であるかだ。
 警視どの私は私とこうした話をして翌日、全国の立候補者名を新聞に載せたとはげしく詰問し、警告三度におよばば発刊停止処分にするといきまいてきた。そのおそるべき変貌。あまつさえ投書の中の一つにさえ「選挙論評」だと毒々しい赤インキで困って私の机上につきつけてきた。
 日本に正しい選挙はない。従ってそこに公正選挙なる言葉もあり得るはずがない。奇々怪々なる二十世紀におけるこの怪挙。私は「怪談」とあえて標題に付して公明選挙を嘆く所以はここにある。公明選挙とは、陽気のいい日に汚水の池に立のぼる湯気のようなものだと思ふ。哀れ日本には正しい選挙は、法的にも実質的にも存在しないところなのだ、今の私はそういう言葉しか持たせられない人間になってしまった。

句集 天氣晴朗

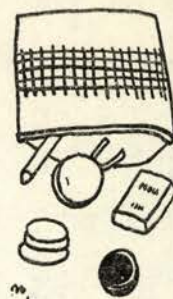
川上三太郎著

川柳探求

前田雀郎著

續
川柳書架
 (4)

- ★巻頭に「磨くほかない一足の靴である」の一句が挙げられている
- ★目次をのぞいて見よう。
- ★俳諧に於ける川柳の位置。慶紀逸と「武玉川」
- ★「柳多留」に於ける原句改作とその意図するもの。初代川柳の收入
- ★江戶時代の餘韻。米相。花屋久治郎と川柳。三等附が前句附を源とするという説に就て。榎良と笠附俳諧。川柳と俳句との訣別。川柳墮落の二因
- ★戦後書いたものの中から若干を選んで按排、一おう川柳の系譜らしいものをこの小冊の中に形づくってみた。即ち「俳諧に於ける川柳の位置」を総論というつもりにして、以下これに従い、その中に於て触れた問題を、一つ一つ詳しくするという編み方を心がけたのであるが、年代的に多少の渡ぎ切れを生じたので、旧編より「川柳と俳句との訣別」及び「川柳家北斎」の二篇を採ってこれを補った。
- ★昭和三十三年十一月十五日 前田雀郎
- ★昭和三十三年十二月刊。三三四頁。定価四八〇円。発売東京都文京区大塚仲町三六有光書房
- ★著者の川柳に関する研究は定評があり一読の価値充分。
- ★昭和十六年三月三十日発行。二〇〇頁。定価三〇円。発行所東京市王子区中十条四ノ九川柳研究社。
- ★大家の貫祿を示した壹々たる句集。三太郎氏の作風を研究する人たちは是非一読を必要とする
- ★次に目次の概要を掲げておく
- ★神国日本。征旗。河童満月。未完成交響楽。蒼蒼亭句箋。御題と前書きのある。雅鼓。
- ★昭和十六年三月三十日発行。二〇〇頁。定価三〇円。発行所東京市王子区中十条四ノ九川柳研究社。
- ★大家の貫祿を示した壹々たる句集。三太郎氏の作風を研究する人たちは是非一読を必要とする



評句 セツクスの句

— 前月号から —

清水白柳

彼には動物的反能しかなか
った

香林

香林さんの熱心な態度で句を考
えて居られるのにはいつも敬服し
て居ります、今月号の句のうち
で、この彼にはの句は何かを考え
させられます、ズバリと言いつつ
て、その底に人間性に対するレジ
スタンスを感じさせられるよう
であります、この動物的反能をセ
ックスとして考えますときに、ど
こか汚濁したようなものを感じる
のは私だけでしょうか。

けだものがまた眼をさます
夜が来る

妖人

このけだものの句はハッキリと
セックスの行為を現わして居りま
す、そしてそれが夜になると頭を
もたけてくる本能的なものを描き
出していますが、何処か迫力に欠
けているように思われますのは何
故でしょうか、それは余りにも、
すらすらと詠まれているせいでは
ないかと考えられるのでありま

す。

キス・ベッチングも知ら
ず青春悔もなく

白香

セックスの用語を使用した句で
ありながら非常に清潔なものを感
じさせられる句であります、セッ
クスに興味を感じないのではない
のですが、引込み思案とでも言う
のか、もう一步踏みこむだけの
勇気がなかったのだが、それで
よかったという、作者の安心感と
でもいうようなものを、青春悔も
なくと結んで居られる処に共鳴し
たのであります。

大膽な女体をかほうすり硝
子

星二

こんどはヌードであります、
近作柳樽の最後の句であります、
この句の女体をかほうというのが
よいと思いましたが、かほうではな
くてかかすでは下五のすり硝子が
生きてこないと思うのです、かほ
うというのですから、このすり硝
子も、専門的な摺りでなくて、半

透明な、ダイヤ硝子或は梨地とい
った型のガラスであつてもいいと
思います、それを概念的なすり硝
子という言葉で、結構いいと思わ
れる句であります。

組む腕のあながち恋に候わ
ず

喜由

ベテランの作者が軽いタッチで
描いた句です、あながちという動
かすことの出来ない字句を持って
来て居られるところに、この句の
生命があると思えます、盛り場の
舗道で小さいピラをもらって見る
と、電話だけでお伴をしてくれる、
コルガールというのがあります
が、そのコルガールと腕を組ん
で歩いている姿をうがった句であ
ろうと考えてみたのであります。

親しさが口説くチャンス
作らない

文平

都々逸の文句に「岡惚れしてか
ら随分たつが心安いが邪魔にな
る」というのがありますがこの都
々逸を句にしたらこの句になった

という程感じが似ています、都々

逸の方は言葉は古い、句の方は
新しい言葉を使っているのが違
い、と言ったら叱られるでしょう

秋来ぬと目には見えねど腹
が減り

弘道

秋来ぬと目にはさやかに見えね
ども、風の音にぞ驚かれぬるとい
うた歌を取入れた句であります
腹が減りとはよくつけたもので
す、食欲の秋を川柳にして見せた
のがこの句であります、いつも
こうした作爲的な句は成功しな
いものですから気をつけてほしい
と思えます、古句にはよくこうした
句を見かけますが結局は遊びに終
っていることが多いように感じら
れます。芭蕉の「古池や蛙とびこ
む水の音」を古句では「古池や蛙
飛びこみ浮いている」などと詠ん
でいますが遊び以上にはなってい
ないようです。

飲める時飲まなと焼香して
悟り

好祐

この句を読んだ時すぐ頭にきた
のが古句の「よく飲んだ奴さと棺
の前で飲み」かと「片棒をかつぐゆ
うべのふぐ仲間」という句でし
た。

この古句の現代版というような
句であります、焼香した時に悟っ
たという、うがちに身近かなもの
を感じさせられたのであります、
併しそれだけに着想の古さという
ことも、まぬがれないと言えま

す。

酒逃げて窓を流れる灯を見
つめ

潮花

やや甘いと言われそうな句です
が、そうとばかり言えないよさが
あります、飲めば飲める酒だが何
か心願の筋があるのか、医者にて
も止められたのか、宴会の席をは
ずして、窓辺に佇んでいるという
姿を描いて居ります、私は男性の
句として取上げたのであります、
これを女性として見ますと、竹久
夢路の画いたような構図を思い浮
かべるのですが、酒逃げてという
上五文字に男性を感じさせられ
ると思えますが如何でしょうか、

人を焼く煙を画家は青く塗
り

七面山

この句から受ける感じは、人間
の終焉を青い絵具に托している画
家の精神の非情さといったもの
であります、普通ならば灰色に塗
りそうな火葬場の煙に青色を使っ
たという作者のイメージを高く評
価したいと思えます、勿論人を焼
く煙も想像ではあろうと考えます
が、これ以上に具体的に解明する
力がありませんので、みなさんの
感覚におまかせする他はありませ
ん。

貧しさは邪教にすぎる金も
いり

宗太郎

この句の金もいりのもという字
一字に大きな比重があります、こ
れが金がいりとかになりますと句



母一人 養父一人

富士野鞍馬

百人一首養父一人に母二人

(タル一六五)

定家選の百人一首の三十六番に清原深養父、五十三番に右大将道綱母、五十四番に儀同三司母が入れられてある。それを発見して詠んだ句である。

右大将道綱の母

道綱の母は、光明皇后、衣通姫とともに、本朝三美婦といわれている美人であった。兵衛佐藤原倫寧(ともやす)の女で、入道関白藤原兼家の妻となり、右近衛大将道綱を生んだ。その頃は、女はその名を外へ出さなかったの、こうした呼び方をされたいたのである。

歎きつつひとりぬる夜の

明くるまは
いかに久しきものとか
はしる

これが百人一首にある歌で、「拾遺集」に、「入道撰政まかりたりけるに、門を遅く開ければ、立ち煩ひぬと云ひ入れて侍りければ」と詞書してのせられてある。

兼家に、もう一人の妻があつて(道隆、道長の母)その方へ、兼家の愛はうつた。その心情を綴ったのが、有名な「蜻蛉日記」(かげろうのにつき)である。

藤原道綱は、長徳二年(九九六)に、右近衛大将に任ぜられ、翌三年、更に大納言に任ぜられたのである。

御増官母方のある百人一首
おふくろを二人定家はすへて
置き
(タル三三)

と川柳に詠まれている。

儀同三司の母

百人一首にある儀同三司母の歌は、

わすれじの行末まではか
たければ
今日をかぎりの命と
もがな

というので、「新古今集」に「中関白通ひそめ侍りける頃」と詞書してある。

儀同三司の母とは、従二位高階成忠の女で、中の関白藤原道隆の妻、従二位貴子のことである。その子伊周(これちか)は、寛弘五年(一〇〇八)一条天皇の勅によって大臣に准ぜられたので「儀同三司母」と称した。

「儀同三司」とは、儀は三司に同じという事で、三司とは三公ともいい、太政大臣と左右大臣(後には左右内大臣)のことで、伊周を指すのである。

この貴子は、伊周の外に、隆家、定子(一条帝皇后)、原子(三条帝女御)などの子があつて、高内侍とも呼ばれ、漢詩文にも通じ、男まさりであつたようである。川柳では、

儀同三司といふべきはつけま
わし
(拾八、傍三)

と、雨譚が詠んでいる。この「つけまわし」というのは、吉原の准上妓のことで、道中も張見世もしない二分の女郎をいうのである。つまり三分の上妓に准ずるといふ意味を、准大臣に通よわせた洒落である。

清原深養父(ふかやぶ)

「古今集」に「月のおもしろかりける夜、眺かたによめる。深養父」と詞書して、

夏の夜はまだ宵ながら明
けぬるを
くものいづこに月やど
るらむ

とのせられてあり、これが定家百人一首に入選している。その歌に対し川柳はおもしろく、

ふかやぶはさすが蚊の出るお
歌也
ふかやぶの歌は蚊の出る頃に
よみ
(タル一五)
(タル六六)

と詠んでいる。

深養父は、同じ百人一首中の清原元輔の祖父で、清少納言の曾祖父にあたる。古今集時代の歌人で、中納言兼輔や紀貫之とも交りがあり、琴が上手であつた。中古三十六歌仙の一人で「深養父集」という家集もある。

の性格が変ってしまいます、もであるがために食しきに対する焦りといったものを描き出されているのがよいと思ひました。

下痢をしながら枝豆の禮を
言い
きさ子
大豆を食べすぎるとおなかかゆむるものですが、枝豆が美味しかったために、つい意地になつて食べるものですが、それを礼を言いと云つたところに軽いうちを言っているのです、面白い句ではあります、短冊には書けない句です。

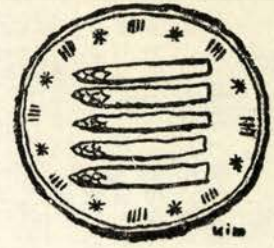
うちあけたどん底のそこか
くしとき
みのり
人間の弱点をさらけ出しているところに佳さを感じました、あら

いざらい言うつもりで居つたのが矢張り、こんなことまで言つては、とかんじんのところの幾分はかくしたというところに、作者の眼の鋭さを感じさせられます、最近私自身もこうしたことがあつたので特にそう感じられたのであります。

先代のむかわり待たず店を
しめ
たけお

むかわりという語が目についたのであります、古い年代の人であれば知って居られると思ひますが、一周忌とか三回忌とかの年回、つまり年忌のことをむかわりというのであります、句意は先代の年回も来ないのに店をしめなければならなくなった老舗の悲哀を詠んで居るのであります。

(文房の夕の句群から)



・歳末特集・

入った金・出た金

歳末の金の動きはそのまま人生の一コマになる。目の正月になるようなモノはすくなく、やはり師走の風は冷たいよ
うだ。
一編集局

★ 尺八で流し

国弘半休

丙午生れの私は千支の上ではあんまり金に因縁が無いらしい。しかも生れ月が八月で馬の腹部に当たっているから牛の胃のように食い溜めが出来ない。食って仕舞えば間もなく馬糞となって出て行く。たまらないことが私の健康上良いと云うのである。

これ程金にゆかりの少ない私が歳末売出し中の某市を忘年会の帰途、一管の尺八と二三人の友達で目抜き通りを十数軒「追分」を流して何分の喜捨を願ったことがある。その時友人の(A)が誰かに呼びとめられて文句をつけられた。曰く「商売」かと言うのであって彼等は私の尺八を商売でやっているのかと訊いてるのであった。とんでもないと(B)が答えた

ら、そんなら通れと云う。折角の忘年会気分も一度に吹きとんで仕舞った。併し(C)が軒毎差出した制帽の中のお金は何と戦前の金額で三円五十銭也。五銭の素うどんでは食いきれないから十銭の肉うどんにして尚お残金二円也を国防費に献金した。

厄介になっていた。或る日のこと、小立野の天徳院に行つて、ベソチに休憩していると、ふらりとやって来た老人があるので、よく見ると、十年以前に、やはり金沢市にいた時代の勤め先の同僚で、共に再会の出来たことを嬉び合つたが、すでに半身不随の中風にかかつていて、息子も丁度、在宅であるから、ぜひ自宅に立ち寄れとのことである。その息子と言

★ 着たなり

野村 味 平

こ二十余年、平凡な私生活をしてる故か、歳末に不意に金が、出入りして、助かつたことも、困つたことも持ち合せないので、つい回顧して見る気になった。

二十五年も以前のこと、金沢市で住んでいた頃、尾崎士郎作の人生劇場に登場している、人物で、热情的な某元代議士のところに、

のが、当時の金沢第一中学校に通学していたが、新体時などを、殊更に、真似の出来ないような文字で、書き綴つて、得意がついていた文学少年であった。その日、再会して見ると、つい先頃出て来たところやと言うので、どこからかと、よく聴いてやると、今では、ソシャリストとなつて、投獄していたとの返答で、わたくしに、あなたの現在の思想はと問いたたすので、人生を平和で、愉快に暮すのが、主義でと、一席ぶつたところ、それが大和魂ですかと反問せ

られて、センチでいたあなたも、テンボな変わり様をしたものだ、皮肉られた。自分の変わり果てたことなど忘れたかのように、そんなことがあつてから間もなく、わたくしは、大聖寺に帰つて、専ら病後の健康恢復につとめていた。師走もおし迫つた二十五日の夕暮れどき、この日が、亡父の命日なので、母からはぐちられて、さやかな夕餉を共にしていると、ひよっこりとその青年が、三人連れで訪れて来て、職を求めて大阪市に行つたが、目的は果さずで、敦賀からは徒歩で、出発して来て、無一文であると言ひ、今、空腹であること、煙草を喫みたいことと、金沢までの旅費を貸しては呉れないかとのこと、その証憑としては、下駄の漑り具合を見せての掛合いである。それが、嘘か真実か、どちらにしても、自分も居候の身分では、どうにもならないので、母には、内証で、当時としては、わたくしには、派手な一枚切りのダブルのスプリングコートを持ち出して、三人を連れて、古着屋に行つたが、惜しくも、この辺りには向かない品物だと、仕切つたのが三円也で、それよりは高くないが、どうにも購つては貰えずであつたが、それでも、その金で、うどんを振舞つて、駅へ来て、金沢までの切符を三枚と、売店で、ゴールデンバットを一個買つて、

一人に三本宛を渡して、残りの一本は自分が啜えて、改札口で見送つている、わたくしに、もうこれ切りかいと、三人で捨台詞めいた言葉を残していったのが最後になつた。それからしばらくは、わたくしには、スプリングコートも、着ることの出来ないような、不甲斐のない、幾歳月日が明けては、暮れていった。

★ 親の有難さ

田 垣 方 大

結婚してから病氣らしい病氣をしたことのない妻が、過労でたおれたのが昭和二十三年の晩秋、初めは四、五日もすれば、なおるものとたかをくくっていた私も、医師が首をかしげて聴診器をしまひ、

「最低二カ月の安静は必要です」と宣告された時は、がん、と頭をなぐられたようなショックをうけ、病妻と一番下が二才の三人の幼児をかかえ、乏しい財布を握りしめて、如何に正月を迎えるか、暗い気持ちに押しつぶされそうになっていたある日、前ぶれもなく妻の父がひよっこり訪れ、
「何か知らぬがふと気になって名古屋から汽車に乗つてしまつた」といふ挨拶で、父は三日間子

供のお守りをしたりして、帰って行ったが、會敷駅へ父を見送って帰宅した私に、妻が病臥のまま蒲団の下を指さすので手をいれてみると、百円札が五十枚、私は思わずその札に頭をさげってしまった、妻もいつ父がいれたのか全然気がつかなかったという、クリスマスに妻の全快を祝ったのを昨日のこのように覚えてる。

盗られた公金

後藤梅志

年末の金には羽根が生えると申します。私はまだ田舎からぼっと出の少年の頃。東京の或る銀行に勤め、そこから十町ばかり離れた芝区役所の東京市金庫へ通っていました。或る日銅、銀貨とりませ

四百円。これは当時鼠一匹を捕獲すると一匹一銭で市が買上げる、その資金でした。毎日十六歳の私はそれを銀行から区役所の支金庫へ運ぶ役目でした。恰度暮れの十二月廿日。いつもの様に運び、人の目に付かぬ棚の上に揚げ、一寸小使部屋へ雑巾バケツを取りに行

ったすきに何者にか盗られてしまいました。それは一寸もたすきで。が何者とも知れません。私は一日一晩警察へ留め置かれまし

しいおじさんがいて、代る代る私を白状させようと責めました。しかし私は何も白状するものはありません。刑事も困っていた所、その翌日。盗人はズツクの鞆だけ警察へ返して来たらしく刑事室に見覚えのあるカバンが置いてありました。私はそれを見るなり本能的にカバンを開けて見ました。中身はありません。私は突進に刑事さん

愆なこと

山川阿茶

十二月金おとす人拾う人

阿茶

きしせまの幸不幸は明暗がきついいと思います。梅里さんの鑑定では私の耳は衣食住に不自由のない相だそうですがお金には縁がうすく十二月に棚ボタ式に金が入って喜んだ事もなく、その代りのほほんで暮した罰が今あ

たり 阿茶
と云う様な特別に大きな金で困った経験もありません、親戚が少いのと身辺に係累が少い故かも知れませんが、いつも喰うてチョンながら
十二月煮べも炊かず小唄弾き 阿茶
と云う波のない平凡な生活でございまして、金に困る方は嫌ですが思わぬ金が入る方は一度経験してみたいものだと思います。
こいちゃんもひねってお金が欲しいなり 阿茶

女の友情

西出一栄

歳末はとかく予算を上廻る出費は止むを得ないことですが、不意に思わぬ多額の出費に困った事は度々ありました。而し年末に思わぬ入金で助かった話は今までにたった一度だけでした。世界戦争で敗戦の憂目を見つつかつと工場を再建する事はしましたが、資金面で相当苦労しました。扱て十二月ともなれば、給料も遅配はして置かず、おまけに越冬資金も出してやらねばなりません。積立を前借りする事にしましたが、銀行は慌てては呉れません。心を碎いて居ります矢先、月末になつて

歳末の金

武部香林

さあ、僕個人としての特種は無いのであるが、まだ頭の黒かった頃、T塗料会社の営業部長をやっていたが、何んとか一流会社へ進出してこの年末はひとつ忘年会の資金をひねり出さぬものと、工



世界で初めての
ルーフ型ペンの設計!
ルーフ型
パイロット スーパー
¥1,500

130°の広角ルーフ型で、いままでのペンに比べ筆記角度が広く、英文でも和文でも同じ調子で書けます。



輝やく巨歩 (4)

創刊號から

四百號まで

★ ★ ★

昭和十五年

新春号から毎月一日発行に復元
表紙にエスぺラント語を記載。

penoi flugas trans la land

limon. 「芸術は国境を越えて飛ぶ」の意。一月

川柳二千六百年史 一月号から

連載、戸田古方執筆。

句会場の変更 二月から御津八幡宮に。

不朽洞会総会 四月二十八日茶

房グルマンで。

ワカナ・一郎とその映画を語る

会 五月八日新興キネマ試写室で

開催。

不朽洞会に委員制施行 初代委

員長に戸倉普天就任。七月

裸の句会 八月十一日塚みなど

海岸で開催。

皇紀二千六百年奉祝・川柳雑誌

創刊二百号記念川柳とは?の会

九月十五日午後一時から大阪三越

八階ホールで開催。

昭和十六年

川柳世界史 一月号から連載。

戸田古方執筆。

吟行地調へ 三月号から連載。

路郎主幹執筆。

奥村丹路論 三月号から三回に

巨り掲載。高鷲亜鈍執筆。

路郎主幹下関・九州・四国巡遊

の旅へ。六月七日。

路郎主幹大洋支部創立句会へ出

席。六月十一日。

路郎主幹日本文化協会第一回総

会(六月二十五日早稲田大学大隈

会館)へ出席。

不朽洞会総会 八月十日大鉄百

貨店六階A B室で開催。

路郎主幹白衣川柳慰問に十月六

日姫路陸軍病院へ。

昭和十七年

本社事務所移転 昭和ビル内二

〇一号室から一階七号室へ転室。

一月十七日。

初等川柳講座 二月号から連載

路郎主幹執筆。

小林燈舎近く。三月九日

不朽洞会総会 八月二日大福寺

大広間で開催。委員長に戸倉普天

副委員長に橋本緑雨、奥村丹路就任。

大東亜戦一周年記念川柳大会

十二月十四日御津八幡宮で開催。

昭和十八年

海軍慰問号 五月一日発行。

創立二十周年記念南方動物川柳

会 四月十一日天王寺動物園で開

催。

路郎主幹第五回西日本鉄道人川

柳大会(三月七日山口市鉄道修養

道場)へ出席、次いで出雲支部・

松江支部を歴訪。

編集長に須崎豆秋、句会部長に

黒川紫香就任。五月

山本元帥追悼句会 六月五日御

津八幡宮で開催。

喰べられる雑草の吟行 六月

十三日南海高野線沿線郊外で開

催。

「雑誌奉還」最終号 十二月一日

発行。本号に限り定価六十六銭。

(創刊号以来定価三十銭を堅持)

武玉川研究終る 百三十七回

(初篇二十三回、二篇三十回、三

篇三十五回、四篇三十回、五篇途

中まで十九回。)

昭和二十年

長崎柳秀近く。六月五日

高橋かはる近く。八月四日

昭和二十一年

川柳雑誌再刊 八月一日 定価

三円。

続川柳講座 八月号から連載

場の方の技術陣を激励して、優秀な製品を造ってもらえまいかと、腕によりをかけてさせた上自らも苦心と努力の結果天下に知られたS金屈会社への売込みに成功した。やがて年末の二十五日、大阪の果てなるお得意様へ集金に罷り出た。その頃の大会社はキャッシュで戴ける。胸もときめく年末の金、忘年会資金はつきたりの事で原料の支払い代金に当て込んでいたのである。すっかり頂戴した気で安心していたところが、豈計らんやである。「まだ廻ってまへん」と鶴のひと声、検収書なるものが会計係へ廻っていないのである。

「大会社の集金なんてうっかり当てにならん」靴のかかどが持たぬ程の長い長い塀に沿って歩きながら、しみじみと師走の風に向かってつぶやいた。やっとの事で同系の銀行へ泣きを入れて急場を凌いだ。若しその方法もつかなければ本当に年を忘れてしまうたであらう。

★ 歳末免疫

長谷川 三司

歳末も戦後はずいぶんと変わった。今は諸払も現金となり、月末の払と云えば電気ガス新聞ぐらゐのもので、年の暮れが来たとして常の

月とかわらない。

したがって特別に金の有難味も無ければ、困った事もない。困っているのは毎月のことでもう免疫に近い。空くじでも当ればと思うが買わないくじは当らないとはなんと味気ない世の中である事よ。私のように、六十回以上も歳末を過ぎて来た者には明治の終りから大正初期頃までの歳末風景には、なんとなく郷愁に似た懐きさが思ひ出される。年の暮れが来たとして、足袋一つ新調するでなく、夫婦二人切り徒食の身では出る金もなければ、入る金もない。せめて迎春にそなえて障子でも張り替える紙代ぐらゐが出銭と云えば出銭で、張り替えた障子の前に座ると、今年もマア無事に生きて来たとしみじみ思う。凡夫のかなしさは気ばかり若く年は取りたくないがそうもなるまい。地球は廻り四季は自然とやって来る。

運をばを重ねて運の無い男 三司

★ 千両役者と

百両ご難

不二田 一三夫

毎号穴埋めの原稿ばかり書いているが、コト金になると、穴を埋めるどころか、家計の穴ばかりあけている。

儲けただけ使うのは、今も昔も変わりなく、いい時には電話も女

路郎主幹執筆。

川柳葡萄句会 八月二十五日大和の平群村正光寺で開催。

不朽洞会理事長更迭、理事長戸倉普天の辞任にともない後任に中島生々庵就任。

路郎主幹出雲支部二十周年記念川柳大会(十一月十日出雲市公会堂)へ出席。

昭和二十二年

六月号から定価五円に改正

路郎主幹文芸賞受賞記念川柳大会は六月一日生根神社で開催。

路郎主幹文芸賞受賞記念特集号

七月一日発行。

十月号から定価十円に改正

路郎主幹すげ笠主催全国川柳大会(十二月二日名古屋十洲楼)へ出席。

昭和二十三年

四月号から定価十五円に改正

路郎先生還暦祝賀川柳大会 七月十一日道頓堀オメガハウスで開催、不朽洞会主催。

九・十月号から定価二十円に改正

岩崎柳路逝く。十月三日

路郎主幹熊本文化祭川柳大会(十一月七日世継神社)へ出席。

不朽洞山房徹夜句会 十一月二十七日三木松嶺光寺で開催。

路郎主幹広鉄局川柳コンクール(十二月三日広鉄職員会館)へ出席。

路郎主幹第二句碑建立 六月三日奈良県宇陀郡三本松村向瀬。祝賀句会は八月十二日開催。

路郎主幹第一句碑建立 五月二十八日中島小児科診療院後庭。

米本貴志子逝く 六月十五日

路郎主幹第二句碑建立 六月三日奈良県宇陀郡三本松村向瀬。祝賀句会は八月十二日開催。

路郎主幹第一句碑建立 五月二十八日中島小児科診療院後庭。

米本貴志子逝く 六月十五日

路郎主幹第二句碑建立 六月三日奈良県宇陀郡三本松村向瀬。祝賀句会は八月十二日開催。

路郎主幹第一句碑建立 五月二十八日中島小児科診療院後庭。

米本貴志子逝く 六月十五日

路郎主幹第二句碑建立 六月三日奈良県宇陀郡三本松村向瀬。祝賀句会は八月十二日開催。

路郎主幹第一句碑建立 五月二十八日中島小児科診療院後庭。

昭和二十四年

大阪市制六十周年記念川柳会 四月二日大宮文化会館で開催。

五月号から定価三〇円に改正

あやめ池ステート・フェア全国川柳大会

五月八日午前十時からあやめ池遊園地内野外劇場で開催。後援朝日新聞社。

本社難波連絡所を北極星三階に新設。八月

路郎主幹美術支部創立川柳大会(十月九日弓削小学校講堂)、姫路支部川柳大会(十月十一日樹甫居)へ出席。

第一回大阪市民川柳大会 十一月十三日大丸本曜クラブで開催。

(以後省略)

昭和二十五年

本社役員増補 論説委員に福田山雨楼、戸田古方、企劃委員に中島生々庵、須崎豆秋、句会委員に永田里十九、土井文蝶、森下愛論。

路郎主幹第七回西日本鉄道人川柳大会(四月二十三日広島県二十日市鉄道職員会館)へ出席、小郡湯田、下関を歴訪。

路郎主幹第一句碑建立 五月二十八日中島小児科診療院後庭。

米本貴志子逝く 六月十五日

路郎主幹第二句碑建立 六月三日奈良県宇陀郡三本松村向瀬。祝賀句会は八月十二日開催。

路郎主幹第一句碑建立 五月二十八日中島小児科診療院後庭。

米本貴志子逝く 六月十五日

路郎主幹第二句碑建立 六月三日奈良県宇陀郡三本松村向瀬。祝賀句会は八月十二日開催。

路郎主幹第一句碑建立 五月二十八日中島小児科診療院後庭。

米本貴志子逝く 六月十五日

路郎主幹第二句碑建立 六月三日奈良県宇陀郡三本松村向瀬。祝賀句会は八月十二日開催。

路郎主幹第一句碑建立 五月二十八日中島小児科診療院後庭。

米本貴志子逝く 六月十五日

路郎主幹第二句碑建立 六月三日奈良県宇陀郡三本松村向瀬。祝賀句会は八月十二日開催。

路郎主幹第一句碑建立 五月二十八日中島小児科診療院後庭。

米本貴志子逝く 六月十五日

路郎主幹第二句碑建立 六月三日奈良県宇陀郡三本松村向瀬。祝賀句会は八月十二日開催。

路郎主幹第一句碑建立 五月二十八日中島小児科診療院後庭。

米本貴志子逝く 六月十五日

路郎主幹第二句碑建立 六月三日奈良県宇陀郡三本松村向瀬。祝賀句会は八月十二日開催。

路郎主幹第一句碑建立 五月二十八日中島小児科診療院後庭。

米本貴志子逝く 六月十五日

路郎主幹第二句碑建立 六月三日奈良県宇陀郡三本松村向瀬。祝賀句会は八月十二日開催。

路郎主幹第一句碑建立 五月二十八日中島小児科診療院後庭。

米本貴志子逝く 六月十五日

路郎主幹第二句碑建立 六月三日奈良県宇陀郡三本松村向瀬。祝賀句会は八月十二日開催。

路郎主幹第一句碑建立 五月二十八日中島小児科診療院後庭。

米本貴志子逝く 六月十五日

添削会新設会員募集

路郎主幹第三句碑建立除幕式並びに句碑建設記念第二回西日本川柳大会、九月十七日岡山県弓削駅前並びに弓削

路郎主幹夕刊山陽新聞創刊一周年記念読者川柳大会(十二月十七日山陽新聞講堂)へ出席。(以後省略)

昭和二十六年

山焼川柳大会 一月十五日第一会場奈良公会堂、第二会場若草山山麓(川柳を火花で揚げる)で開催。

不朽洞の喫煙室欄三月号から新設

新川柳評釈百句 三月号から連載、路郎主幹執筆。

路郎主幹第四回句碑建立除幕式 四月二十二日大森娛句楽邸内で挙行。

路郎先生寿像贈呈式並びに記念川柳大会 十一月三日大阪市立大室小学校で開催。

路郎主幹出雲支部創立二十五周年記念山陰川柳大会(十一月二十三日出雲市公会堂)へ出席。

路郎主幹前支部忘年句会へ出席。

(担当 橋高薫風子)

中もあり、わるいときは電灯、水道まで止められたことがある。

ドン底の二十四、五年前、入院中の愛児に、わずかに百円の金がなかったために死に目もあえず、病院の事務長から入院料のことなどで「鬼のような親」と痛罵を浴び、無念の涙をのんだことが忘れられず、人の世話を頼みずに入り、やっと長恨百七円という金をにぎったのである。

その頃、劇場専門の印刷商の番頭をしていた。先代松本幸四郎の弟子で将来有望と折り紙つきの幸若(仮名)という歌舞伎俳優から、巡業用のピラの注文があった。師匠譲りの弁慶が六法を踏むけんらんの雄姿が正月興行用のポスターの絵であった。

若くて男がよくて芸達者——。身が持てなかったのか破門になって旅へ出た。その巡業ピラだが、残りの百五十円の金を取りに行つた旅館というのが奇しくも、今にして思えば本社句会の大坂観光ホテルから二、三軒東の小さな旅館だった。

「金がなければ百五十円分だけピラをもらって帰る」と、クドイ話のきらいなほくは立ち上った。

「しばらく、しばらく」と割って入ったのが旧知の野沢支配人(都築文雄らとしょにいた野沢英一の弟)だ。

「幸若さんはバクチャも喧嘩もする人だ、あなたの顔に泥を塗るような人ではない」と、松竹から衣裳

まで借りている信用を裏づけとして言うのである。

「兄いさんのご恩は忘れません」と、座布団からおりてサツと両手をついて、涙さえ浮かべ(その時ほくにはそう見えた)

「幸若めを男にしてやっておくんじゃない。」

と、ほくをいい気分になせられるのである。

「ようがす」と、幡随院長兵衛よろしく胸を張つたままではよかったが、虎の子の百七円を百五十円にして主人のほうへ入金してしまえば、また元のスッカスカンである旅先きでこ難に遭って金はバアになつた。元米あきらめのいい男だが口惜しいのは、あの日の涙も、両手をガバとついて平伏したのも、彼が役者であることをその時忘れていたことである。

肝疾患・疲労・二日酔

★総合強肝剤

リポコル (12種の成分を配合)

ウロコ印 歌田薬品

20錠・50錠・100錠



麻生路郎選
北川春巢選

意見しいしいついで行く梯子酒 兵庫県 辻 文平
 親しさがもう方言の声になり 同
 父親の死んだ年だと一寸老け 同
 職のないかなしさ今日も髭が伸び 同
 女房の熱弁さえて子の羨 同
 福耳の妻に金策まかしとき 同
 定休日眼糞をためて夜も映画 小松市 関戸宗太郎
 べらぼうな利で借り細々と儲け 同
 図書券でわけのわからぬ本も買い 同
 ドレミファのように欠伸で牌を寄せ 同
 拝観料とつても賽銭箱を置き 同
 荒壁のまま煤けた家を継ぎ 同
 ドス一本に狂う日本の民主主義 熊本市 田口 麦彦
 メッキいまはげた日本の民主主義 同

ターミナル他人の恋も美しい 同
 トレードのような娘が嫁き娘 が来る 同
 国民車ですと庶民にまだ買えず 同
 銀行の裏は弁当洗う音 同
 道化師も泣け秋じゃもの秋じゃ の松江市 田中 妖人
 赤い唇から吐いたのも赤い嘘 同
 事務多忙秋にも太る暇がなし 同
 飲むために稼ぐ阿呆へ夜が来る 同
 街灯の下で演技めく別れ 同
 よめさんに死なれこんなに老 けるもの 岸和田市 内藤きさ子
 台所でもテレビでも虫が啼き 同
 風の音ばかりで猫も来ぬ日なり 同
 ゴミ捨場にも名月がゆきわたり 同
 コスモスをあげに来た の留守 同
 親切を憎む日もある不倖 岡山県 太田 養流
 価値とあるメニュー諦めたブラン チ 同
 テレビ料理見ながらバター攻 め 同
 PTA ショウと云いたい帯をしめ 同
 残酷なものに案山子の後始末 同
 最低の暮らし覚悟の角かくし 布巻市 久米奈良子
 真相にふれず友情交しあい 同

現代柳人録



(一) 姓名 (二) 雅号 (三) 別号
 (四) 現住所 (五) 生年月日 (六)
 出生地 (七) 職業 (八) 電話 (九)
 自信の句一句 (一〇) 川柳以外の
 趣味 (一一) 配偶者の有無 (一二)
 川柳に手を染めた年月

(35) 土井 文 蝶

(一) 土井角太郎 (二) 文蝶 (三)
 自然洞 (四) 大阪市西成区松通九
 丁目二二 (五) 明治31年12月5日
 (六) 大阪市 (七) 板金加工業
 (八) —— (九) 我も亦凡愚の一
 人酒の酔 (一〇) 酒・読書 (一一)
 有 (一二) 大正十三年頃

(36) 土 橋 芳 浪

(一) 土橋芳次郎 (二) 芳浪 (三)
 芳瀧家他 (四) 東京都中央区日本
 橋人形町三の四 (五) 明治36年6
 月23日生 (六) 東京都台東区浅草
 田島町一七 (七) 利器工器具商
 (八) 「661」六四三四 (九)
 風呂敷の米どうしても米に見え
 (一〇) 外国映画を観る事 (一一)
 有 (一二) 大正十五年八月

(37) 菊 沢 小 松 園



美しきものの一つに若き恋	同	電化してみても母には暇がなし	同
病床の友に風邪を案じられ	同	食足りて胃腸病院繁盛す	愛媛県 竹田 青園
絵具の画用紙のとスヶネの秋が来た	堺市 沢田 美喜	張りかえた障子の風へひびく秋	同
豊作だへのへのもへのじの元気	同	野天風呂秋味わえと落葉浮き	同
カナリヤをあずけて病重くなり	同	俺が死んでも木が生きてくれる	鳥取県 鈴木村 諷子
見合して来たのよと恋人に叱られる	同	刑務所の塀からラジオ聞えて出	同
一对のコケシを分けて愛し合い	西宮市 末沢 花美	のんだくれは死に保険金はいくら	同
弾く人を失いギターのをうす埃	同	フィアンセともう寝台を選つて	羽鳥野市 板倉天悟空
愛過重生命線の薄き掌に	同	親に似た黒髪が娘の気に入らず	同
片方だけの肺で恋の溜息つく	同	ペンだこのいつか消えてる長病	同
頓死したはなし一日いたわられ	竹原市 杉原 愛鳩	宿題の灯に内職も連れになり	岡山県 杉本たつよ
母物へ女同志で泣きにゆき	同	農繁の昼はピーマン焼いただけ	同
そんな目で見れば浮気な顔に見え	同	信用があり借金の額が増え	同
芸無しがいちばん先に酔うてくる	同	追い越して行くアベックは恋で	京都府 大久保 和太郎
臨時ニュースやはりええ	岸和田市 田端くにお	血管を浮き彫りにして老を嘆き	同
法律に詳しくなつて死刑囚	同	閉店のベルへ旗が出た構え	同
座談会見合結婚こきおろし	同	睡眠不足の女房の方がよく肥り	空閑市 松本 忠三
ひやかしに受けて見ますか	教師 同	叱言う事が課長の趣味に見え	同
気晴しに池をめぐりて風邪を引き	貝塚市 護川 梢月	人事課に別嬪ばかり引き抜かれ	同
讚美歌で退院送るも療養所	同	寄つてたかつて俗っぽく観光地	青森県 木村 凉人
新調へ綜室次々手を通し	同		

十月号句評リレー拝読

福壽司

車

心斎橋筋大丸前
電話の三三四番

(一) 菊沢藤三郎 (二) 小松園
(三) 無 (四) 大阪市阿倍野区王子町三丁目三四 (五) 明治三十七年十二月二十五日 (六) 大阪市東区谷町五丁目二三 (七) 金網商自營 (八) 大阪六六四四 (九) 雑音の一つとなつて今日を生き (一〇) 読書・歌舞伎観賞 (一一) 有 (一二) 大正十四年十一月

(38) 長野 文庫
(一) 長野軍四郎 (二) 文庫 (三) なし (四) 今治市神明町 (五) 明治三十六年二月十九日 (六) 愛媛県菊岡町 (七) 古本商 (八) 一八六 (九) 柔らかな芽にも大地を割る力 (一〇) 日本画 (一一) 有 (一二) 昭和八年十月

(39) 鶴 飼 蟻 朗
(一) 鶴飼勝太郎 (二) 蟻朗 (三) 同 (四) 豊中市岡町北四丁目四三 (五) 同 (六) 大阪市大正区



嬉しきは批判をされる程になり 同
 雑草にめぐむ陽があり髭を剃る 同
 アルバムで見たら私もまだ二十歳 大阪市 板東千代美
 おんな美しすっかり秋の色を着て 同
 膝枕するひとも居ず膝が冷え 同
 稲刈りも食う手伝いもする子連れ 宇部市 平田 実男
 給料を貰い食卓らしくなり 同
 お隣りも女でほっとした夫婦 同
 おどけないかまきり秋を死んで 櫻井市 野中 稔一
 政権の変った当座希望もち 同
 鶏飼えばとりにも四百四病あり 同
 正当な要求がめついで見られ 伊賀県 土守 蜻蛉
 温泉から帰って来ても旅疲れ 同
 寝姿の嵩の低さに案じられ 同
 未亡人疑うてくれる人も欲し 兵庫県 遠山 可住
 刺青の過去へ笑わぬ妓なり 同
 豊作を町の方から騒ぎに來 同
 靈柩車終着駅へ無事に着き 伊丹市 小川静観堂
 定年が建てた家です落ち付かず 同
 再映をよって見に行く歳となり 今治市 越智 一水
 低姿勢などと物価は高くなり 同

川雑四百号川柳の道限りなく ホテル市 並木東田楼
 春は花秋は紅葉と思えども 同
 余興だけに来たのに司会の長話 豊中市 土井 北桐
 履歴書は足場のニコヨン止めた たき 同
 食うだけの楽しみ村の祭りの灯 兵庫県 常岡 孝風
 資本家を嫌い銀行には貯金 同
 人事と思ひ白状しろと云う 和歌山県 寺杣 花車
 へんくつと馬合わすのも世渡りか 同
 子のように妻に云われて嬉しい日 竹原市 山内 静水
 家柄をもらいあままで気兼ねをし 同
 嫁きおくれお針に生きる坐りだこ 大和五条市 尾米 絵見
 揺つける日の母さんは趣味の会 同
 車窓から見ればハイクは楽しそう 西宮市 樋口 寿栄
 美容師のお世辞を鏡の中で受け 同
 これしきの田地为保護の邪魔に 和歌山県 木下 一休
 思い出の写真を通夜の席で見せ 同
 募金箱小銭が温い音をたて 鈴鹿市 吉田 俊和
 フロ値上げ贅沢に湯を使得やり 同
 あれから十五年生きてるウイン 大阪府 佐伯 九紫
 不精ヒゲ姉女房が刺っている 同
 入院をすれば仕事がしとうなり 見島市 伊丹柳瓢子

三軒家町浜通(七)基金職員(八)
 豊中②八一八(九)泣く前の五
 秒の顔で珠数を持ち(一〇)童話
 ・国文学・碁(一一)有(一二)
 昭和四年九月頃(もう少し前
 か)

(40) 伊藤 茶 仏

(一) 伊藤繁之(二) 茶仏(三)
 —(四) 石川県小松市大和町一
 〇九の一(五) 明治三十七年九月
 五日生(六) 小松市能美町(七)
 鉄工(八) 小松八六〇(九) コト
 リともせぬ母がいて有難し(一〇)
 (ホ碁・民謡作詞(一一)有(一
 二) 昭和四年六月

(41) 吉田 笙 人

(一) 吉田 正(二) 笙人(三)
 鯖湖山人(四) 福島県飯坂温泉菱
 沼一一(五) 大正元年八月一日生
 (六) 現住所と同じ(七) 郵便局
 員(八) 一八〇(九) とまかくも
 子を連れて出る好天気(一〇)
 絵画(一一)有(一二) 昭和二年
 一月

(42) 稻 吉 佳 晶

(一) 稲吉八重子(二) 佳晶(三)
 (琵琶) 旭沢・(生花) 竜香
 (四) 岡崎市蓬萊町一の一八(五)
 明治40年10月13日生(六) 岡崎市
 滝町(七) 主婦(八) 岡崎三三三



虚無僧が去って続きのむりを云い 身代りになりたい年で先立たれ 筋立てて話せぬ平でいやになり ビタミンの足りないままに秋となり 幸せな過去アルバムで笑いこけ ニンニクを一人残して湯槽空ら 求人難方位を占いやって来た 年寄りをいたわるつもる齡を聞き 倦怠期そんな暇ない共稼ぎ 蛇口から飲む酔ざめのうまい事 バイブルに遠のき退院近くなり ハイヒール家ではあぐらかく娘 好景気デモの斗士も売れてゆき コスモスに口づけしたし秋の青	同 見本 泉洋 同 井上美恵子 同 木村 文福 同 末田 晃康 同 安平次弘道 同 斎藤たけお 同 内海 敬太	同 鏡せぬことが親爺の自由主義 図書館で大きな希望のコッペパン 飯だけを運ぶ看護で気が疲れ 幸福をとらえた織手おしめ干し 口紅も描き肩もない世帯ぶり 残業に追い廻わされて好景気 子の寝息山のつかれをもう忘れ コオロギが鳴いてるよなべは 献立にさからうように物価高 愛情を確かめおうているけんか 貫ろて去ぬ野心もあつてを賞め 甲子園ほどには選挙熱が出ず 二十年連れそうて来た一徹さ 婆さんの自由にさせたエチケット	同 宇部市 神田 豊年 同 笠岡市 佐内 隆文 同 玉野市 小谷 仙山 同 松江市 岡崎 雪美 同 兵庫県 河原みのる 同 鳥取市 近藤 昭夫 同 大阪市 西本 保夫
種をまくだけの男であつてよし きみのふる里にあこがれるも恋か 横文字で唄う女の酌になれ 豊作へ一度に嫁ぐ二女三女 食うだけの百姓なれどあきもせず 一姫とほめて二太郎生ませる気	同 八尾市 吉田 博一 同 宇部市 鎮浪 翠月 同 同 同 同	千鶴さんの一週忌に思う 僕のハート奪ったまんま一周忌 もう一度茶席の恥を妻に問い ほろ酔いのきげんなんにもこわくを 金ためろためると銀行世話をやき のむよりも先に風邪ひく常備菜 運動会パパよりママが乗り出だし	同 貝塚市 杉本 一鶴 同 松江市 大内 尉介 同 和泉市 井阪東天紅 同 大阪市 竹崎 河童 同 河内長野市 森本黒天子

○(九) 女とはいつか姑と呼ばれる日(一〇) 茶華道・琵琶・謡曲・仕舞・鼓・ダンス(一一) 有(一二) 幼少より好む。終戦直後東海川柳クラブ・二十六年川柳おがざき発行

(43) 木村 千容

(一) 木村長三郎(二) 千容(三) 千層舟(四) 岡山県倉敷市新川町千老(五) 明治20年6月10日(六) 岡山県邑久郡邑久町本庄(七) 会社役員(八) ——(九) まだいきているのぼかんと口あけて(一〇) 益さい・俳句(一一) 有(一二) 昭和二十四年十月

(44) 正本 水客

(一) 正本佳雄(二) 水客(三) ——(四) 大阪市東住吉区湯里町

ヒゲそり後に…

●美容衛生剤G11
●アラントイン
●水溶性ラノリン

配合

男性 200円

アストリンゼン



袖の下死ぬ程の事あらへんに 山形県 菊地 白葩
 家一軒持って台風こわくなり 大阪府 松下天邪鬼
 末席は手酌で酔ってくだをまき 布施市 片上 光福
 連れ子への引け目が又も云い淡り 倉敷市 大須賀平々
 自転車を変えて儲け出し 大阪府 福井 童昭
 病臥で判る働きの味酒の味 河内長野市 古谷 醉月
 祝電が式場の老母驚かせ 布施市 仲野 千里
 割り込みはヒップの大きさ考えず 大阪府 高木 博士
 家計簿を入念につけへそくる気 香川県 三井 醉夢
 嫁き遅れこけしに焦り見つめられ 今治市 越智 義夫
 焼鳥は二級にかざる縄のれん 大阪府 橋本 裕邦

鳴門観潮

船酔いも渦の美観に気をとられ 須崎市 高橋 蟠蛇
 音もなくたばこの灰が落ちて秋 大阪府 白石 良圭
 口下手の妻が出過ぎたことを云う 宮崎県 野口卯之助
 裏町の平和へおむつひるがえり 出雲市 板倉 白楊
 貰うたを仲居は見せて揶揄われ 神戸市 吉田 隆史
 働ける若さを持って孫が出来 京都府 塚脇 笑太
 無いものにして年金を貯めたがり 七尾市 松高 秀峰
 仲人は親の野心を見逃がさず 芦屋市 三上 美路
 しゃあしゃあと唇ふいて嫁きに誇り 高知市 須藤 俊江

晴天にてれコオモリ振って見る 小松市 月田北海坊
 外遊に私も出している組合費 笠岡市 谷本鈍愚坊
 山彦の響く峠に子の元氣 出雲市 森山 莊
 刈らぬうちを洗濯機置いて去に 島根県 星野 侑正
 低姿勢尻目に物価高くなり 堺市 武田軍治郎
 サイレンへ中座会釈の婦人連 愛媛県 村上 竹生
 とうもろこしハイモリ吹くように食い 玉島市 井上 旭峯
 三夫婦揃いわが家をひけらかし 岡山県 若柳花乃子
 親友と云うにライバルとも云われ 大阪府 山田松太朗
 やわらかい言葉が欲しい停年期 山口県 藤本 星二
 十人十色我が道を行く外はなし 岡山県 福田 祥男
 だれにでも嫁くウインキー多情 大阪府 堀 風船堂

皇太子同妃両殿下歓迎

日米旗で歩道埋めする十万人 ホノルル市 蓮池 風草
 我が子あやす二度と出来 大阪府 木村よしを
 ドライと云うが理屈が通ってる 西宮市 鶴飼 鮎子
 見つけた伝言板の待ち呆け 大阪府 山田 蛙水
 横書きにとまどう明治のペン固し 愛媛県 菊池喜与史
 退院の土産は傷のあとを見せ 岡山県 横山 一声
 輪替え屋が来て秋らしく響かせる 西宮市 松島 光一

味の七

モダン川柳

心齋橋大丸北の辻東へ

御門

TEL ☎ 6684

御集会には階上御利用下さい

一丁目廿五(五) 明治40年8月23日
 日生(六) 大阪府(七) 日本国有鉄道(八) —— (九) お休みなさいと云うて女中の顔になり(一〇) 旅行(除団体旅行)・登山・演劇・映画等々(一一) 有(一二) 昭和四年頃

柳人録補遺

櫻井 六葉(明治33年3月25日生)

訂正
 若本多久志(昭和十五年六月)
 後藤 梅志(明治27年10月13日生)

故 夢助(電話③六九四九)
 (担当・西川 晃)

句評リレー



大阪市

須坂市

奈良県

大和高田市

友淵 貴山

高峰 柳児

飯降 白香

岩垣 日本村

青春朽ち果てて無罪判決

七面山

貴山||現代裁判の長年月を費すルーズさ、黑白の決め手のむつかしさを「青春朽ち果てて」と端的に表現されて結構です。こんな重大事をすらすらと詠まれた作者に敬意を表すべきなのに、余りにもすらすらとしているのでそこに軽さを感じる。ゴロから云っても裁判長の読む判決文をうっとり聞いているようで、無罪という大問題を「ああそうかやっぱり無罪だろう」位に割り切つて聞いているような軽さだ。

「無罪」と云い渡された瞬間の感激と、裁判の厳肅さをちよっぴりにじませてはしなかった。

柳児||大袈裟な構えでの表現で先ず注目を集めておいて「無罪判決」とあっさり終末を告げた手法は奇想である。ともすればこうした構想の場合、上江りになり勝ちのままとり、敢て生硬にも感じられずこの機構によって、世評の緩漫さを厳しく突いている。迫力

を持った表現形式がこの句の本命である。

白番||前に「埋もれた青春」という洋面がありましたが、何だか題材が似ているように思います。このような内容は小説に表現されたり、劇にしくまれたりすると余程長いものになります。あつさりまともな思ひも思ひます。

しかし現実には直面した場合果してこのように淡々と澄ましているのではないのでしょうか。

日本村||この無罪判決は単なる刑法第何条かの罪に対してとは見たくない「親の理解」と解釈出来ないだろうか、単なる裁判のルーズさであれば「青春朽ち果てて」とまで誇大表現しなくとも、もっと適切な語があると思う。私にはこの青春には女体さえ匂う。

七面山氏の因習への抗議とも見たい。

貴山||検事控訴、最高裁と未だ未だ裁判が続くそう。結局、「白髪になった頃無罪判決」と

け」の句である。因襲打破と見てこそ初めて佳句に推せる。善意に解釈しましょう。

政治家が一番悪い世となりぬ

旅風 貴山||「老眼をかけて政事の嘘をよむ」

同じ作者でありながら全く違った作者のような句風で、旅風氏にとつてリレー句評に取り上げられた事を大変迷惑がられた様が見える。失礼な云いようだが「政事屋」と云う三字の言葉を十七文字に引き延ばしたに過ぎない様に思える。中七の「一番悪い」とはつきり云い切っている処に、損があり無理がある。一番は一番、悪いは悪いに違いないが「一番悪い」に弱さがある。一番悪い現代の政治家を、もっともつと憎む言葉の中七に入れ換えて大胆に表現して貰いたかった。

柳児||昨今の政治家の評価は、格別風当りの強い時勢である。「一番悪い」がこの句の焦点であるが発表句では「いちばん」としてあって句主の表現に意を払われた忠実さは大いに買われる訳だ。ここでは「一番」と書き替えられて活字から受ける感じが少しく違ってくる。政治性といはつたこの社会にある独自の感覚を捉えて不満、抗議を訴えた哀嘆の姿でもある。

白番||たしかに現代はこの句にビタリ、ズバリそのものです。しかし、歴史の示すところによる

といつた時代に於いても一番政治家がわるいのではないでしょう。か。そういう点にこの句には普遍性があると思います。

日本村||二言目には政治家が悪いという昨今の世論、そして自己反省などはちつともない世相、政治家が悪いときえ云えばそれで済む人達に一矢を酬いた句で「然しあなたはどうですか」が美事省略されている。

貴山||切つても切れぬつながら、即ち政治家と汚職、一般としてこれだけならまだ許されるでしょうが、もっともつと悪い面を持つ政治家を川柳として取上げるに、句そのものが真正直過ぎないか。

柳児||或は事実であるかも知れ

株式会社 (コ) 丸越

電気器具	三丁目	六〇
瓦葺	三丁目	三
雑貨	三丁目	五一
洋装	三丁目	一〇四
靴	三丁目	一八
家	三丁目	一
呉服	三丁目	一
紳士服	三丁目	一

良い安い買いい 十九月私
月賦のデパート

ないが、表現手法をしてこうまで云い切らないで、川柳独自の余韻を持たせて痛い処を突いた方が、観賞する立場にも、この句の持つ臭みを妨げたかも知れない。

白香山私も柳児さんと同じ意見で、内容はまことにいいのですから、もう少し表現に川柳的な鋭さがあったりよいのではないかと思っています。一寸正直すぎます。

日本村政治家を「悪」と決めてかかってカッサイしてはいけません。政治家の中にも良い人と悪い人があり、悪い人は少ないのです。此の句の場合の「政治家」は複数である事に注意して「政治家が悪いときえ云えばすむ世を嘔つてゐる句」と見ましよう。反語とか逆表現とかは川柳独特であることを私は常に喜んでゐる。私は確かにほえましい句と感じる。

書置きははっきり処女を証明し
麗花麗
白香山私にはこの句ははっきりとわからないのです。何の、そしてどんな場合の書置か。

又何故処女である事の証明が必要なのか、作者はどこにヒントを合わせ何を云おうとしているのか。今少し考えて見たいと思ひます。

日本村死んで迄処女を証明したい「女心」と解したい。死の直前の遺書に偽りがあるう筈はなく、まっすぐに受取る。路郎先生の

「死は強しもう女中ではありません」
を思い出す。

白香山私にも感じた通り私には難解です。そのまま味わえといわれても、どう味わえがいいのか。

白香山前にも感じた通り私には難解です。そのまま味わえといわれても、どう味わえがいいのか。

日本村この句の「処女」と「証明」は離せない。こういう「書置き」と云うような深刻な事件に対しては余程きつい表現でないと「リズム」に穴があく、生命を辱けた女性の叫びとも聞える。

白香山私にはこの句ははっきりとわからないのです。何の、そしてどんな場合の書置か。

又何故処女である事の証明が必要なのか、作者はどこにヒントを合わせ何を云おうとしているのか。今少し考えて見たいと思ひます。

日本村死んで迄処女を証明したい「女心」と解したい。死の直前の遺書に偽りがあるう筈はなく、まっすぐに受取る。路郎先生の

「死は強しもう女中ではありません」
を思い出す。

白香山私にも感じた通り私には難解です。そのまま味わえといわれても、どう味わえがいいのか。

日本村この句の「処女」と「証明」は離せない。こういう「書置き」と云うような深刻な事件に対しては余程きつい表現でないと「リズム」に穴があく、生命を辱けた女性の叫びとも聞える。

白香山私にも感じた通り私には難解です。そのまま味わえといわれても、どう味わえがいいのか。

白香山私にも感じた通り私には難解です。そのまま味わえといわれても、どう味わえがいいのか。

日本村この句の「処女」と「証明」は離せない。こういう「書置き」と云うような深刻な事件に対しては余程きつい表現でないと「リズム」に穴があく、生命を辱けた女性の叫びとも聞える。

白香山私にはこの句ははっきりとわからないのです。何の、そしてどんな場合の書置か。

又何故処女である事の証明が必要なのか、作者はどこにヒントを合わせ何を云おうとしているのか。今少し考えて見たいと思ひます。

日本村死んで迄処女を証明したい「女心」と解したい。死の直前の遺書に偽りがあるう筈はなく、まっすぐに受取る。路郎先生の

「死は強しもう女中ではありません」
を思い出す。

白香山私にも感じた通り私には難解です。そのまま味わえといわれても、どう味わえがいいのか。

日本村この句の「処女」と「証明」は離せない。こういう「書置き」と云うような深刻な事件に対しては余程きつい表現でないと「リズム」に穴があく、生命を辱けた女性の叫びとも聞える。

白香山私にも感じた通り私には難解です。そのまま味わえといわれても、どう味わえがいいのか。

白香山私にも感じた通り私には難解です。そのまま味わえといわれても、どう味わえがいいのか。

日本村この句の「処女」と「証明」は離せない。こういう「書置き」と云うような深刻な事件に対しては余程きつい表現でないと「リズム」に穴があく、生命を辱けた女性の叫びとも聞える。

白香山私にはこの句ははっきりとわからないのです。何の、そしてどんな場合の書置か。

又何故処女である事の証明が必要なのか、作者はどこにヒントを合わせ何を云おうとしているのか。今少し考えて見たいと思ひます。

日本村死んで迄処女を証明したい「女心」と解したい。死の直前の遺書に偽りがあるう筈はなく、まっすぐに受取る。路郎先生の

「死は強しもう女中ではありません」
を思い出す。

白香山私にも感じた通り私には難解です。そのまま味わえといわれても、どう味わえがいいのか。

日本村この句の「処女」と「証明」は離せない。こういう「書置き」と云うような深刻な事件に対しては余程きつい表現でないと「リズム」に穴があく、生命を辱けた女性の叫びとも聞える。

白香山私にも感じた通り私には難解です。そのまま味わえといわれても、どう味わえがいいのか。

こりと痛み
サロンパス
久光兄弟株式会社
東京・佐賀・大阪

白香山私にも感じた通り私には難解です。そのまま味わえといわれても、どう味わえがいいのか。

ノートの関連性に弱いものが見受けられますが、舌足らずの感があったのは私の僻目でしょうか。
日本村II画をかきながら、ノートを、本人以外の者が見たら、粗末な落書としか見えないのではないか。画才があるんだと見てくれる第三者が幾人いるだろうか。この句は「画才」が生命である。川柳句稿ノートに一派相通するほほえましい句でもある。

貴山II私の考えは間違っているようだ。やはり親から見た子、と考えるのが妥当でしょう。ノート位いだったら才能を伸ばすのに安価ですむが……「画才のある子懐へゴッホピカン」だったら親は黙って居るだろうか。画才を育てるのに、貴重な代償も必要では無からうか、ノートでは安過ぎる。

柳児II「画才」と云った取組った格調が指摘を受けている。この場合「絵心」程度にして句の軽さを持たせたい、そうした場合親にある愛情が軽い責任範囲ではほほえみさえ湧いて来る。

白香II柳児氏が画才のことばを絵心と訂正していらっしやいます。私が、私もこの句からは画才とはいながら絵心の程度にしかうけ取れません、やっぱりテーマは微笑ましい親心と見ます。

日本村IIこの句の「画才」と「粗末」とは感覚が異なるのではないか。「ノートを粗末にし」は親の劣等感であり「画才」は先生の眼で見えられた優秀性である。「うち

の息子はノートを粗末にして困り

ます、くだらん画ばかり書いて」と先生に相談に行ったら先生から画才を説明され、喜んで帰る親であったとしたら、此の句は佳句として成立する。

○ 附記II第二句目「政治家が……」の句、原句は「いちばん悪い」となっていたのを「一番」と書き損じ、そのまま句評にまわしたのでそのまま、「一番」に対する句評がなされた訳で担当者としての責任痛感して居ります、文字の使用法による句意の変化など、常々口にもし、胆に銘じて慎重に取扱わなければならぬ私の過失を、評者並に大方の読者諸兄姉に深く御詫び申上げます。此の稿も郵送事故の頗発に可成りおくりおきです、評者高峰柳児氏に指摘された一事で、又此の過失も、何かの参考になるのではないかと存じまして、すばらな様ですがこのまま掲載させていただきます。

真鍋一瓢

病床記

須崎 豆 秋

そうですネ、私がズツとあの病院で居たとすれば、今頃は百カ日のお供養をして貰っていることに、間違ひなかつたでしょう。幸に大野病院へ急転院して、時を移さず、肛門、直腸を切りとって、横へ人工肛門を作るとい

う大手術をしてもらったので、裏門からでなく(註、病死すると裏門から出されます)、大手を振って、表門から退院さしてもらうことが出来ました。

こんないきさつから考えますと、生と死との運命は、実に紙一重の差で、どちらへ転ぶかもわからんということですよ。

私はこの輪になるまでに、病気を体験したことがないので、病気の川柳作品が全然ありません、強いて探せば、風邪をひいた時に作った、「結局ミミズ剪じたので瘡り」というのが一句ある位なものです。

ただ豚のような健康にまかせで、不眠生の限りを尽したむくい、今回の懲罰として肛門をくり抜かれたといううなことになりました。

私が入院と同時に決意したこと、は、もしこの大手術で、生還できなかつた際の置き土産として、死んでゆく道程を川柳で詠み残すことも、川柳家としての本懐だと思つたし、なお病床川柳は私にとつての処女地帯でもあるので、身心ともに衰弱して、気力もうろうたる中でも、作句はおこたらずやりました。

と言っても、病人は病人なりに忙がしく、昼は、御娯診、ガーゼ取替え、注射、放射線治療、等々々々、そこへ見舞客があつたりして休養する時間も、と切れと切れと切つた塩梅です。

そこで、私の作句時刻というものは、夜間特に夜明け前の一、二時間ということに決つて居りました。

この病床川柳が、九月の中頃にはすでに、二百句を越しました、この中から八十句ほどを抜萃して、「入院より試歩まで」を順序よく配列し句帖へ清記、その扉に「この病床川柳の句帖を感謝のしるしとして捧げます」と書いて、院長さんへ差し上げました。

ところが、院長さんも岡本圭岳門の俳人だったので、大いに川柳なるものに理解をもつてくれ、喜んでくれました。

こうした、川柳病床生活が、梅雨の頃から始まり、夏祭もお盆も、ここで空転して、朝晩秋氣を覚える十月ともなると、さすがに退院したいという慾氣が出て来ます。

退院はまだかとヘチマぶら下り
とうとう秋も深けゆく十月の下句になつて退院をさしてくれまし

秋寒し
不具者
となつて退院す
という心境です。
折しも折
「川柳平安」

十月男で、高須啞三味さんの「不具者の悩み」——不具の川柳家が詠う、という一文を読みました、カチンと突き当るものがありました。

その文章の要は、「……隻腕柳人は、東野大八と僕と二人きりだが、大八君は自分の隻腕の句をほとんど発表されないが、誰も知らなかつたことを川柳としてのごす、それにボクは「使命」を感じている、「真実を訴えた川柳」としてボクは隻腕川柳を作り出すべきである」とボクは思ひ、今それをボクは実行しつつあるのである」というのであります。

而し、私の場合は横へ人工肛門をこしらえて、そこから排泄したり、オナラを出したりするんだから、これこそ啞三味さんの隻腕に比すべくもない異状不具者ではあります、この体験を川柳として訴えらるとなると、嗅くて鼻もちなりませんから、これは絶対に遠慮したいと存じて居ります。

はなが下へ落ちて来ます。は、ここらで筆をおきます。

スマートに着心地のよい

O.S.K.

レディース

大坂商店

株式会社 大坂商店

〒941-1745 新潟県新潟市中央区大坂1-17-45

繪と川柳で表現する歴史 (第11回)

戸田古方

(20) 唐

南の揚子江の富と北の漢文

でブールということばをつかってみたのです。

日本はその唐文化に寄生し



化の伝統が文字通りむすびつ
いたのが唐でした。周囲のあ
らゆる文化を融合綜合し、そ
れを周囲に流しました。そこ
前の大化改新の絵につかっ

たジョウゴと妙な恰好の皮ぶ
くろを又ここにくりかえしま
したが、日本文化が唐文化の
おかげでふくらめるだけふく
らんだことをあらわしてみた
かったのです。

この唐文化をとり入れるた
めに大陸へいった船が遣唐使
船であります。造船も、航
海術も幼稚でしたので、その
船旅は全くいのちがけでし
た。

柳の芽礎石の上をふくやお

玉座から見れば百官華に似

天平史唐のことばで綴りた



夜潮逝く

夜潮・岡田芳夫氏が十月二十二
日午後三時十五分に、岡山県英田
郡美作町北山八六五の自宅で永眠

生路郎先生に師事。優秀作家の名
をほしいままにされた。昭和二十
八年八月十五、六日路郎先生を迎
えて湯郷納涼川柳大会を催すなど
美作川柳会のために尽瘁された。
遺子、守氏父のあとをついで川柳
に精進されている。

された。牌名、温修院恭仁
義芳居士。享年七十八歳。
氏は明治十五年十月十四
日津山市北町九番地に生ま
れ、旧姓石井、美作町北山
の岡田家の養子となられ
た。津山中学卒、卒業後県
立津山中学に教べんをと
り、後、校長となり四十九
才で退職、農業に従事され
菜園作りと共に川柳に親し
まれた。昭和廿七年五月五
日、川柳不朽洞会に入会麻

夜潮句抄

人前で蚤をつぶせる齢となり
預金部へ首の財布を外すしたり
禿頭さかなの骨のように分け
後任にアチャコ先生に似たのが米
意見して帰れば妻に意見され
年賀状女将の書いたものでなし
食い残し集めて末座まだ唄い
干竿を外す女に花が散り
枕木となつて一生終らんか
表彰は嫌だが洩れりやうら淋し
ポリーナスの空いた袋を妻捨てず
朝露に濡れても滞納だけはせず
御曹司膳に向つてふところ手
貯金帳母に見せたい女工なり
舞わそうとすれば舞わない女の子

(21) 天平文化

青丹よしとうたわれた奈良の都を中心にしたのが天平時代です。唐の長安をまねたといいますが、地図でみますと堂々たる規模であったことがわかります。

その天平文化のそのまた中心が大仏の建立でしょう。金光

明四天王護国之寺という寺号からしても政治と宗教のびったりむすびついていることがわかります。台座の蓮弁には中仏と小仏がぎざぎざ、大仏の像そのものが仏教国家の組織を象徴しているのです。しかし、形がそこまですくなく、威圧的で恐怖感さえ起しかねないのです。これからみても、この時代

うと、決してそうでなく、次の平安時代の主人になる藤原氏が他家を圧して、仏教を大切にするあまり僧侶はわがままになって、国政をみだしはじめるのです。天平文化といえは奈良東大寺ということになっていきますが、なるほど立派な作品の数々をのこしてはいるものの、

の中央集権が大へんよくすんだことがわかるのであります。古事記や日本書紀の歴史書、風土記の地理書、懐風藻の漢詩集など、それに万葉集の出来たのもこの時代です。お膝から小手をかざせば盧舍那佛

聖徳太子の理想を模範的にでき上げたけれど



見方によると、天平の諸仏は息をするように一首はよま

れたり

東野大八著

風流 人間横丁

価二百五十円
B6型 送費 三二円

★異常な戦争にまき込まれ隻手となって帰還した著者のザックパランな人生批判が、その雄筆からほとばしるさまは凄似ている。まるで腕の冴えた板場の切れ味にも似ている。

★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクたりしものに補筆した雄編である。随処に川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物としてお薦めしたい。

★出版予定日・昭和三十五年十一月中旬・五〇〇部限定版につき御申込は早く。
★ご送金は川柳雑誌社振替口座七五〇五〇番をご利用が便利で安全です。(切手代用可)

高鷲亜純著

詩川柳考

B6型函入 定価三百八十円 送費三二円

▼著者は曾て創生期ごろの超現実主義者であったがその詩論は詩人の民衆的立場を要請した/今は柳界にあって庶民の詩人的自覚を促す/ここに川柳雑誌社が誇る現代川柳批評家として世に送る/凡そ前向作家を自負する柳俳人絶対必読の書

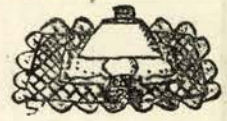
★出版予定日・昭和三十五年十一月中旬・五〇〇部限定版につき御申込は早く。
★御送金は川柳雑誌社振替口座大阪七五〇五〇番をご利用が便利です。(切手代用可)

発行所

大阪市住吉局区内
万代西5丁目25

川柳雑誌社

振替口座大阪75050
電話 大阪 6081



方正さんの 思い出

市場没食子

方正医博が今春からの思いです。つと御療養に務められていたが、薬石効なく遂に逝くなられた、病院のためにも、川柳部のためにも未だ未だ生きて、欲しかった、平常至って壮健な人だけに、この悲しい現実には誠に淋しい限りで夢のようである。

長い独身生活にピリオドを打って、昨年結婚され私共を喜ばせてもらったのに……一年余りの後この悲報に会うとは、誰もが予期せなかつただけに人生の果敢なさがひしひしと身に迫って来る。

今想い出の一边でもとペンを持てば、何を書いてよいのやら思ひ出が多過ぎて戸惑うばかりである。こよなく川柳を愛していられたのは先生の性格が、川柳味にそのままドンピシャり当はまる所があるからである。私はいつも思っていた。別段に第一線に踊り出ようとする意志も慾もなく、功名心も持たず、コッコツと己が分野の句境をまとめて、楽しんでられた感じがあった。職域の疲れや御勉強の疲れに肩をほぐすと言う思ひから出発された川柳愛ではなかつたかと思う。

先生は至って正直な性格であつた、それだけに怒りっぽい所もあつた、然しその怒りっぽさは我ままな点が可成多いようであつた。どこかに川柳的な雅気はほの見え、憎めなかつたのは、私だけで無かつたらうと思う。一本気な先生に事川柳に關しては怒らせまいと常に私は配慮していたし、私の先生感はそのようであつた。


私がまだ大阪重病にいた頃は多忙な中から暇を割いてよく葉局へ遊びにこられた(勿論午後でその頃は午後の診療時間はなかつた)若い局員達に冗談を飛ばし乍ら「市場さん川柳を作りに来ましたん」。「あなたの顔を見てると川柳が勝手に出来て来るねん……」とみなを笑わしてやがて出来た句をみなに聞かすべく読みあげながら「これとおだす」と言われるので「それよろしおまなア……」と返事をすると「どおでもよろしいねんやろ」と言いながらそれでもいぬに入つたのはボケッから句帖を出して書き止めて行かれたものでその一つに「ひね茄子走りの隅で不貞腐り」と言うのがあつた私の好きな句だから今も憶えている。「市場君のお蔭で今日は何句できたと全部読みあげて、スパスパ煙草の煙を上げつつ、時には興に乗って、若い女子局員にわざと面白い自作を披露して笑わされたも

のである。「尾崎先生で文句もよく言いはるけど愉快な所もある人ですなあ……」と誰もが親近感を持ったものである、仮令その句がその局員達を諷刺したり耶喻したり、又時に露骨な句であつても……。

大阪重病がまだ準備期間にあつて入院患者もなかつた頃、お会いした事はないがお名前は知つていた、川柳会発足の相談に竹荘君と二人で、診察場へ伺つたら丁度受診患者があつて、通気の最中であつた、看護婦さんに意を告げて取次を頼んだが、私が処置室を覗くと「今あかん待ってて」と旧知のような返事を顎でしゃくられた、こりや大分六カしそんな医長さんだわえと察じていたら、やがて治療がすんで頸帯鏡をつけたまま、私達の所へ来て「話は聞いてるやろやろ」と軽い返事で訳なく話をまとまつた。創立以来万年会長を引受けて頂いて職域川柳会として道をはずさないように導いてもらつたし、月例会には一番に会場に出てデンと腰を据えられてみなの待つて頭張つて下さつたのに、そのお姿も今はよく見る事が出来なくなつた。木当に前歯一本抜けた感じで寂しさが一入である。今鳥ヶ辻の若い人達に依つて、長い懸案であつた鳥ヶ辻句集をまとめて頂いている、是非共この句集を御霊前に捧げ以て御めい福を祈りたいと思つている。

奇跡起らず悲しき報せ受話器置く

酒



酒 金露

灘・魚崎

大塚合名会社醸

遺影見上げ合掌の手に涙落つ
句評に寄せて (3)
直原七面山

もしも一句が多様多様に受けとられるとすれば、それはその句の中のどこかに、見逃すことの出来ない大きな(致命的な)欠陥をもつている証拠であつて、他のなにものでもありません。

例えばこの「家計簿を見ぬかれそうなお茶を出し」の句にしても、もしそうながさうでになつていたらどうでしょう。

句意はまさしく評者の御評(A)のとおりであつて、そこになになつて、誰れ一人異説をさしはさむ余地が出来るでしょうか。

全く不可能の一語につきます。十人が十人否百人が百人この句から受けとる句意と感動は、必ず一つであるに違ひありません。

従つてこの句は、どんなひねくれ者が、どんな良いと嫌いが向う鉢巻をキリとしめて、手にツバキをぬり、他意に取つてやろう他意に取つてやろうといくら力み返つてみても、絶対に他意に取ることを許さぬ(拒否する)だけの厳し、いかめしい語によつて組み立てられ構成されて、完全に武装化されていと言つても過言ではありません。

そしてこの名句は、犯し難いまでの川柳への貞節観と、決して汚すことの出来ない清潔さと、あくまでも屈することのない偉大な力と、そして目もくらむばかりの輝かしい權威をもつて、私達の目の前に、その毅然たる雄姿を誇示して立ちはだかつています。

ために(この句の欠点)先述のような色々な解釈が生れて来て、人々を混乱におとし入れてるのであります。

そこでもし、この見ぬかれさうなが見ぬかれるようとなつていたらどうでしょう。

れるようならば、さうならばはるかに断定性に富んだ言葉であつて、Aのような評が生まれる心配も全然ありません。

藤生路郎先生の句に「俺に似よ俺に似るな」と子思いと云う名句がありますが、この句から二つも三つもの解釈を引き出して来る事が出来るでしょうか。

前田雀郎自選川柳三十五句 (4)

アール・エッチ・ブライス訳

Thirty five senryu (Witty Japanese Verses of the shortest type)
self-selected by Maeda Jakuro Translated by R.H. Blyth

打明ける 前に鏡に 来て座り
Uchiakeru mae ni kagami ni kite suwari
Before she tells him
All her heart,
She sits in front of mirror,

妻という 女ありけり 眼の辺り
Thuma to iyu onna arikeri mano atari
There is a woman
Round about me, —
My wife,

^{どうろう} 灯籠に 生きている身の 灯をともし
Tōrō ni ikite iru mi no hi o tomoshi
I lit the lantern:
The light
Of my life,

夕刊を 買つて勤めの 気を離れ
Yukan o kätte tsutome no ki o hanare
Buying the evening paper
I feel freed
From the day's work,

元日を 炬燵に覚めて 詩商人
Ganjitsu o kotatsu ni samete shiakindo
Waking in the kotatsu,
New Year's Day!
The merchant poet,

風の音 競う太夫の 声ばかり
Kaze no oto kisou tayū no koe bakari
The sound of the wind,
But still louder,
The reciting of the gidayū. (御召曲)

鉄兜 今日鍋となる ミコトノリ
Tetsukabuto kyō nabe to naru mikotonori
The imperial edict
Making the steel helmet
Into a saucepan, from today.

日の暮れを 我が家の溝も 流れおり
Hi no kure o wagaya no mizo mo nagare ori
The ditch of our house too
Flows
Through the dusk.

^{ことみき} 寿は どう崩しても めでたい字
Kotobuki wa dō kuzushitemo medetai ji
Kotobuki:
An auspicious character
However simplified.

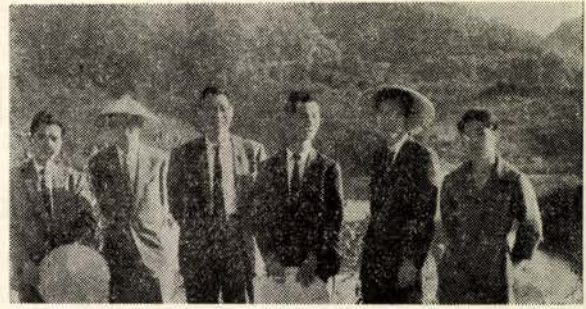
完

神経痛・リウマチに...



オサドリン錠は西独クノール社が多年
研究の結果、新発見した神経痛・リウ
マチ治療剤です。その作用は確実に
胃腸障害などの心配がありません。
(10錠) 350円・(20錠) 650円

オサドリン錠



砂丘入口で左から弦月・薫風子・日満・舟遊・満秋・和子諸氏(す、む撮影)

山陰の旅

鳥取・米子両句会に

出席した西宮支部の有志

晩餐のご馳走になる。当地の模様や大阪の近況等を歓談し、両氏のご案内で市内見物しながら会場である「りいち田房」へ着く。大西八歩・河村日満・杉谷湖山・森田若人・増田耕氏・渡辺寛・岩田八文銭・岩田秀和・小林由多香・福田多可志・山根宏春諸氏出席の和やかな句会であり、日満氏はNHK、及び毎日、若人氏は日本海のそれぞれの選者で活躍されている。

翌十月十六日午後一時から米子公会堂で川雑支部の米子松露川柳会の句会がある。

近代建築を誇る米子公会堂の会場は五十畳からの大和室で片面総ガラス障子入りの明るさという申し分がない。

午前中は出雲大社を参拝、それから米子支部句会へ出席という忙しきであったが、支部の方々のあたたかご歓迎をうけ一同感激する。三嶋美笑氏の後任として支部長である小西雄々氏は山日柳壇の選者であり、山陰随一といわれる古川柳研究家の湯原一机氏等、川雑でおなじみの方々の熱ある作句態度に接したことは大きなよこびであった。

小西雄々・湯原一机・城内吾柳

・沢車楽斎・山根素瓢・谷無閑・清水一歩・木下晴耕・杉本幸子・節枝諸氏は川柳塔・近作柳樽等で御存じ申し上げている方々ばかりで、大阪や西宮の句会にいるような親しさでいっぱい。

鳥取、米子支部とも活気にあふれており、これらの人々と共に席を同じうして作句できたことは大きな思い出となろう。

両支部の先輩諸氏にいろいろ御世話になったことを誌上を借りて厚く御礼申し上げます。

(河相すゝむ)

鳥取 砂丘

砂丘は秋の午後の陽差しの中にあった。

鳥取駅から砂丘口まで三十分バスの旅である、停留場のすぐ前には多鯨が池があり客を待つポートが浮んでいた。私達は菓草履と中華風の三角の日傘傘といういで立ちで緩やかなのぼり坂をゆくと両側に若々しい松の防風林が少年のように植林されてあった。

土産屋が見えて砂丘口近し

休憩所を兼ねた店先に名物の砂丘スキーがあつて、呼び込の売子の訛が耳に付くのも旅のことである、土産屋の数も少ないが土曜日

大砂丘足跡小さく斜なり

息切れを覚える頃に薫風子さんのカメラは私のポーズをとらえたが、後日、彼の自信作となった。漸うのことで大砂丘に登りきりま、一望に鳥影一つない日本海は青く遠く水平線は霞んでいきます。鯖を漁る漁船が点々と波間に浮かび都会の苦を捨てるにはうってつけであつて、十二分に旅の叙情を味いました。

何時また来る日の砂丘を振り返り

(樋口舟遊)

米子—大社—米子

鳥取支部句会を汽車の時間の都合で中途で退席した一行は、午後十時米子市寺町法蔵寺に旅装を解いた。法蔵寺は米子市にある寺院中でも歴史の古い寺であり木城弦月君の伯父様が住職をしておられるところである。風呂をよばれ夜食にとそばが出された。このそばは米子地方独特のもので、赤い器は三階建てであり、赤い加きセイロ式になっていない。博学を以て任する各々出された湯呑にダシを入れざるそばの要領に食べだしたものの味について賞めるものけなすもの、大いに通ぶりをしめしたものの、伯母君にダシは器へ直接かけて食べるものと聞き一同ギャフン、弥次喜多道中に突らんとな誰かが云えば大いに笑い旅の恥はかきすとはかり明日のスケジュールを定めて寝る。

早朝八時法蔵寺を出た一行は、は祖母君の急な病状に大阪との連絡を待つ弦月君を残し、米子駅から急行出雲へ乗る。玉造温泉からは新婚らしき数組が乗り込み、緑

事務用品全般
事務用スチール家具

株式 心斎橋クニヤ 株会

心 斎 橋 北 詰
電 ☎ 4740, 4741, 4742

結びの神出雲大社行きらしく華やかな車中となる。尤も一行の乗っているのは昔の二等車現在一等車と称する、乗車料金の何倍か割増しとなるべき車輻に赤い切符をポケットの奥に握りしめ専務車掌の通るたびになげなしの良心に胸痛めつつ、やわらかいクッションに身も落着かず坐ること一時間余に終点大社駅へ着く。

観光とは云えここは緑結びの神を祀る社、良縁を願う独身男女三人と妻帯者一人、独身者の願ひ事は聞かずとも判る。それは帰路にひいた神籤の縁談の項を真先に覗くからである。しかし妻帯者の方の願ひ事は何であるか尋ねたが笑うのみにて遂に答えず、御想像に委せるよりいたしかたなし。境坂を出て土産物など買おうち小雨降り来る。恰も帰りの列車の時間なり。

米子駅着午後一時雨はやや強さを増したがハイヤーにて公会堂へ、米子の柳友と交歓すべく急行臨時急造のスケジューには無事その一つを終えた。(菱田満秋)

皆 生 温 泉

十月十六日

米子駅からバスにゆられること約二十分、小雨降る夕暮の皆生温泉へ到着した。宿泊予定の白扇旅館をさがし求めながら海岸伝いに歩く。もし晴天なれば、日本海にあくまで青い海の色、亦右手には大山の雄大な姿、左には島根半島の最尖端、五木松で有名な三保の関が手に取る様に見られたとの事。残念がったのもあえて私一人

ではありますまい。さて、旅館に着くや、しばらく休んだ後、岩風呂へ案内され、薫風子氏、満秋氏、舟遊氏、そして私と揃いも揃って成形手術をした。



米子公会堂前で米子支部の柳友に囲まれた西宮支部の人々(すゝむ撮影)

泉は海岸にある所為か、全くの塩水。それでも岩にもたれながら広々とした風呂に身体を沈めておれば旅の疲れも、否、あらゆる雑務で、ああ、旅に出た良かったと一入感じせしめられるのであった。(本城弦月)

大山寺 行

だいせん じ ころ

十七日朝七時起床。(皆生温泉旅館「白扇」) 十時十五分大山寺行バスで米子駅前を出発目的の地まで一時間半の行程である。バスは街を抜け、街道を走り、やがて山狭の曲りくねった道をたどる。雨に洗われた山の緑の花のような黄で染つて美しい。バスは、針葉樹・落葉樹の交錯した中をぐるように走り続ける。道の両側は一面大きな熊笹の茂みだ。その熊笹に埋もれがちに、所々、小さな石仏があるのが旅情をそそぐ。ちんちんと鈴を鳴らしながら山道を辿った昔の人の面影が偲ばれ、鈴の音まで聞えて来そうだ。或る種の木々はもはや紅葉を終え、又或るものは一瞬一瞬目に見えて色葉を増してゆくような燃え方を見せていた。併し、山全体としてはほんのまだ一・二分程の紅葉なのだろう。

たものばかり、第三者が見れば何処のやくさかと間違われるのではないかと思われる程であった。唯一人手術をしておられない、む氏が、「肋骨の揃っているのは僕だけだとは淋しいが、君達の中に居ると僕の方が逆に片輪者に思われて。」などと冗談の傑作を飛ばされる。その岩風呂の中でも交互に写真を撮る。さすが誰も自己の切られている身体を写したくないと見えて、湯から首だけを出していた。皆生温泉は空気が冷えている。

大山寺へは昔むした御影石の急なきだはしが続く。十五分、登りつめると山ふところの台地に天台宗大山寺が鮮やかな朱の色で静まりかえっていた。石塔があり、青銅製の牛の像があった。参拝。鐘楼で「開運の鐘」を撞く。開運の鐘だから、たった一つゴーンと撞く。境内の松も杉も滴し止まず、雨後はしみじみ靈城という感を深くさせているようであった。拝殿で集印帖に大きな朱印を捺す、む氏の、脱いだソフト帽を、大きな山蟻が一瞬に越えて行った。山蟻の背に橙褐色の斑紋があった。これも秋の色だと思ひ、山の森羅万象に秋が満ちているのだなと思った。昔、僧籍にいたという参拝客の中の一人が鐘を撞いた。力強い響きで、鳴り渡るといった風に鳴ったが、余り近くに居たので、むしろ余韻に之しく聞えた。鐘の音は、空へ向って消えてゆくのではなく、重く沈んで無限に深く谷間へ降りてゆくように感じられた。

バス待合所では、バスの発車まで三枚の旅便りが書けた。バスの所在を訊けば、ほんの十周程のとこ

う。が見えない。気が付くと山特有のガスが急激に立ちこめていた。鄙びたポストに投函してバスに乗るや、忽ち、音を立てて篠つく雨である。私は且つてこの様な豪壮な雨を知らない。天の底の何処かが抜けたような雨。それは大山が降らす雨だ。その朝、周囲の雲は風に吹き流されて青空までものをそかしたのに、遂に私達の前に姿を現わさなかった大山が、乳よりも濃い霧と、車軸を流す雨との演出で、ゆくりなくわれわれの旅の心を満たしてくれることとなった。大山の雄渾な姿が、目に見るよりも一層ありありと旅人の一人一人の胸に残るのだった。

米子駅発十五時二十分の準急「しんじ」で岡山へ向った。川雑鳥取・米子両支部の皆様にお世話になりましたことを厚く御礼申し上げます。(橋高薫風子)

何を選んでいただくかは先様におねがいして
タカシマヤの商品券をお贈りするのにも心に
くい贈物かと存じます

一〇〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です

高島屋
大阪・東京・京都
3店に共通です



羽田を発つて

—アメリカ通信—

足立春雄

ロンドンから

パリーへ

アメリカからB・O・A・Cのジェットでロンドンへ向うべく飛行場に行った。何処も飛行チームでアメリカからヨーロッパ一周の旅行団の二組と一緒にいる。その団体を送り出しに来ていた業者の一人は「日本人か？」と話しかけて来て「此の十一月に日本を訪ねるからよろしく頼む」といい、日本の旅行事情についていろいろ尋ねた。自分の世話している団体の人より「Doctor, Doctor」と云って筆者につききりである。

大西洋を五時間足らずで横断してヨーロッパの門戸ロンドンに着く。過去の羽田を思い出さず様な汚い方の飛行場に着陸した。アメリカと大分趣が異なる。反ってアットホームの感じがして親しみ易い。

本のはなく窓も小さく、石や煉瓦は古色蒼然たる色をしている。街中も狭くて高麗橋や今橋辺りではしばしば見かける街並と余り大した差異はない。チームズもハドソンに比較すればうんと小さい。官庁街も日本の方が道中も広く堂々としている。大蔵省の窓辺に花が飾ってあるのには好感が持てた。シヨンプルの誇を秘めた壁の色

それに驚いたのは首相官邸である。どう見ても首相官邸というより街角のアパートと云った方がよい。前庭も門もあったものではない。道に面して三階建の建物である。警官が退屈そうに一人立っている丈である。日本の官邸もこうしたら

陳情もデモも狭くて入れません
な事になるだろう。
ロンドンへ来て誰でも先ず訪れるのがパッキンガムの宮殿である。此所の朝は名物の衛兵交代が見学の対象となっている。熊の毛皮の網笠を思わせる様な帽子と真

赤な上衣に黒のスボン——おもちゃの様な兵隊さんが軍楽隊入りでややこしい儀式をやってブカブカドンドンと引き上げるので、一時間程前からカメラを手にした人の群である。結構恥ずかしがらずに眞面目な顔をして歩いている。此の様な兵隊ばかりにしたら原爆や水爆の実験は無用になる。

兵隊はおもちゃであった方がよし
案内してくれた人の話では或時

狂人が一人宮殿の中に飛び込んで暴れたらしいが、此の衛兵は何処吹く風と眞正面を向いて立っており、警官が之を保護検束したと言う事である。

つくりものの様に衛兵立っており

その次に訪れるのはチームズ河畔の議事堂や警視庁の一角である。どの建物も古びており、過去の大英帝国の繁栄を物語っている様ではあるが、何かしら盛り過ぎた女性の厚化粧を見る様な感じがしないでもない。此等の建物は勿論一〇七八年頃に建ったもので、十三の古塔と濠をめぐらした二重の城壁とから出来ている。守衛はイギリス式の儀式ばった服装をしており Beefeater 又は Yeoman of the Guard と呼ばれ元来は農兵から生まれたものであると云われている。胸にいくつもの勲章をつけている。エリザベス女王二世より多くの国事犯が此所の罪人通運び込まれたと云う事で、一度この門をくぐった者は再び出た事が

なかつたと云われ、今でも首を切った台や斧まで飾ってあるし、拷問用の道具を陳列してある。世界一の大きなダイヤモンドや、ダイヤモンドをちりばめた王冠、王笏はせめてもの華々しい飾物かも知れないが、後は殆んど過去の鎧、兜や武器である。大宅壮一氏もその著書に述べている様に、極めて後味の悪い塔である。それ丈川柳の種もあるのだが、出来れば改めてロンドン塔だけを取り上げて見たい。

塔にしる大英博物館にしる……これはアメリカの場合にも少しはあてはまる事であるが、その影に侵略の歴史を秘めている様な気がする。従って博物館の見学は私にとって余り好ましいものではなかった。

その昔分取りました博物館侵略の歴史を列べ博物館
ロンドンをジェット機で発てば一時間と一寸で花の都パリに着く。飛行場からの町々に多彩な色の傘を広げたカフェーが並んでおり、緑の深い並木道はパリの旅愁をそそる。革命広場と名付けられた広場に面した宿が、今夜の夢を結ぶ所である。アメリカから見れば設備万端遅れているが、此も反ってパリらしくて良い。二、三日のエトランジェにパリを語る資格はない。エツフェル塔も語り尽くされておりの通天閣を思い出さる。

と著者が駄作をものした程である。エツフェル塔はセーヌと共に確かにパリのシンボルであり、セーヌの遊覧船で一日を過ぎたが、何処からも此の塔が見えてパリに遊んでいる事を教えてくれる。セーヌの水は左程美しくないが都会を流れる河とすれば致し方なからう。

セーヌ河詩をうたいつつ見るべきか
恋人と見ればセーヌも澄んでいる

世界の流行は此所からとも云われるシャンゼリゼの大通りはコンコルド広場から凱旋門に向う大通りである。コンコルド広場は中央のオペリスクの巨像に噴水が二つ作られており、広場の隅には此の国の代表的都市を象徴した八つの女神の像があつて、全く印象的な広場である。

シャンゼリゼ大売出しに女の眼
シャンゼリゼ銀座と同じ女の眼

芸術と共に生きようコンコルド
戦争に負けて良かったエトワール

モンマルトルの丘は非常に東歐的なサクレ・クール寺院の周辺にあり此の寺の廻りに盛り場が出来ている。街頭の絵かきも多く、絵を売つたりの似顔絵を描いたりしている。此の辺が賑やかなるの夜の十時過ぎからと云う事である。此の近くにシャンソンを聞かす酒場があるというので、一応見

学に出かけた。堀立小屋の間置に無数の絵を掛けた様な所で、中央の電気の下に五六人の歌手が坐っており、客は間置の壁に沿ってしつらえた板の椅子とテーブルで、ワインがブランドーカビールを飲んでゐる。常連らしいのが半量を入れたり一緒に歌ったりしてゐる。日本にも歌声喫茶とかいうものがあるのだが、何でもまねをするものだと感心した。然し此方は歌手の歌を聴く事に重点がおかれてゐる様である。アメリカ人の観光客の一群がいて勝手にしゃべりまくっているのが歌手の連中は厭な顔をしてゐる。ここにアメリカが嫌われる要素があるのかもしれない。

「シャッソンは飲みに来ただけ見れば」又モンパルナスの夜はうすぐらい灯のカフェーの傘の中の男に、女の為にすみを買えと云うお婆さんが歩いている。少年時代からの「すみの花の唄」を思い出して懐かしい気がした。

モンパルナス普通りのすみれ売り
モンマルトルの方は昔に比べるとさびれた様であるが、此の近くにはカフェーや料理屋が多い。料理屋という字はどうもその感覚が出なくなつて、レストランと氣障でも書き直す方が良い様に思われる。フランスでもう一つ忘れてならないものはルーブル博物館の事ではなくて、食の事である。フランス料理位世界的美食と匹敵するものは東の支那料理ではない

かと思われる。沢山の有名なレストランがあり確かに今迄のロンドンやアメリカの料理とちがって、テーブルの上で食塩其他で味付けしなければ食えぬというものはない。食の物に関しては暇と紙数が許したならば項を改めて書く事にする。

味よりもチップの方に気を取られ
憧れの街でも予算を忘れ得ず
エトランゼ美味臭いをかいだ丈け
裏町に住んでサ・セ・パリ・モンパリー

ローマの飛行場に降りると南国の強い光が眼に痛い位である。飛行場で荷役の人間の多い事も働いている人間の精神のうな眼付も、一寸日本を思い出す位である。イタリーでは盗難に気がつけろと云われていたし、大宅氏の著書でも汽車旅行中カメラを盗まれたと書いてあったり、日本の学者が何百ドルかの詐欺にかかったとか、靴みがきの靴のカガトを取られたとか、兎角予備知識として余りよい事を吹き込まれていない為に、眼付きが気になるのかもしれない。

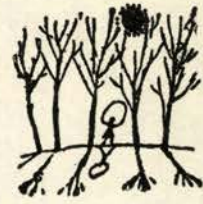
ローマ

見方によれば人が良いのか、ポーターのおやじが煙草をくれと部屋に入つてくはなし、その服装も余りきれいではない。
独房の様なホテルで一人ねる
翌日遊覧バスに乗ってバチカン帝国へ行って見る。カトリック教の総本山は面積僅か〇・四四軒平方の独立国で貨幣も別にあるし、切手も別、兵隊が守衛からぬサーベルも下げた者まで居る。中に入つて見ると外に並んだバスや車の数から想像したよりも多くの見物人で、ウツカリすると自分達の案内人を見失う位である。英、独、仏、伊のグループに分けて案内しているが、丹念に見れば一年以上を要する様なものが並んでいる。
百年を数秒で見る忙しさ
ローマは一日にして成らずである。それを一日や二日で見ようと云うのが無理で案内人の「紀元前何年前に何とかかとか一云つていゝるのも上の空で見て廻つたに過ぎない。ヨーロッパの何処へ行っても云える事であるが、中世紀までの絵画は凡て宗教画と云つてよく、或は絵師のお抱え主の武勇を誇示した様な戦争画で、中には切られた首を持って刺している女性の姿や、赤ん坊を嘔吐している兵隊の姿とか、仲々残忍な絵も少なくない。ローマ大帝国時代の浴槽もある。大理石を研き上げた西洋式の風呂であるが、一日十数回も之に入つたと云うのだから驚かされる。小原庄助の先輩である。庄助の影はローマで淡くなり

遊覧バスの劃一的案内に厭気がさして午後は一人でローマの街に飛び出して見た。予め地図で見当をつけて出たのであるが、同じ様な巾の狭い街並で、方々に見た様な噴水や彫刻が多くて、土地勘の自信のある筆者も西に向つてゐるのや東に向つてゐるのや見当がつかなくなつた。それでもとうとうテージュエン川の川岸まで辿りつき河畔をさまよつていた所雨になつて来た。さて宿に帰るうとしたが、又噴水と塔に眩惑されて遂に迷ひ子になってしまった。ピストルをぶら下げ長靴をはいた青年将校の様なのに出会つたので、英語で道を聞いたがイタリー語しか判らぬらしい。フランス語は苦手である。ふと横を見るとタクシの駐車場がある。之幸いと無げなしのリヤをはいたいで車で無事独房に辿り着いた次第である。ローマを歩くと噴水と彫刻とスクーターに出会うと案内記にも書かれてあるが、もう一つつけ加えなければならぬものがある。それは銃を片手にした兵隊が方々の街角に立っていた事である。第二次大戦に同じ様な経験をしたイタリーに、此の様な現象を見たのは今までの英米仏の諸国に見なかつただけ、奇異の感に打たれた。

大阪一名古屋 2時間27分
ノンストップ
近鉄特急
大阪上本町発 7.00 8.00 9.00
11.00 13.00 15.00
17.00 18.00 20.00
近鉄名古屋発 7.25 8.25 9.25
11.25 13.25 15.25
17.25 18.25 20.00
ほかに 大阪・名古屋連絡
伊勢ゆき 特急 運転
座席指定 特急券
の求めは 二乗車の日
近畿日本鉄道

之では安保反対も何もあつたものではない。学生さんが騒ぐ国は先ず世界の一等国には見られない事であるので、此の点ではヨーロッパで余り評判の良いくないイタリーよりも我が祖国は劣つてゐるのかと悲しく感じた。
水遠の都ローマを一口に語るためにテルミニ駅の前に立てばよい。映画「終着駅」で有名になつたローマの支閥口の近代的な建物は、ムッソリニの遺産とも云えるが、二十六番線までありエヤーターミナルも此方にあるが、此の建物の横に今尚若むした城壁の一部が残つてゐる姿である。
過去現在未来をつなぐテルミニ
此の未来であるが、イギリスでアルプス行きの為に薄手のセーターを買つたが、之がイタリー製であつた。聞く所によれば、ネクタイ等の上等は凡てイタリーから来ている相である。十銭ストアの安物玩具のメイド・イン・ジャパンと少し違う様である。



連れ子

西尾 葉選

連れ子がよく出来再婚しぶるなり 瑞歩
 連れ子まで遺産の席に顔を出し 圭井堂
 連れっ子のやせているのが気にかかり 笑太
 連れ子など問題にしない程に惚れ 実男
 連れ子して嫁く気になれぬ手内職 養流
 連れ子承知でもらいもめはじめ 庸佑
 どちらにも連れ子があつて世帯持つ 蜻蛉
 連れ子の目に今度のパパは敷かれて 一鶴
 本当の父と信じている連れ子 幽谷
 連れ子だが父を笑わすコッも知り ひか平
 行くゆくは連れ子と添わすつもりなり 同
 無理だとは思えど連れ子叱つとき たけお
 環境か連れ子おませな子に育ち 雄声
 連れ子だと一と目でわかる器量よし 宗太郎
 お使いはわたしがしませ連れ子なり 光郎
 当方に子なし連れ子の籍も入れ 同
 持ち寄り世帯のなみならぬない連れ子 生薑

一路集

ご隠居の守にと連れ子所望され 藤波
 貧乏へ嫁ぎ連れ子の手も荒れる 鶉汀
 連れ子もう黙っておらぬ齡になり 青園
 割り切つて連れ子氣のままに家を出る 豊年
 いじらしい程に連れ子氣を使い むじな
 出迎えの連れ子と二人だけの道 同
 運命を背負うて連れ子美しい 愛鳩
 唇を噛んで連れ子水を汲み 代仕男
 連れ子して氣転のまいた後妻なり 蛙水
 連れ子してまでと再縁に踏み切れず 旭峯
 黙々と今日も連れ子が爪を噛み 美舟
 連れ子して腹の立つ顔見せぬ嫁 隆史
 連れ子ない後妻をいかと頼み込み 竜蔵
 昼責めた連れ子を抱いて泣く布団 八九寸
 再縁の話連れ子でけつまずき 光福
 同じことしても連れ子は叱られる どんた々
 夫婦喧嘩へ連れ子もまきこまれ 峻紳
 意地でとる子が再婚の邪魔になり 井蛙
 連れ子ともどもしがとい嫌なりはてる 紡毛
 母のつくため息連れ子もう覚り 兼治郎
 やどり木のような氣持でいる連れ子 卯之助

連れ子また近所が味方すると決め 保夫
 秀才は連れ子実子皆鈍才 古心
 遺言に連れ子の分も書いておき 十九平
 連れ子だとかくし兄妹だと信じ 孝風
 連れ子でもよいと先方さん乗氣 同
 連れ子してゆくやりましたミシン踏み 雄水
 小さい方で連れ子辛抱してくる 圭水
 籍無情連れ子のショック多き 同
 佳
 親類に連れ子を白い瞳で見られ 花乃子
 持つてくる話連れ子の口ばかり 圭井堂
 連れ子して又ぞろ苦勞繰り返し 一鶴
 小遣を貯めて連れ子の無口なる 和三郎
 真直ぐに歩かぬ連れ子の物心 涼人
 人
 物心ついた連れ子にくたびれる 徹也
 地
 添い寝もさえずる連れ子一人寝る 義夫
 天
 叱つてもらえぬのが連れ子の不服なり 恵三朗
 軸
 連れ子しても女は奉公口があり

觀光

長野井蛙選

温泉の湯気まで素晴らしく眺め 竜蔵
 觀光課ちゃんと置いてる村役場 白楊
 見学は名ばかり觀光地で宿り 美舟
 お知らせ
 バックナンバーご入用の方は、
 往復ハガキでお問合わせ下さい
 川柳雜誌社
 觀光地の名だけが違うコケシ買ひ 忠三
 觀光地になった古さを塗り換える 徹也
 觀光地ゴミにびっくりして帰り 鮎子
 觀光地小銭も用意してでかけ 圭水
 觀光地リフト楽しく妻と乗り 蛙水
 觀光地旅館は派手な字の浴衣 鶉汀
 觀光地ここでもコケシ一つ買ひ 十九平
 觀光地財布を空にして発たせ 代仕男
 觀光地振れぬカメラも携げていき 同
 觀光地になつて湯治の客を避け 保夫
 心中の景物添えた觀光地 白葩
 出張のついでに回る觀光地 庸佑
 ロケ隊が来たら一躍觀光地 旭峯
 上げ底を矢張り買つた觀光地 実男
 焼判の下駄つっかけて觀光地 生薑
 ビーナツを發と食べてる觀光地 虎之助
 鐘一つづくにも銭の觀光地 むじな
 觀光の外人氣前をドルで見せ 繁太郎
 觀光へ宣伝カーの砂ほこり 祥月
 觀光の市がサーピスの阿波踊 蜻蛉
 觀光の客へむらがる夜の蝶 光福
 觀光もかねて大臣視察に来朝 雄声
 觀光に鹿も一役買つて秋 太
 觀光の海女のソビは播いておき 愛鳩

觀光へ神秘の扉まで開き 万古
 觀光バスそろそろ下卑な歌となる 圭井堂
 觀光バス秋にぬりかえよく稼ぎ 青園
 婆さんは觀光バスから押んで居 灯竿
 紙コップの酒へ觀光バスが揺れ 荻流
 陽は西に觀光バスも疲れ見せ 花乃子
 えくぼ道などガイドは云いわけし どんたく
 手のひらに富士山ものセバガイド 義夫
 バスガイド土地の訛も一寸入れ 山椒坊
 觀光美化されてアイスの影うすれ 一鶴
 觀光ブームだらりの帯も入れて京 雄声
 母国への錦觀光客で来る 万古
 一回で敗れ觀光客となり 宗太郎
 救護班も踊る觀光最終日 八九寸
 觀光の宿で土産の笛を吹く 灯竿
 觀光の土産だんだん手に重し 卯之助

佳

ドル箱を積んで觀光豪華船 藤波
 觀光のバスの要る橋を行き 保夫
 お上りと云わず觀光団お着き ひか平
 觀光地買わぬ土産も覗いて見 秀峰
 日程を話めた觀光バスに酔い 光郎
 フイルムを又入れかえた觀光地 幽谷
 鳩の豆莢つって食べる觀光地 弘道
 觀光旅館まだ汲取りと云う田舎 兼治郎

信心と觀光母を伊勢へ連れ 十九平
 スト決める議場を觀光地に選び 軒
 サイン
 少年フアンの病む枕辺でサインなし 瑞歩
 卒業も間近かたらい廻しするサイン 花乃子
 大男サイン一番苦手なり 豊年
 サインから消えたスターに悪罵投げ 紡毛
 サインする選手の顔は無表情 朝太
 挨拶もせずサインだけたのみ 幽谷
 寄せ書きへ紅一点の字がきれい 山椒坊
 サイン帳二冊目に来てゆきとまり 笑太
 キャッチャーのサインがきまらないピンチ 弘道
 慎重なサイン本塁打をうたれ 荻流
 療友のサイン大事に退院し 秀峰
 サイン一つもらうのに列をくみ 庸佑
 サイン帳学生時代を思い出し 同
 監督が唾の如くに出すサイン 万古
 サイン馴れて絵のような文字を書き 同
 天皇のサインが欲しい蒐集家 実男
 サイン帖思もおもいに書いてくれ 北海坊
 豆フアンに取り囲まれてサイン責め 崎 蛤
 サインする社長眼鏡をかけなおし 光福
 人遣いされてサインをせがまれる 一鶴
 サイン帖見ればドラの過去ばかり 繁太郎

後藤梅志選

寄せ書きのサイン楷書で律儀者 和二郎
 俵よ胸に抱かれたサイン帖 義夫
 サインしてマダム客種より分ける 酔夢
 代筆のサインと知らず大事がり たけお
 サイン帖に残る学生のアダナ 博一
 サイン帖時に親より大切がり 涼人
 大部屋もサインの稽古始めたり どんたく
 飲まに行くサインは二本の指で足り 同
 一冊はロケで詰ったサイン帖 八九寸
 すかたんに書けばサインも喜ばれ 隆史
 人気出たとたんにサイン求められ 竜蔵
 飛行機をおりたらいまらサイン帖 峻 艸
 悪筆と云わず俺のはサインむき 九 柴
 甲カツの様なサインを胸に抱き 宗太郎
 サインしてくれたスターが好きになり 光郎
 サインには窓の市丸とは書かず 藤波
 妻の出すサインどうやら酒が切れ 竜昭
 上役の顔曇天とサイン来る 徹也
 バッテリー股の間で話する 灯竿
 だじがるサインへ年令を笑われる 兼治郎
 サインして貰うマジック持ち歩き 卯之助
 ロケ隊の邪魔をしているサイン攻め 祥月
 鉛筆ですらすらすらすとサインすみ 雪美
 頭かいて尻かいて監督サインする 保夫
 悠々と勝ってサインも断われず 鷗汀
 サインのない落し物でも貰つとき 鮎子
 恋人が何かサインをして別れ 愛鳩
 サインする字をけいこする流行っ子 蛙水
 錦之助金光様でサイン攻め 旭峯

草野球サインの通り投げられず 雄水
 サインボール命の次に大事がり 蘭
 署名簿にスターサインの型で書き 十九平
 サインして講義の途中抜けて出る 生 薑
 山門に觀光サインして戻り 古心
 よそ行きの顔でサインしてもらい 春光
 臆面もなくサイン帖にゆつと出し 美舟
 うっかりとサインし借金の後始末 風草

鮮やかなサイン不渡りとは見えず 井蛙
 新聞記者よりも早いサイン帖 ひか平
 サインだけ見れば文盲とは見えず 圭井堂
 サインではもうあるたらぬファンなり 鶴汀
 夫婦にもサインがあつて場馴れする 孝風
 或る日ふとサインの書体変えて見る 代仕男
 このサインだけで値打がぐんと出る 圭水
 寄せ書きのサインが一つ一つ微笑み 恵二朗

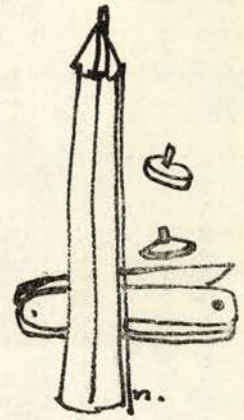
人
 若き日の押花があるサイン帖 雄声
 何千人分ノ一の力を署名する 東天紅

天
 すばしこいがサインの群をもうはなれ むしな

川柳雑誌社特製 投句用 柳 箋

一冊(五〇枚綴)三〇円 送料(一冊分)八円

柳界 展望



句会

▼本社師走句会は十二月十八日(日)午後一時から五時まで心斎橋大丸北の辻東五〇米北側大成閣で開催、柳友多数お誘い合わせの上参会を乞う。なお閉会後引き続き忘年の懇親宴を開く。▼南区医師会文化部杏林川柳会(大阪市)は十一月二十一日午後七時半から南区三休橋南詰中島小児科診療院楼上で開催。▼大阪通信病院川柳会は十一月二十六日(土)午後一時から当麻寺で故尾崎方正医師の追悼句会を催した。▼南海電鉄川柳句会(大阪市)は十一月十七日(木)午後六時から難波親和クラブで開催。以上路郎主幹出席。▼堺文化祭協賛堺市民川柳の会は十一月二十三日(水)午後一時から大小路西町労働会館で開催。▼故前田伍健追悼第五回四国川柳大会は十一月二十七日午前八時から西山興隆寺で開催。▼ひろしま川柳句会は十一月十五日午後六時から広島駅二階会議室で開催。▼国鉄姫路地区秋季クリエーション、あしなみ四周年

記念川柳大会は十一月十九日(土)午後一時から姫路駅二階会議室で開催。或續是一位正本水客、二位吉原紅月、三位泉比呂史の諸氏が獲得表彰された。▼毎日柳壇(広島版)第百回記念川柳大会は十月二十三日(日)午後一時から広島市内山陽記念館で開催。▼第一回柳都同人総会は十一月六日新津市観光ホテルで開催。

消息

▼井上湧三医師(大阪市)は十月二十日、学会の出席、研究所や病院施設の見学など所期の目的を達成して、二カ月余に渉る欧米の旅行から無事帰国された。▼八木摩太郎氏(堺市)は十一月三日午前九時、堺市文化団体功績者として堺市初の表彰式に参列、堺市長並びに教育委員会連名の感謝状と記念品を贈られ、意義ある文化の日を持たれた。式後の文化団体座談会では堺八景の撰定を提案された。▼速水真珠洞氏(福岡市)は十月廿一日に急に胃潰瘍が悪化し福岡市の西新病院に入院さ

れ毎日リンゲルと輸血をされていられるとのこと、一日も早く全快を祈る。▼小西無鬼氏(兵庫県)は城東中学校の生徒作品や、微笑園俱樂部という句会の指導やら篠山町の川柳界の新方面開拓に力を注いでいられる。▼橋本緑雨氏(大阪市)は十一月二日大阪市交通局川柳会から新大阪(市電川柳)二五〇号の記念に記念品を贈られ、退職後ますます元気に暮らしていられる。▼富士野鞍馬氏(東京都)は十月十九日日本誌四百号を祝福して、「川柳雑誌四百号とは素晴らしい」の句を寄せられた。▼長野井蛙氏(防府市)は十一月九日明治記念会館で挙式される令嬢の結婚式に参列のため上京された。▲沢田四郎作医師(大阪市)は十一月十五日付の読売新聞へ「七五三参りと昔の子ども」を執筆された。▼真鍋一瓢氏は十一月二十一日に広島県因島、向島の日立造船船同工へ出張された由。▼麻生路郎主幹は岡山

の山陽新聞社会事業団主催の歳末同情義金造成の書画工芸展へ色紙二点を寄贈された。これは公亮の上、育兒、児童愛護、養老、医療保護、司法保護などの社会福祉諸施設に配分されるもの。▼西いわを氏(大阪市)は十一月十四日富士五湖を巡り熱海の志ほみや館から、紅葉には既に遅く湖水に浮ぶボートさえ寒々として見えたのとたよりがあった。「本栖湖はボート寒々乗つており」▼水谷竹荘氏(大阪市)は十月三十日屋島から道後温泉、安芸の宮島周遊の旅を楽しまれた。▼永松東岸氏(岡山県)は最近原因不明の微熱と頭痛が続き作句のブレイキになっていくが、こういう時こそなおざりに句を作ってはならないと自から励ましていられる由。▼藤村梨花さん(大阪市)は十月二十日夜から九州一田の周遊旅行に出られ「阿蘇の景観、桜島の奇勝、さすが九州は火の国と云われるだけに、又、日本の発祥地という気がつくづくといいたします」との便りを寄せられた。二十四日は青島から宮崎を見物される。▼石川侃流洞氏(下関市)は昨秋以来の高血圧になやまされ、勤務はしていただけるが、最近入院寸前の状態だとのことのとたよりがあった。▼菱田満秋氏(大阪市)は十一月三日国民総行楽の日に伊勢・志摩の観光をされ「見せものの海女はボーズに腐心する」の句信を寄せられた。

▼前田安彦氏(東京都)は十月十日大野風柳著「浄机亭句論集」が

御贈答に

大丸の商品券

三百円・一万円

大阪、神三店、他
高知、鳥取、下関、
別子、博多に共通
一階 御堂筋側

不朽洞の人々



菊 沢 金 網 店 主

何時も栗氏が司会をすると決って万年青年小松園と紹介される。近ごろ坐骨神経痛で遠い道は歩けず急に老けた感じ。生業の金網が顔に出たか小皺も時に依っては網目に見える。明治三十七年生まれでは交通事故でも新聞に依っては老人奇禍と出ている。ウツカリ交通事故にも遇えない。此の顔で老人に近いとは肯定し兼ねる。

世の中の不平が顔の皺になり

(小松園)

十一月三日新潟県新津市駅前通り柳都川柳社から発行された。B列6号百六十二頁定価三百五十円。昭和二十四年一月二十一才で柳都川柳社を起し、現在「柳都」の主宰者並びに読売新聞新潟版選者である。

転居

▼吉本善風氏(尼崎市)は尼崎市大庄中通三ノ六五佐山千鶴子方へ転居。▼高橋尚史氏(大阪府)は大阪府南河内郡河内町大字白木一二八二の四へ転居。

不朽洞 会から

戸倉普天氏が今回、老齢のためと御家庭の都合上、会員を辞退されましたので、ムヤミな引留めも却って氏を苦しめることになりましたので、常任理事会ではかり、初代理事長として本会のために尽瘁して

飛・燕・往・來

★野村味平氏(加賀市)より

十一月二・三日と大聖寺公民館主催の文化祭参加、川柳作品展を錦城中学校で開催。掛軸・色紙・短冊など五十点を出品展覧しましたところなかなかの盛会でした。投句函を備えておいたところ、多勢の中学生が来て国語の課目で現代川柳を習っているが、ここに出品してある作品は皆古くていけないと云うので、私の掛軸「全学連デモを習うてどうする気」を指しこれはどうかと質問すると、うんこれは新しいと云うので「ではど

★並木東田楼氏(スワルルセ)より

先日はキレイな絵はがきを頂きましてありがとうございます。ちょっと松島の風景かなーと思いましたが勝浦の風景を賞でて一泊ご旅行をご子息ご夫妻と一緒に楽しみなされたる由、結構に存じます。家族的な旅行は旅行として実に理想的な Recreationだと存じます。

古書籍売買

天牛書店

南区千日前電停東
電話南西二〇二七

さて待望の川維四百号特集誌が到着いたしました。実は二、三日前に入手いたしましたので拾い読み程度にて批評などという大それたことは差ひかえませんが、巻頭を飾られた麻生路郎先生の「散步」のおすがたが、とても久に入ってしまった。橋のランカンにもたれながら何か静に瞑想にふける大哲学者か大詩人の面影躍如たるものがありますね。たぶんこの日は「水曜日本日休診」の佳き日だろうと存じます。それにいたしましても、左り足のクツのツマ先を

正誤

▼前号三九ページ「不朽洞の人々」の写真下の説明に「三和自動車工業にて(堺市)」とあるは「割烹大万の店主(大阪)」の誤りにつき訂正。

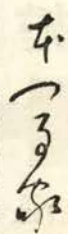
新刊紹介

自然(歌文集)自然歌会の人たちが十周年記念に刊行された歌や文を集めたもの。巻頭に新村出博士の「自然即興の初心歌」の一文がある。昭和三十五年十一月三日発行。B6版一六四頁。定価三〇〇円。大阪市阿倍野区西田辺一ノ一〇八阿倍文子方自然歌会発行。

忘年会には

あたたかい 鍋料理
すき焼と

もみじの名所
竜田大橋下車



電話竜田一六二二
料理は一流値は三流
酌は有芸仲居揃い
予約申込み受付

大阪連絡所(天王寺初)
九六五六
竹 荘、竹 青へ

友の会の皆様へ

山川 阿茶

筆無精して申しわけありません。

皆さん十月号の十五頁、飛燕往來の並木東田橋様のお便りを読んで下さいましたか。私は金泥集に対してこんな期待して置いて下さる方があるのを知ってうれしくもあり恐しくも思いました。表面に名乗り出ず黙々と皆の作品をじっと見つめ批判もし期待もしていられないと思えました。

婦人友の会は葎乃先生を中心に女ばかりの集まりでしかもこれだけ多数の女流作家

の集まりは日本杏、川柳が日本独得のものであってみれば世界にも類例のないグループと云っても過言ではありません。

大きくなればなる程風当りも強く批判の眼も多くなるわけです。女の人は家庭の中心位置におり内外務、農林、厚生、文部、大蔵、渉外と各大臣を兼帯している関係上なかなか多忙であり、若い人は結婚、妊娠育児と云う面もあって中断されたりして作句の思うにまかせぬ事もおありと思いがすが、直面する事柄をつかめば女でないと作れない人の心を強く打つ作品が出来るのではありますまいか。

投句者の無精をつかれるのが今の私には一番辛い事です。外の欄は中止されても金泥集だけはお忘れなく御投句下さってこの

欄がはち切れる位、葎乃先生がうれしい悲鳴を上げられる位にしたいものだと思います。

御健吟の程をお祈り申し上げます。

★ 男性禁断の特別室 ★

女流作家にだけ「金泥集」という別天地がある。男性からみればうらやましい限りである。「川柳塔」も「近作柳樽」も男女共学で女性禁断のスペースはない。

だからこそハワイの並木東田橋氏でなくとも「金泥集」は満天下の注目するところとなっているのである。

男性禁断の特別室「金泥集」は女の城である。その誇りを質と量でツンと磨きあげていただきたいものである。(F)

金 泥 集

課題 「先客」

麻生葎乃選

よいとこへ来た先客いける口 阿茶
 先客がゆずってくれた診察場 同
 先客へ出したお菓子の後がなし 同
 先客もやっぱり金を借る話 徳子
 先客が下に座って邪魔がられ 同
 先客に御馳走らしい出前来る 同
 先客は途中でまいた人だった 富士子
 先客の品定めする応接間 同
 先客らしい煙草口紅ついている 同
 先客と意気投合のバーの酒 奈良子
 先客の順を無視した馴染客 同

先客の長い電話へじりじりし 同
 先客が末席ゆずらぬまま 司会
 先客へもうP・Rもちかける 同
 中腰のままで先客まだ話し 美音子
 先客の土産の柿でもてなされ 同
 先客へもてなす酒をすすめられ 梨里
 先客と笑う声して待たされる 同
 朝風呂の先客マージャン仇きなり たつよ
 先客に味をたずねている 飯屋 同
 先客がわしづかみした特価品 美舟
 先客はさくらであつた夜店の灯 同
 一足遅いで先客になりそこね 一栄
 先客はどんな人かと妬いて居り 同
 先客はただ衝立が仕切るだけ 知恵
 特賞が当って先客張り出され 同

ねぎらずに先客あつさり買つて去に 清子
 先客にすまぬが痛さ待ちきれず 同
 先客も松茸さげて来たらしい きさ子
 先客の口にあわせて菊を褒め 同
 先客があつて支関払いされ 陽子
 先客があつて無心を切り出せず 同
 先客を待たし商談かたずける とも子
 先客の一寸気になる男靴 同
 先客へパトロンと云う顔で来る 周甫
 先客のざあますばかり庭歩く 酔夢
 愛想なしやつたと先客送り出し 美喜
 先客を越して抱かれるツインキー ちあき
 御婦人の客も来たらし香が残る 初穂

次回題「暖房」切十二月末日



精がつく薬

パント錠

副腎・肝臓強化

副腎に効くパント錠は精がつきます。疲れがとれます。

疲労・中年過ぎの精力、体力の衰え
二日酔・肌あれ・アレルギー・性疾患

20錠・50錠・100錠

第一製薬
東京・日本橋

いのちある句を創れ



投稿規定

▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼締切毎月十五日▼投稿先本社宛

本社文化の夕(大阪市)

11月7日 午後6時

会場——大阪観光ホテル

菊かおる文化の夕へ——道頓堀にネオンがともるころ、そろそろ本社十一月句会の幕あきた。

まず清水白柳氏の句評からはじまる。定評ある氏の句評は、新人の方にもよくわかり、句のあり方のいい勉強になるのでいつも好評である。(14ページ参照) 披露する選者もおもわず吹きだすユーモアの句へ会場の空気もいたって和やかである。楽しく明かるいひとときだ。主幹も健康をとりもどされ、あの独特の柳語を拝聴できる日も近い。

今月の不朽洞賞はアベノ支部の新鋭今西生薑氏が獲得されたが、まだ永久保持者がきまらぬので十二月句会は激戦が予想され柳趣いよいよあがる。(F)

出席者——路郎・東天紅・圭井堂・水客・三司・善風・堰子・すゝむ・大丘子・文蝶・梅志・庸佑・春渉・晃・一三夫・多久志・正一・徹也・いわ・潮花・柳太・白柳・柳宏子・梅里・静馬・一栄・清子・文秋・南宗・旅風・梅志・舟遊・醉升・紫香・いさむ・貞句朗・紡毛・恒明・永香・繁雄・好郎・瑞歩・ゞ女・与

呂志・奈良子・薰風子・阿茶・満秋・宏子・霞乃

兼題「古本」 麻生路郎選

古本屋ぶつちよう面で事が足り

どご掃除したのかわかぬ古本屋

大掃除たんびに古本愚知られる

四書五経やつはり亡父は偉かつた

半日にして古本屋になじみ

本売って病後しばらく食いつなぎ

古本があるので宿替えやめにする

読めぬせぬ亡夫の古本又しまい

古本屋偉い先生だと知らず

古本をしゃがんだままで読みあけり

その遺書に輝く祖父の為人

古本屋の前で別れる老夫婦

古本の定価に見せる貨幣価値

燈下親しめり古本ばかりにて

まだ売れてない古本にはつとす

古本となり全集がやると買え

チャタレーを別格にする古本屋

ほろ酔いの夜店で買ったハインの詩

ベストセラーもう古本屋に並び

乗り遅れチューインガムを吐き出せり

乗り遅れてもいいという老母を連れ

乗り遅れ信州そばも食べておき

乗り遅れに自動扉無情なり

サラの靴履いてるだけで乗り遅れ

乗り遅れ煙草を買いに戻るなり

つげ馬も客と一緒に乗り遅れ

乗り遅れたあいつが切符みんな持ち

たった二人のために幹事も乗り遅れ

終バスに遅れてからの水の音

駅員の指示に従い乗り遅れ

やけくそでタクシーを呼ぶ乗り遅れ

腰すえて又飲み直す乗り遅れ

引き止めて帰してくれぬ乗り遅れ

乗り遅れ駅の階段踏みはずし

一つだけ多かつたおどりで乗り遅れ

ブラットの風が冷たい乗り遅れ

あきらめて時計合わせる乗り遅れ

目の前で扉が閉る乗り遅れ

乗り遅れ自分の時計まだ信じ

ハイヤーで先に来ていた乗り遅れ

乗り遅れきれいな色で尾灯消え

薄命のとこまで似てた生き写し

初恋を思い出させる生き写し

生き写し又思い出す父の事

亡妻に生き写しだとくらんで来

生き写しなれど美人の系な子

偉すぎるの親父を持った生き写し

悪いとこばかり目につく生き写し

母の血の通りに生きてお人好し

生き写し頭の冴えを受け継がす

生き写し捨てた子の母とく分かり

デスマスク生き写し過ぎ気味悪く

持病まで親に貰うた生き写し

容疑者と間違えられた生き写し

声かけて引つ込みつた生き写し

二男の子の方が俺に生き写し

生き写し苦労した顔しない顔

生き写しやとアルバムひろげさせ

姉の名で返事をしとく生き写し

生き写しこの娘もひとの困いも

疑えばきりが無い程生き写し

生き写しですなとお世辞をつがなし

女癖それも貴方に生き写し

歴然たる証拠旦那に生き写し

亡妻に生き写しなどどときどき

生き写しとどきとどき過ぎ夫があり

吹き替への死に役もろた生き写し

生き写し告別式に混って居

生き写し夫にすまぬ子が生まれ

石段の数ヤンキーを喜ばせ

石段を二つとばしに逢いに行く

石段を下りたら買つてやる買つてやる

石段一人で降りるとママを恐るがら

石段へ記念写真が入れ替わり

石段へ来て孫の手を持ち直し

石段の高さ見上げから登り

賽銭も入れず石段下りてゆき

石段の汗受けとめる難しぐれ

石段を苦にせぬ程に信心し

石段の老母いたわる秋日和

ロングエイが出来て石段草がのび

石段も亡父の好みのたすまい

石段を転げる木の葉面白し

長崎で中道で鐘の音を聞き

石段の途中で鐘の音を聞き

石段のくの字くの字をのぼりつ

城跡へ行く石段は曲りくね

バスで行き石段と登らされ

金比羅の石段杖に助けられ

石段になって団体歌も出ず

石段の途中で帽子ころげ落ち

石段を数えてみるも旅心

清子

梅志

東天紅

柳太

潮花

文蝶

文秋

三司

一鶴

紫香

青風

静馬

薰風子

好郎

香林

どんたく

花乃子

祥男

日満

一鶴

紫香

南宗

奈良子

文蝶

与呂志

恒明

奈良子

紫香

青風

薰風子

東天紅

善風

真九朗

繁雄

好郎

昏

昏

昏

昏

昏

昏

兼題「石段」 後藤梅志選

見返って見上げて石段またへなり
 石段の途中で血圧気にし出し 堰子
 石段をのぼれば幼稚園のうた 水客
 くったくもなく石段の敷をよみ 東天紅
 石段をよいことにして手をなま 阿茶
 石段を敷えてのぼる七五三 好女
 お神楽も聞え石段足早く 清子
 石段のへこみに苔が青白く 文蝶
 石段をころころ秋の実がこぼれ 水客
 一つずつ一つずつ石段は虫を聞き 圭井堂
 石段の上から孫にひやかされ 水客
 石段の靴を追い越すソラ草履 一三夫
 陽のぬくみのこし石段たそがれる 晃
 元日の足石段で重いこと 梅志

席題「新薬」 土井文蝶選

新薬の何が効いたか覚えてず 圭井堂
 新薬をテストにされて気がつかず 好郎
 新薬を女にかくす更年期 潮花
 新薬がじやんじやん出るのに黒焼屋 阿茶
 新薬を又買うて来ておこられる 恒明
 新薬に替えたが酒はよめとらぬ 恒明
 新薬を飲々買うてノイローゼ 清子
 新薬を飲んで後から風邪をひき 南宗
 ノイローゼ又新薬を見つけて来 多久志
 似たような名で新薬が売り出され 庸佑
 新薬をのめと値段には触れず 舟遊
 新薬が好きでどこも悪うなし す、む
 新薬へずらりと博士ならべられ 恒明
 新薬をこすりこんでる禿げ頭 晃
 新薬をこすり飲んでいる自信 旅風
 新薬へ当座は効いたように言い 三司
 新薬を無理矢理輸のちがう妻 紮毛
 新薬へ芸能人は狩り出され 繁雄
 スポンサー新薬名を読み違え 柳太
 教えられて来た新薬の名を忘れ 三司
 また新薬かと細菌もあきれとり 庸佑
 新薬のサンプル恐々のもんでみる 好郎
 新薬をやいとやほろくそにくきし 好郎
 パリモードのうちに新薬出来てくる 青風

速効の新薬一年分を売り 好郎
 新薬を一字違つたまま覚え 水客
 出張の旅に新薬買いい揃え 柳宏子
 効くような気がして新薬買わされる 三司
 新薬のホルモン老いらく追い回わし 一三夫
 新薬のコーンシヤル子供がもう覚え 東天紅
 新薬をアクセサリーに持ち歩き 一采
 新薬は日本の言葉見つからず 永香
 新薬のお陰楽しい旅となり 正一
 カタカナの薬やさかいのんでみた 圭井堂
 新薬をやつてまんねと肌を脱ぎ 柳志
 やぶ医者の方が新薬ばかり呉れ 青風
 新薬よりげんのしようこのまぐ体 梅志
 新薬のあとで胃散もちょうと飲み 柳志
 ひよつとしたら又新薬にだまされる 柳志
 新薬に神農さんも戸惑いし 文秋
 口銭の多い新薬すすめられ 阿茶
 新薬のききめ階段二段ずつ 文蝶

席題「低姿勢」 若本多志選

麦めしがライスカレーへ低姿勢 一三夫
 低姿勢だけを教えて選挙すみ 白柳
 そのうちに馬脚あらわす低姿勢 す、む
 下心ありとにらんだ低姿勢 柳宏子
 文関へかかれは生酔い低姿勢 柳宏子
 低姿勢きょうはすつかり髭をそり 梅志
 折にふれ鏡が見える低姿勢 圭井堂
 庭掃いて逆らわぬ人になつては 水客
 低姿勢女房いよいよつけ上り 恒明
 何を言うつもりか頭ばかり下げ 晃
 低姿勢過ぎで女房は不安がり 正一
 船場出の社長かくせぬ低姿勢 満秋
 低姿勢借りに来たなとすぐわがり 好郎
 低姿勢理想はたく持っている 酔樹
 孫子まで養子にすまい低姿勢 旅風
 低姿勢その足許を見つめられ 好郎
 頼母子ですつた女房の低姿勢 文蝶
 低姿勢鳴かず飛ばすのままとなり 瑞歩
 借りのある視線と会うた低姿勢 恒明
 梅里

した手に出ることもほろ酔い知つている 水客
 結局はやぶへびだった低姿勢 恒明
 たんまりと持たせて里の低姿勢 阿茶
 低姿勢その夜は妻を悲しませ 潮花
 低姿勢煙草一本頂戴な いわを
 外泊の理由ごまごま低姿勢 多志

席題「ホテル」 丸尾潮花選

旅館ホテルのラーベル貼る若さ 一三夫
 お一人ですかとホテルに断られ 好郎
 冗談のようにホテルへ誘うて見 青風
 ホテルから豪遊二人つき出され 一三夫
 ハナムーンのホテル教えたことにせず 堰子
 外遊のホテル住いにあく便り 奈良子
 ホテルの派手なホテルと言うネオン 柳宏子
 ホテルの出迎え和装の女が出 東天紅
 温泉が湧いてホテルが立ちならび 奈良子
 ホテルずれしてか女の悪びれず 晃
 ホテルでもよい水洗気に入らず 正一
 かごぬけにホテルの電話使うなり 白柳
 ふところがピンチに落ちたホテルなり 恒明
 豪華街裏はホテルの灯が並び 紫香
 随筆をホテルの椅子で書きおわり 柳
 はじめてのホテルトイレにうらえる 文蝶
 刺刺のホテル食事は外で食い 柳太
 逢引のホテルは別なところから出 文蝶
 名ばかりのホテル便所のおいがし 恒明
 しやあしやあとお手手つないで出るホテル 圭井堂
 ホテルから掛けていけると驚かし 水客
 ベン伸びずホテル代にもなる日々 一三夫
 ホテルから真昼の恋が灯に消出 梅里
 湯の町の夜はホテルの灯が流れ 潮花

川維 阿倍野支部句会 (大阪市)

金井文秋報
 ハンドルは下げて来た子の土産 唯義
 妻や子もハンドル一つで生きている 義介
 ハンドルを握ればめしの食える腕 梅志
 こころ踏めば落ちる物干まだ使い 一三夫
 物干の布団へハズのお手をかり 奈良子

本社 全出席者(十一月現在)
 句会
 多志・柳宏子・満秋・薰風子・紫香・一三夫・舟遊・文秋・静馬・阿茶・庸佑・圭井堂・す、む・旅風・三司・徹也・宏子・霞乃
 不朽洞賞受賞者
 采・いわを・梅志・青風・保美・南宗・徹也・潮花・一三夫・生薑
 天位受賞者
 ⑥一三夫⑤阿茶④牧人③夢虹・梅里②青風・徹也・三司・潮花・梅志・南宗・いわを・晃①采・永断・与呂志・好郎・和楽・静馬・良子・奈良子・紫香・狂二・す、む・柳志・多志・舟遊・淡舟・正一・保美・日満・水客・敏明・旅風・文秋・井平・梨花・高史・庸佑・満秋・玲人・柳宏子・春果・恒明・どんたく・史風・新子・美恵子・万楽・亜鈍・いさむ・堰子・生薑・春渉・薰風子

川維 玉造支部句会 (大阪市)
 シーズンの間だけと言う店構え 白柳
 シーズンを外して着いた村芝居 小松園
 寺の鐘一つ敲くに客は来る 十九
 低音にみんなが気付く声変り 文秋
 合唱のバスにラララをだけ細め 山薑
 声がわりしてと息子を目を細め 生椒坊
 オイコラも言えずボリッの低姿勢 光福
 遠慮してイヤイヤをる瞳の愛し 亜鈍
 両横が手持ち無沙汰な社長席 す、む
 遠慮する友へ妻からじれて来る 清人
 遠慮するように持ち込んでも策士 大略
 壁一重少し遠慮のいる二人 奈良子
 遠慮すな実は着て行くものがない 堰子
 遠慮せずどつかと坐る左きぎ 喜仙

西出一米報

駄々ツ子と火車サイレンの後を追ひ 守信
自宅だけ大きく書いて地図渡し 水京
四つ角で地図くろけてアルバイト 清子
老いの化粧エチケットと悪びれず 一栄
禁煙札淋しくかすむ映画館 清
女には甘く見えてるエチケット 文秋
エチケット弁えずぎて狭く住み 貞句朗
税務署で弱音はくのがくせになり 句念坊
刺刺は弱音はいてもぶんどられ 正一
うまいこと弱音はかずに借りてる 貞句朗

川 淀川支部句会 (大阪府)

木村水堂選
多数派の影もうすれた資金難 赤丹
多数決多数決で押しまくれ 灯子
左選でも多数の人に送られ 陽子
商品もないのに見本たんと見せ 幽谷
選挙政策多数へ媚びる線を出し 清生
指切りをした彼女に迄裏切られ 句念坊
妻の座に据えて彼女のアヲを知り 礼司
孝ならんとすれば彼女と縁が切れ 六童子
一人だけ彼女が欲しい秋の空 三舟
そろばんをはじいた彼女ももう逢わず 若菜
間違った過去の人生つきまとい 水堂
間違いのままでお客に儲けさし さぎす
間違いの文字から犯人足がつき 花村
病状無視予算の都合でしめ出され 一鶴
御都合が付けばと悪友誘いに来 東洋男
重役の御都合主義も板につき 香林

川 雑 にしなり支部句会 (大阪府)

後藤梅志選

嘘つきにまた騙されたと言えず 旅風
婦人科は嘘も承知の処方箋 柳志
ひやかせばシヤガの泡をぶつける娘 唯義
栄養と一緒に泡が吹きこぼれ 言也
白タクの方が気がるに飛んでくれ 舟遊
さめるにしたがって白タクが怖し 千尋
忘れもの白タクだったからあつて 太路

川 雑 ハワイ支部句会 (ハワイ)

策山快夢起報

波しびき需れてうれい二人なり 峯円
嫁が来てからが家庭に波が立ち 泉水
四海波静かどころか倦怠期 快夢起
茶所に生れ番茶の日がつづき 拜山
お茶の味しみじみわかる齢になり エス子
お点前に粋な仲人かしこまり 平八郎
老夫婦無言のままでお茶を飲み 芥平
淡々と恋の懺悔にお茶を入れ 旋花麗
電波ではさぞや美人とアナに惚れ 周防
胸の波かなわぬ恋でおさまらず 防舟
茶にせよと手伝衆にヒヤを出し 暁星
一本の紫煙が消えてお茶が入り 緑星
暇乞すればお茶など没むと言う 紅辰
けだもの心鎮めるお茶を入れ 浅太
波枕夢路に浮ぶ母の顔 萩路
太陽と季節にまかせ波の上 銀水
年波に勝てず眼鏡の度がすすみ 柳葉
防波堤がなんだと津波笑って居 風草
波と雲下に見てゆく空の旅 玉屋
茶籠手に湯気の行方を祖母の 青嵐
一言が電波に乗って国がもめ 弦月

川 雑 岡山支部句会 (岡山市)

浜田久米雄報

波枕別れ煙草のはろ苦き内海 潮
金婚式世の波乗りを終えた顔 美潮
電化の日老漢潤士の眼がうるみ 一声
クレーンの汽車ももう電化され 蛙柳
電化には遠し月見の山の駅 香林
東京へ行ける車掌はうらやまれ 東岸
一人旅車掌にくどうくどう聞き 東岸
赤とんぼ貨車の車掌をなぶり来 麦太楼
日帰り泊らざる妻になりに 春菓
里帰りの旅プランコを急ぎたて 香林
商魂を裸になつてから燃やし 輝次
軒先にはみ出商魂たくましく 基司
商魂のくじで餅網ばかり当て 胡風
嚴重に納税節くれ立った指 美音子
税金をしびり天理へ積み上げる 洗心坊
滞納を押えて来たに秘し 芳月
同業者税金ちよとと妻に合し 雷山志
税金はふれて総理の如才なし 雷山志
税金としゃられて使所へかけてゆき 凡平
交番の迷い子片言やと云え 陽子
ママ一人だけが片言みな分り 幽谷
片言が朝寝のババを馬にする 三平
国自慢柿のうまさか云い切れず 久米雄
音痴また調子はずれで接押し 葵丘
酔っている音痴一行程飛ばし 秋月
酔っている音痴一行程飛ばし 秋月
酔っている音痴一行程飛ばし 秋月
聞いただけが好きと音痴のしおらしい 佐加恵
宴会が音痴の歌で盛り上り 哲朗
商魂に負けて財布のひもがとけ 道雄
ひやかしの客に商魂寄つて来る 喜百
地下街を出ても商魂待ち構え 博翁
商魂もここまで来れば狂気じみ 半翁

川 雑 大聖寺支部句会 (加賀市)

野村味平選

あのそのと身振り手ぶりの生半橋 花江

川 雑 備前支部句会 (岡山県)

水松東岸報

宿題を母ちゃん半分背負わされ 竜池
曲り角無口な人が口を割り 浄漱
停年が間近に迫る曲り角 幸仙
曲り角ですと易者に指摘され 一声
団体へ名残のテープ義理で持ち 万女
すばしい子供が曲り角で抜き 胡風
聞き耳を立て狸寝入をした幸さ 三六
お土産の半分新屋に持って行き 伊久野
独り身の案外少ない貯金帳 美音子
独り身の入院母だけ見舞に 秋月
独り身も一軒前の寄附が要り 明良
曲り角ばかりの過去を振りかき 道雄
ラブレター半程程が人の智恵 美舟
独り身が夜業残業引き受ける 美舟
曲り角書いてもらった地図を出し 輝次
尻馬に乗った単車の時のさず 流風

色紙短冊

書画用品

文房具

丹精堂

支店 東京 丸の内線 丸の内駅 丸の内ビル

もう半分残った月賦の色がはげ 博
曲り角噂の人に突きあたり 賤女
曲り角わなにかかったかと思ひ 久米雄
尻馬に乗す気意見をききに來る 東岸
お名残りへもうよからうと汽笛鳴り あやめ

川維 松江支部句会 (松江市)

勝谷山川児一周忌

梶谷冬生報

甘党にされて不服な秋が晴れ 縁之助
甘党の歯に紫蘇の味がまだ残り 梟人
甘党が隅で茶漬けを食べており 豚光
甘党の手拍子だけは派手に打ち 豚児
入場券荷物の役を引き受ける 雪美
入場券どうにもならぬ義理を持ち とし子
寄附金のつもりで入場券を買ひ 乱雪
割当で入場券が売られて來て 冬生
一生を台無しにしたきこ雲 舞吉
一生の仕事を表状一枚 篤司
一生を連れ添う妻を親が決め 与根一
独身のボケッとお小銭派手に鳴り 孤呂二
心中の遺品へ小銭淋しそう 祥月
つり銭はあめ玉となる子の使い 二子
煙草買う小銭子供の手で熱く 三子
哀れさは不具へ小銭の音が鳴る 代仕男
世話役の席一つあけ酔いはじめ 時紀
人がいいで世話役引き受ける 和歩
神様のことで世話役つかれて來 酔歩
性こりも世話役を買つて出る 一兆
朝寝してキセルの先でマッ寄せ 修
母親が居て里帰り朝寝させ 明
鼻唄で帰りの茶を沸かす 可
鼻唄で嫁の放埒終い風呂 英城
鼻唄でデートの朝の窓を明け 由正
やりくりも出来鼻唄のチラシヨ 田歩
鼻唄が出るほど酔っている無口 雲南
真直ぐに上るの丸新記録 快哉
真直ぐに書けず横書き好きな恋 大鳥
まっすくな道干拓の設計図 紫叻

川維 西宮支部句会 (西宮市)

若本多久志報

髪を梳く時に女は偽らず 千尋
一本釣つくづく海の広いこと 一十
代理では埒があかぬと抗議する 大丘子
お帰りの気配へ爛をつけ直し 和三郎
ウィンキー人種の差別なく愛し 舟遊
代理では済まず拇印を押さされる 正祐
ウィンキー売物でなく店に置き 修
ウインキーの気配へ小舟碇あげ 三舟
灯籠を流して海へ灯をとほし 啓子
ふと海の青さへ沈みたい気がし 鮎子
海の広さへ揮一本負けていず 薰風子
もう秋の気配熱い茶をよばれ 一傘
伸び揃うまでは待てない櫛を買ひ 弦月
感傷もなく金々に明け暮れる 弦月
船頭の気儘にさせと海の上 静馬
酔い痴れた朝を女の櫛でとき 杏花
貧血の手が秋風をはや感じ 一夜
快方の午後の陽さしへ櫛を持ち 幸
折詰を持って代理はすぐ帰り 三司
代理来てはかんと吊し上げにあい 牧人
気配から育ての親は座をはずし 白柳
涙みずの出る感傷は古稀を過ぎ 多久志

川維 篠山支部句会 (兵庫県)

酒井ひか平報

台風の跡の野道を蟹急ぎ 可住
送られる野道へ月も遠慮して 万女
誰が置いて居るのか野道の葎籠 明子
とんま顔いたち野道を横へ飛び 凡石
野良帰りに聞かせる浪花節 美千代
年寄りば野道へ外れては踏み 美千代
みち問えば鄙には稀なまよりよし みのる
与野党の意見どちらも当り前 幸風

川維 明和病院支部句会 (西宮市)

西尾青一略報

一坪の庭に水まきすだれあげ 雅夫
夕涼みお国自慢に花が咲き 正雪
緑台も溢れるばかりの子沢山 誠
夕涼み腹掛けだけはさせて來る 三舟
横丁のパアがやっぱり板につき 東雲
横丁に來て真実ふとももらし 芙路
横丁へ曲つたらしい声になり 千尋
横丁を三まわりしたら喧嘩すみ 光一
まっすくに帰れを今日も背でまき 弦月
まっすくの少し見劣する弱さ 山友
まっすくな気性生意気とも見られ 球
盆踊り脱けて二人でランデブー 珠月
盆踊り提燈議員の名が入り 三三
豊作を喜び合つて盆踊り 寿栄

川維 弓削支部句会 (岡山県)

直原七面山報

切るまでは迷いましたがと松葉杖 只世
だまされたと教えてくれた千切れ雲 喜菜
あんなに目も眩した娘の希望 ちとせ
仲人もあいつつかした娘の希望 ちとせ
窓ガラス自分の猫背見て歩き 賤女
冷やかな人と夜汽車へ乗り合わせ たつよ
グラビヤの浴衣いままにも踊りそう 竜児
冷やかな人と夜汽車へ乗り合わせ 美沙
同年の訃報へ早寝すると決め 山茶花
台風の夏の香りを持って行き 山童
かたくなな心にしみる秋の風 天童
何一つ不服もないわね子の寝顔 天童
鈴虫に被止場の恋の影が消え 房宝
あの人のものと思えば血もまきれ 房宝
ほろかすに馴れた女房太り出し 生薑
追憶を払い払うて今日に生き 周甫
警棒が一足さがるのんだくれ 醉天
意地張ってそなた女房が鼻どき 宰子
意地悪な獅子に追われハッセル 天仁坊
不合理と知つても意地が妥協せず 武蔵
とつおいつ迷うて人生終りが来 柳谷
信心が迷い初めて 家も売り 杏
俺の子もはり持った意地つ張り 漠太
角張った背に意地つ張り 静湖

川維 名古屋支部句会 (名古屋市)

野田一念報

宿題の手伝いママは涉どらず 不二郎
坊やまで木切れを運ぶ日曜日 千明
手伝に追われ我が身に疲れが出 清流
デイトする時だけまた名古屋弁 千種
天王閣指してガイドの名古屋弁 明一水
ナモノの名古屋弁にあやられ 文鳥
高利貸味もそつけない返事 文鳥
秋刀魚焼く臭で味覚の秋を知る 瑞雲
腕白の二挺拳銃味な真似 中野
せつちあな人よ行先聞かず行き 千古
孫に手を引かれて急ぐ発車ベル 千代春
嫁人がじきで速成科へ通い 一念
税金に勝てず手持ちを売急ぎ 三乗

川維 浜寺支部句会 (堺市)

川村好郎報

折れそうな体へ帯をきゅっと締め 浩青
新婚の帯は夫と共に締め 東天紅
かけ声と背延びてうしろ帯が巻け 武助

品質優良 洗ペン先 TACHIKAWA PEN 立川ペン先株式会社

帯しめて君い眼同志式を挙げ 狂二
 控抜の鈴が顔出す帯を締め 裕邦
 鈴ついた帯がついた七五三 操子
 帯解いてからお土産の紐を切り 末一
 お百度を踏む人の帯解けかかり きさ子
 声援だけは惜し気なく送り 雄声
 応援の舟士候補の名を忘れ 圭井堂
 いっかな秘伝まだとつぎを定めかね 古方
 強気で通りマダムの寂しい夜 好郎

川雑 米子支部句会 (米子市)

再会の涙へマイク向けられる 雄々
 再会のつきぬ話に酌み交わし 布堂
 総選挙すんだバツジで再会し 詩郎
 再会では勝ち成績で見直され 青溪
 喧嘩では勝ち成績で見直され 一保
 夕立に濡れつつすましたハイヒール 一机
 夕立に休より月賦の服案じ ユリ子
 夕立に縮み上った一張羅 節枝
 東西のやりとり次第にほろが出る 秋人
 喧嘩する度胸があつて恐妻家 翠月
 裏の裏考え喧嘩派手に見せ 虞究
 もう一人の私に背をむけながら 天邪鬼
 新世帯三日目頃から邪魔な母 精耕
 名月に恋の涙をのぞかれる 幸子

川雑 広島支部句会 (広島県)

平田越舟報
 灸すえる日課が残えて母は老い 美文
 前身に触れて尼僧は人目避け 上利
 強靱な意志が尼僧にしてしまい 一荷
 又してもくちでの勝負妻に負け 洋児
 ベール取る尼僧の顔のうす化粧 うしを
 羽二重にチャリと鉄吸い込まれ 方川
 雲水も美貌の尼僧に湧くなやみ 昌幸
 勝負師のまけた話も大き過ぎ 越舟

川雑 高知支部句会 (高知市)

大西迷窓報

新記録ブルの水も美しく 博理
 美しい顔して欲はたと持ち 婦蛇
 風切つて歩いた昔なつかしみ 百日紅
 泣かされた幼な馴染に情があり 砂丘
 負けている方へ情の野次がとび 千佐子
 情かけかけられ夫婦五十年 利子
 二子の娘ライターをする情あり 醉雀
 寂しさは一人も産まず更年期 呑洋
 物足らぬ夫に見えろ更年期 句念坊
 更年期又かんしゃくを破裂させ 康裕
 恋愛も昔の夢の更年期 木精
 飲ん平の父の隘口さえぎる子 松竜
 新婚を鼻で笑った更年期 迷窓

帝化川柳会 (大阪市)

谷沢好祐報
 独り言云うて積木はよく遊び 雄水
 ワインドに女が殺した独り言 晴暉
 独り言ボソリ殺し屋圍に消え 蒼芒
 無精髭のばして凄味見せて居り 風柳
 無精髭撫で撫で盤へ腕を組み 好祐
 試験管に明け暮れ今日も無精髭 京一樓
 無精髭のびて困突まだ続き 一平
 無精髭落したババを見直され 一徹
 天魔の裸堂々にらみ合され 雅堂
 裏長屋みんな裸で気がねなく 辰始
 湯上りの逃げる裸をパンツ追い 孝夫
 マネキンの裸女乱舞する夜警の灯 真砂老
 九紫

大阪通信病院川柳会 (大阪市)

橋本幸男報

年寄のこまめ女中の続きかね 草右
 浴室も女中の意見少し入れ 竹青
 女中さんへ甘えて見たい一人旅 史業
 記念日も端役うろうろするばかり 没食子
 空かんを叩いて踊る安来節 幸男
 缶詰でがまんさない妻不在 露児
 後刻また何う付けが万の嵩冠者
 請求書は置かしてもち取りくる 春雄

請求書マダム笑顔と共に出し ハナ子
 カタカナで来たアルサの請求書 愛論

南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻圭水報

検札へさつとみせたは期間切れ 宏子
 検札で楽しい夢を打ちきられ みなづき
 検札をうまく逃れて火をつける 鳥莊
 乗換の駅を 検札念を押し 貴山
 稲刈の様に 検札切り終り 烏莊
 検札も人なり規則まけてくれ 圭水
 確信はあるが 検札低姿勢 路郎

コクヨ川柳会 (大阪市)

川口理休報

洋室も良いがと老母軽く逃げ 狂史
 洋室に長刀のあり旧家な逃げ 傍石
 親が来て寝る部屋だけが和室なり ほとん
 白足袋の一際白く洋間なり 狂史
 権利金握って物件惜しくなり 正敬
 救急車通った後の暑さなり 留鈍
 救急車押んで泣いたこと忘れ 理休

明和川柳研究会 (西宮市)

樋口舟遊報

銅像も眼を閉じて夜の闇見 夢虹
 都会の夜罪の意識をうすれさせ 夢虹
 ミラーボールを中心に夜が廻る 薰風子
 夜の不安人格もろく崩れさり 舟遊
 夜霧降る夜はともせる丈ともし 千尋
 唄ならばうたえて音楽三十点 慎太郎
 手拭がパーマを包む茶摘唄 和三郎
 愛嬌があつて貸売りせんマダム 柳志
 ビジネスと云う愛嬌のつけはくろ 正司
 尋問に罪の意識が下を向き 三舟
 罪なこととしたとこつ母に云う はるを
 ラフニング黄葉山へ流れ来る 旅風
 普茶料理旅の心の標の絵 水客
 梵天はこれかとみんな立ちどまり 太路
 睡蓮へ鳳凰堂の鐘が鳴り 牧人

十円の音で梵鐘鳴り終りす、む
 宇治橋の雑沓あがたさんへ向き 万葉
 賽銭をふつと惜しんで罪があり 紋太

富柳会句会 (富田林市)

阿部柳太報

退屈の果が箱根でゴルフなり 紅月
 たいくつす雨の日曜を子はきらい ふうじ
 二次会も村長さんは顔がきき 摩太郎
 酒くせが悪く二次会ほつとあれ 増治郎
 天井低うも溜息も出ぬ生活 六竜子
 民生委ため息ばかり聞きあるき 周一
 わけもなく溜息の出る倦怠期 東雲楼
 ほつといて溜息きつい声となり 生薑
 七色の夢を醒さすとどけ天 八郎
 子の花火ババがマッチをすてやり 尚史
 花火大会善男善女人の渦 ともこ

たけるべ川柳会 (岡山県)

野々口美舟報

傷心を包みきれずに死出の旅秀波
 時々スリルがほしい程平和 只世
 スイッチを切つてテレビの子を帰し 賤女
 白木屋で見栄を包んだ贈物 古平
 銭別をかるくする気空涙一喜
 けち喚び妻がはずんだ月給日 喜案
 文字だけが達者達筆だつた御銭別 山彦子

梅里の店

大 萬

★大万川柳(第百十八回)を募る
 兼題「ガールズランド」 路郎先生選
 締切・十二月十五日 五時以内
 発表・十二月廿一日 (店内掲示)
 投句先 阿倍野区松崎町三ノ二
 大万川柳会宛

酌よし 千日前大劇裏
 TEL②二七〇
 味よし アベノ橋近映地下
 TEL⑦〇一四七



★私は九月の末から、電気座布団を敷き、電気炬燵を足許に入れて寝る始末だ。だいが元氣を取り戻したとは云うものの、まだまだ一人前の健康人だとは云えない。老婆などは暑い暑いと連続で、アセモを出して困っていた。十一月の末になっても、朝の内の電話へ出るのに、まだ浴衣着であったり、肌ぬぎのままであったりする。

これは異状体質なんだろうが、私とは両極端である。

★選挙もすんだが、当選する人が当選し、落選する人が落選したという感じしかない。もともと、これは私の住んでいる大阪第一区の話であるが、おそらく日本全国ともそうなのであろう。当選しても、立派な人だとも思えない人もいるし、落選はしても、尊敬に値する人もいると思えるが、今の選挙の仕方ではどこまでもグレンシャムの法則が行われることであろう。いっそ、現在の違反行為の全部を違反行為としないで、自由にバイシユもキョウオウもやらせて見てはどうだろう。そして投票は各人の自由ということになれば、公明選挙だの、違反取締だの検挙だのという、手数と費用だけでも助かり、そのために要る費用だけの税金を軽減することが出来る

るだろう。キョウオウをしても、効果がないことを知ったら候補者もキョウオウしなくなり自然に公明選挙に落ちるのであるまいか。一ベン断行して見ることだ。

こんどの選挙で私の区から出た石田正一候補の選挙公報には「人類は悲しからずや左派と右派(路郎)」が掲載され、BKの改送にもこれを用いて、彼の世界連邦主義を強調していた。彼は尾崎野堂の秘書をしていた人で世界連邦主義者だが今回で五回連続落選した。彼の落選は違反をしないから

新年号へあなたの
年賀広告を

★一口金二百円。幾口でも申込んでください。

★一口分の原稿は住所と姓と雅号程度。活字指定はおまかせ願います。

★一口分は五分の一段組三行。

★原稿締切は十二月十日着便

募るを廣告年賀交人柳

★広告料は前金のこと(郵券代用でもよろしい)

川柳雑誌社

の落選で、落選はしても、だんだん票数は殖えているところを見ると、いずれは当選するだろう。彼の信念と忍耐によって最後の勝利の来たる日を行っているものは私

だけではあるまい。

★私たちは年中、句を選んでいるが、私の句を当選させてくれと、おじぎをする人もいないし、バイシユやキョウオウをする人もいない。又そんなバカバカしいことに応じる選者もいない。多少ともそうした不純な気持ちで選句をしたり、投句をしたりする人たちがあっても、それらの人たちは井戸の中の蛙として柳界からは認められないからである。ここに、世俗と趣味の世界との相違があるので、欲と二人連れではどうてい趣味人にはなれないのである。

★「短詩文学作品展」の会場へ、東京から福富雷画伯が東京上野の松坂屋百貨店で個人展がすんだのでと来阪されるし、山口倫子女史がソ連やパリに遊んで来た姿を見せてくれるし、会期のさなかに、尾崎方正追悼句会が大和の当麻寺で修されてそれへ出かけた、り、そうした記事も書きたいが、誌面がないので割愛した。

★本誌の誌券四〇〇号を祝う記念出版は景気の好さと、選挙の忙しさで、印刷所が多忙をきわめたため、「詩川柳考」と「風流人間横丁」と一冊一印刷所の方針で着手したが何れも予定から少し遅れることになったのでご諒承が願いたい。「詩川柳考」は目下校正中であり、「風流人間横丁」は、製本中であるから、十二月初旬にはお手許へ届けることが出来るように思う。

歩散のペン

▼1960年度の十二冊目をここにひとどけします。毎年同じようなことを書いて新春を迎え、そして「来年こそは」とこの十二月号で反省するのです。

▼世はクインスタント時代です。組み立て用インスタント住宅から、食卓の即席飲食まで正にスピード、スピードです。しかし雑誌はそうも簡単には本にならないし、作句においても一夜漬けのインスタント(即刻)ではダメでしょうが、早くて良いものに越したことはないでしょう。

▼よい新春をお迎えくださいませ(一三夫)

- ★十二月の会 ★川柳雑支部
- ★淀川句会・9日(金)六時、題青年・残業・留守宅、所、十三西之町五丁目東淀川郵便局。★京都句会・16日(金)夕、題、微光・導火線・閉口、所、四条錦手仲源寺、★南海電鉄句会・22日(木)六時、題、スピード・転勤・縮切所、難波親和クラブ、★弓削句会・月末〆切、題、毛糸・雑詠二十句以内、所、岡山県久米郡久米南町下弓削四五四直原七面山居、★西宮句会・16日(金)六時、題、割引・味・巾、所、阪神西宮駅北出口スグ西宮労働会館、★玉造句会・10日(土)七時、題、勇氣・空箱・フィナーレ、所、市電玉造南百米大阪信用金庫、★阿倍野句

川柳雑誌社

婦人友の会新春句会

日時 1月29日(日)午後一時
会場 中島小児科診療院樓上
大阪市南区三休橋南詰
西 電話 3984

兼題

「同居」麻生腹乃選
「和服」中島小石選
「美容院」太田良子選
「誘惑」山川阿茶選

席題

当日発表(二題)
三百円(食費共)

投句先

大阪市南区二ツ井戸
町二三 山川阿茶宛

- 会・21日(水)六時、題、真心・借り・セールス、所、旭町二丁目金塚会館、★明和研究句会・11日(日)一時、題、葱、所、阪神鳴尾駅東南二百米鳴尾公民館、★にしなり句会・11日(日)六時、題影・いびき・狙う、所、玉出新町通一ノ一後藤梅志居、★かがみ句会・12日(月)七時、題、ウイスキー・宝石・満・事実・年末風景、所、池田古心居、★米子句会・11日(日)一時、題、味・遠慮・夢、所、米子市公会堂和室、★倉敷句会・3日(土)六時、題、買い上手・看板・おしゅれ・気楽・私生活、所、水島弥生町四ノ三一福原一善居。

食品と科学

食品と原材料・機械・包装の総合誌

12月号発売中

130円(〒12円)

特集

- 即席食品時代きたる
- 大豆蛋白の特性と使用実例
- 精製大豆蛋白は時代の寵児
- 西独の食品添加物規則

講座

界面活性剤の食品工業への利用
抗酸化剤の性状と利用
チューインガム香料の考察

- ◇ 海外ニュース ◇ 特許ニュース
- ◇ 意匠ニュース ◇ 商標ニュース

【展望台】主食・繕治・菓子・飲料・添加物

大阪市住吉区西五丁目二五番地
電話 545231-4
食品と科学社
大阪 6702番

麻生路郎著

好評噴々

川柳雑詠

川柳の味の方・五百数十句

(毎日新聞評)
麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというから川柳歴はもう五十五年にもなる。この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑詠」に掲載されたものを中心にその他の柳詠や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁寧な注釈を加えて、鑑賞の手引に資せうとした

ものである。
句の方より実はその鑑賞文の方がなかなかうがっていて、一気に読ませる魅力がある。

発行所

川柳雑詠社

電話 大阪 6702番
郵務口座大阪七五〇五〇

価二五〇円

送費三二円

B6版

二五〇余頁

あなたの句帖が出来ました



★路郎好みだけに、すばらしく気がきいていきます。句会でお使いになるなり、抜けた句の整理にお使いになれば、何冊かであなたの句集の礎稿が出来ます。又柳友への贈答に、句会の賞品にも最適です。是非ご利用下さい。

川柳雑詠社

大阪市住吉区西五丁目二五番地
電話 大阪 6702番
郵務口座大阪七五〇五〇

川柳親どころ子心

若本多久志著 麻生路郎序

「川柳雑詠」の川柳塔及び近作柳博の中から親どころ子心を討った秀句を多年に亘って根よく拾い蒐めたのが本書である。巨蔵された柳人三百余名、集句二千余は親と子の愛情が如何に深いものであるかを知らしめることの出来る、実に有意義な書である。

川柳雑詠社

大阪市住吉区西五丁目二五番地
電話 大阪 6702番
郵務口座大阪七五〇五〇

printed in Japan

川柳雑詠社

発行所
B列5号 毎月一回一日発行
昭和三十五年十一月廿五日印刷
昭和三十五年十二月一日発行
大阪市住吉区西五丁目二五番地
電話 大阪 6702番
郵務口座大阪七五〇五〇

募 集

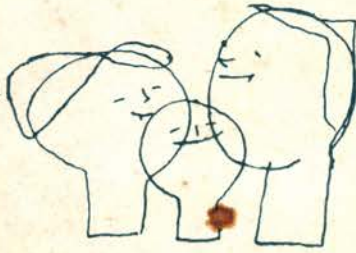
課題吟募集

- 値上り (十句以内) 土井文蝶選
- 愛称 (十句以内) 水谷竹莊選
- 足音 (十句以内) 石川侃流洞選
- 催促 (十句以内) 松江梅里選
- 迷惑 (十句以内) 山根白星選
- 近作柳博 (雑詠十句以内) 麻生路郎選
- 川柳塔 (雑詠十句以内) 麻生路郎選
- 文章 (評論・研究・感想其他) (毎月十五日締切)

投稿規定

▼ 投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼ 「近作柳博」は一般作家の雑吟を募る。
▼ 「川柳塔」は誰でも投句が出来る。

一家そろつてホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL ④551-2



あみ上りのよさ!

スキー毛糸

倉敷紡績株式会社



麻生路郎先生著
川柳とは何か 送価 二五〇円
 三三〇円
 川柳の作り方と味い方
 川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。
 絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたまろ
 もろが十七音に圧搾された諷刺と諧謔の短
 詩型、それは伝統的であると共に常に革新
 的であるその川柳がいかにして發生し、経
 過し、今日に至り、将来に動か、しかも
 その作り方は、味わい方は——以上を最も
 明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる
 著者が答えているのが本書である。

取次所 川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区払方町27 電話東京29507



万人
 その名を知り
 万人
 その味を賞す



世界の名酒

サントリー

オールド 1,600円・角瓶 1,250円

洋酒の素屋

昭和廿二年七月三日 第三種郵便物認可
 発行(毎月一回)日発行
 編集 廣
 發行印刷人
 原三三郎 発行所
 柳雑誌社
 大阪市住吉区西内方四丁目二十五番地 電話大阪六〇八
 電話東京二七五〇五番
 定価七十円(送料別)